研究紀要

第 14 号

（目　次）

論　文

歌謡儀礼論 －儀礼歌の名残(一) …… 木 村 重 利 … 1

高校生の傷害の発生と実態調査 …… 音 海 紀一郎 …(1)
町 田 みつ子
音 海 哲 子

6世紀後半後期ローマ帝国に関する近年の
Prosopographyをめぐる一考察 …… 倉 橋 良 伸 …(11)

英国に魅せられて …… 河 野 直 樹 …(35)

1996

獨協中学校・高等学校

歌謡儀礼論

―儀礼歌の名残(一)

国語科　木村重利

一、「うた」及び「謡う」ということ

「うた」の起源については諸説があり、それぞれ相応の説得力を持っていて、そのうちのどれかに軍配をあげるというわけにはいかないし、そもそも「起源論」なるものの常で、これこれに定まると説ききれるものではないだろうと思う。今ここでこれまでに提出されている歌謡起源論を一つ一つ持ち出す必要もあるまいし、ましてや新たな起源論・起源説をうち立てようというのでもない。ただ、恋愛・感動・信仰・祭祀といった諸起源説の命名に見られるごとく、「うた」が人間のある高まった感動、押さえきれない心の内なる思いによって表出されたものであったろうことは動くまい。そして、その表出される時と場というのは日常のそれではなく、したがって「謡う」という行為も日常のそれと区別される特別なものとして意識されていたと思われる。

つまり、「うた」及び「謡う」という行為は、普段・日常の行為・感情とは別個のものとして生まれ、存在したということである。日常の行為・感情とは別個のものとして区別される側面ということになれば、それは特別なトキ、特別なバにおける特別な行為・感情ということである。

人の暮らしの中で具体的に見た場合、特別なトキとはどういう日であったかと言えば、まず、生産生業に携わる「働く日」「稼ぐ日」に対して、それを中断しあるいは区切りをつけて「祈る日」「祭る日」であったということになろう（注1）。別な言い方をすれば、「特別な日」というのは、日常の暮らしを振り返り、点検して節目をつけ切り替えてくために用意されている日である。さらに言えば、日常が人と人との関係であるとすれば、「特別な日」とは人と人の力の及ばないモノ（カミとかホトケも含めて）との関係において営まれる日であったろう。

したがって、「祭る日」は「働く日」に対比され、「まつる」（祭る・祀る）という行為にこめられた思い（感動）は、「祝う」（斎う）であり「祈る」であり「感謝する」ということであり、その思いの表白行為の一つが「謡う」（「言い立てる」「唱える」も含めて）であろう。もう少し言葉に関して言えば、日常の「話す」「言う」に対して、「語る」「唱える」「謡う」ということが特別な日の行為であり、そういう発唱法で口に出された言葉の連続（まとまり）が「うた」であったということである。

さらに言うならば、「話す」「言う」という発声法で日常口に出された言葉の機能と、「語る」「唱える」「謡う」という特別な日の、特別な発唱法で口に出される言葉の機能とでは根本のところで違っているものとして受け取るべきなのだろう。少なくとも、「うた」

として発唱された言葉の機能は日常のそれとは違ったものとして期待されているはずである。その期待というのは、「うたの場」が設けられた目的にかかわっての期待であって、期待実現のための行為として「謡う」があり、それを確実に遂行したという納得に基づいた結果、証拠のようなものとして「うた」があるのだと思う。

まわりくどい論述になってしまったが、要は「謡う」は非日常的な言語行為であり、「うた」は非日常的な言語集合体であるということである。その非日常性とは何かと言えば、やはり、信仰性・呪術性・祝福性といったことになるのだろうし、それらを包括した言い方ということになれば、儀礼性ということになろう。まさに「うた」は儀礼文化的所産であり、「謡う」は儀礼文化的行為であると言えよう。

二、儀礼歌の名残

以上のごとく、まず「うた」はそもそもが儀式歌であり儀礼歌であったと捉えていいのだろうということである。ところが、「うた」「謡う」が日常性を濃くしてくる中で、娯楽性とか慰安性・遊戯性、つまり自らが「謡って楽しむ」「聞いて楽しむ」という要素を濃くしてくるにつれて儀礼性を喪失していく。具体的には、「うたのトキ」「うたのバ」が日常化されて、「うたの言葉」の制約もゆるみ、素材の枠も広がり、その続け方（組み立て）も自由になっていく。結果として歌詞の言語機能も日常のそれと近くなってくる。つまり、「うた」本来の機能が失われていって、「楽しさ」「気晴らし」といった後時的な機能が前面に出されて、踊りや酒宴の場における娯楽歌・騒ぎ歌が生まれ（そこには「踊り」とか「酒盛り」というものがそれ自体娯楽性、日常性の中に置かれる状況が前提としてある）、それが仕事歌にも及んでいく。そして仕事の苦痛・単調さを紛らわすためとか、共同作業推進のためのリズム（呼吸）合わせといった機能のみを「うた」に求めることから、滑稽・哄笑を旨とする即興歌、口から出放題のでたらめ歌にまで仕事歌が浸触され、むしろそうした傾向が少なくとも歌詞の面に支配的になったのが、近世以降、今日までのいわゆる「民謡」といわれるものの歩みであった。

今日、伝承されている民謡（多くは実際の「うたの場」を失って、わずかに古老の記憶に残されているとか、それを頼りにしての採集・調査といった結果による記録として辛うじて残されているといった民謡状況であるが）の中で、その本来の「うたの場」を失わずに、その歌自体にも歌作法にも古風さというか本来の姿をとどめているわずかな例を別にすれば、圧倒的には信仰性とか儀式性といったものとは、無縁であるかのようなものばかりとなっている。特に七七七五型の近世調を詞型とする民謡の歌詞はほとんど全国一律といってもいいほどの類型を示し、その発想は日常的なものとなり、陳腐なまでのものになっている。

神事や年中行事の中で謡われる祭り歌・行事歌（歳事歌）といったものや、成人や厄年・婚礼といった人生儀礼、地搗き・棟上げ・新築祝い・屋移り祝いといった建築儀礼の中で謡われる儀式歌・祝い歌などは、今日なお「うた」及び「謡う」ことへのこだわりが残っ

ていて、そのこだわりの分、信仰性・儀礼性といったものがその歌詞にも謡い方にも残っているものがある。ところが、踊り歌とか仕事歌となると、それがほとんど意識されていないかのような「うたの言葉」（歌詞・文句）になり、「うた作法」になってしまっている。それだけ踊り・仕事そのものに対する信仰性や儀礼性が早くに慰安性とか娯楽性にとってかわられたということであろう。

しかし、そうした踊り歌・仕事歌ではあっても、注意深く観察してみると、やはり何程かの、「うたの場」に臨んでいる人の「うた」「謡う」ことへのこだわりがあって、全くの娯楽歌・騒ぎ歌になりきってしまっているわけではない部分が見えてくる。

その一つのあらわれが「うた次第」に見られるこだわり、もう一つが捨て切れない「うたの言葉」（歌詞の中の一詞句）へのこだわりである。前者は、「謡いはじめ」「うたの盛り」「謡いじめ」などにこめた思い入れであり、後者は謡い継いで来る中で育ってきた「うたの言葉」の重み・厳粛さであり、謡う側からすれば、その言葉を「謡うこと」への必死さ・切実さ、そして「謡ったこと」による晴れやかさ・解放感・安堵感といったものを感得できる（つまり「こだわり」が晴れたということ）、いわば「うた」の中の「重要な一語」（一句）というものの存在である（注2）。その両者に、「うた」が本来儀礼歌であったという名残を見出すのである。

前者の「謡いはじめ」「うたの盛り」（その「うたの場」そのものの盛りでもある）、そして「謡いじめ」といったときの歌の素材・発想・主題といったものについては、これまでいくつかの論文でとりあげ、若干の考察を加えてみたことがある（注3）。

今回は、そうしたいわば「節目のうた」の側面からの儀礼歌の名残でなく、後者の「うたの言葉」にこだわる心意の側面から、そこに儀礼歌の名残を見出しつつ、「うた」本来の機能をさぐってみようと思うのである。

三、歌謡儀礼語

繰り返しになるが、日常の働く生活・稼ぐ生活に対して、非日常的な生活を「まつる生活」として、その「まつり」の根本はヒトの力の及ばないモノに対しての祈りであり願いである。その祈り・願いの最大なものは、作物の豊穣、狩猟・漁撈の豊かさ（食料の豊かさ）である。それが「生きる」ための基本であり、そのために「稼ぐ生活」の一方で、励み稼いだ結果の豊かさ（是非実現したいもの）を祈願し、それが果たされたことを感謝する「まつる生活」が折々に営まれたのである。

「生きる」ことは「食う」ことであり、作物・獲物の豊かさは、その「食う生活」を保証してくれるのである。別の言い方をすれば、豊作・豊漁（猟）は「生きること」の安心、明日への張り合いを与えてくれるものであり、富貴繁昌・無病息災・家内安全といった、この世の「富」「幸」とかいうものは、その上にこそ構築されるものなのであった。

したがって、「うた」が「まつる生活」において発せられる一つの儀礼的・呪術的言語表現であったとすれば、そもそも「うた」自

体が豊穣（饒）祈願と感謝、そして喜びを目的に発生し存在したのだということになる。

ところが、「うたの零落」というか、「うたの日常化」というか、本来「まつる生活」とは対極的なものとされていたはずの「稼ぐ生活」の働く場の中にも「うた」が持ち込まれ、慰安・娯楽的な側面が強調されて、単なる作業促進歌になってしまったり、「踊り」や「酒宴」についても娯楽化や日常化が進んで、これも単なる娯楽歌や騒ぎ歌になっていく。そして、ひとたびそうなってしまってからは、「謡う楽しさ」や「謡う喜び」の追求に終始するようになって、いよいよその傾向を強くしていくことになったのである。近世の三味線歌謡の影響を大きく受けて歩んで来た今日の「民謡」といわれるものの実態は、いわばそうした本来の「うた」の零落化・日常化が相当に進んだ結果の所産であると考えていいと思う。特に、地域とか種別を越えて共通したもの、同趣向・同発想のものが濫乱している、いわゆる「民謡」なるものの歌詞を見ると、一層その感を深くするのである。

「どこの―北から南までの各土地々々」「何の―祝い・踊り・仕事の」歌という必然性や妥当性の露ほども感じられない、一律で陳腐な歌詞の何と多いことか。むろん、そうした状況を作りあげてきた要因は何かなど、そのこと自体、民謡論の一つの課題ではあるのだが、あまりに信仰性とか儀礼性といったことと無縁な言葉の集合体なのである。

とは言え、今日の「民謡」も「うた」である限り、慰安性や娯楽性に覆い尽くされてしまったかに見えてはいても、なお本来の「うた」そのもの、あるいはそれを「謡う」ことで果たされるとした機能への期待も皆無ではないのである。それが現在まで伝承されてきた民謡においてどのように残っているのか、どういう部分においてその機能性（祭祀性・祝儀性など）を感じ取っていたのかということである。

一つ確実に言えることは、「うたの場」にかかわって、大事な要素として意識されていた歌詞の中の一詞句というものがあって、それを「謡う」ことで、そこでの目的・機能は果たされるとしてきたらしいことである。そうしたこだわりの語句を今仮りに「歌謡儀礼語」として、そうしたものをできるだけ多くとりあげることで、「うた」とか「謡う」ことの本来の意味を少しでも明確にできたらと思うのである。

なお、「歌謡儀礼語」なる規定についてはもう少し説明すべきであろうが、それは以下具体的にとりあげていく中で自ずと明確になってくるものと思う。

㈠ こだれる

島根県の田植え唄の中に次のような一章がある。

○れんげの花やら咲きこだれたな　さいはござれ面白や西の山端に

『島根民謡』（注4）に島根県美濃郡吉田村の「田植歌」として出ているものであるが、『俚謡集』（注5）では、同じく美濃郡の「田

植唄」として次のように載せている。

○蓮げの花やらさしこざれたらんだ　さいはこだれ面白や　西の山ばにさしやこだれた　西山寺の蓮華ば

同じ歌の変化したものであるらしい。多少歌意に不明の部分もあるが、「れんげの花」の咲き様の見事さを称えての歌であることはまちがいない。その見事さの形容が「こだれ」「こだれた」（「こざれたらんだ」）であることに、そこにもう一つ別の意味が加わっているのである。

「こざれ」は「こだれ」の訛ったものであり、「こざれたらんだ」の「たらんだ」は「たわんだ」であろう。

この詞章は中国地方の田植え唄に広く共通したものだったらしく、『俚謡集』中、広島県安佐郡の「田植歌」としても確認される。

○けふの日は　やつぢゃもの　お日はやまばたに　れんげの花やら　さきがこだれたをんだ

「こだれ」については、次のものも見出される。

○だいせん山の卯の花は　八重に咲いたがこだれた（岡山県川上郡、田植歌）

○けふの田主の庭のいと柳　七重にこだれて糸柳（島根県邇摩郡、田植歌）

「こだれ」の「たれ」は「垂れ」であり、物が垂れて下に向いている、内実が張ってその重み故に垂れさがっていることであり、「こ」は接頭語で、語調を整えたり、あるいは「可憐さ」や「軽快さ」といった気分を軽く添える働きをする。

結論的に言えば、右の各詞章において、最も重要視されている一語（句）は「こだれ」（「こだれたわむ」）であったということであり、その語を欲して謡い出されたものであったということである。「れんげの花」や「卯の花」「いと柳」は、「田植えの場」における実際の景物として身近に見出されるものであったろうし、その意味で「うた」の発想法における常套というか定法通りということであって、いわば、「場」における「うた」の発唱方式の基本に叶っている。それはそれとして、その「れんげの花」「卯の花」「いと柳」を「こだれる」（「こだれた」「こだれたをんだ」）と観察して、田植え作業の中で謡う心根が問題なのである。

「こだれる」――物が「垂れさがる」ということは、それをなさしめる要因であっての状態なのである。物の形状として、「垂れさがる」様は、豊熟・熟成・充実・完成した結果、それ自体の重みが外に現れ出た形として観察できるものである。「れんげの花」や「卯の花」「いと柳」は、必ずしも内実の豊熟による「重み」で「垂れている」わけではなく、それ自身の性状なのであるが、それを「垂れている」と発唱することで、そこに「充実」「熟成」「豊穣」を見ようとしたのである。それがこの歌を単なる田植えの場における景物描写の歌を越えて儀礼歌にしているということなのである。

田植え唄における「垂れている」ものへの「こだわり」は他にも

あって、広島県高田郡の「田植歌」に次の詞章がある。

（音頭）
○十七がヤーレ　掛けたる襷の結ひ垂れ　ノーサノ〳〵
（早乙女）
ヤーレ　結ひだれ　ヤーレ　春三月の藤の花（『俚謡集』）

何と優美で色彩鮮やかな一章であろう。こうした詞章に出合うと、民謡の担い手達も、時に優れた文芸の創作者になり、詩人になるのだと感心させられるし、民謡の詞章とて立派な文芸であったのだと思えてくる。それがどうして近世以降の民謡の担い手達は揃いも揃って模倣家や駄作家になっていくのかが不思議である。

民謡の詞曲両面における近世三味線歌謡の支配というか猛威については今はおくとして、この「十七」（早乙女）の「結ひだれ」を謡う田植え唄の成立と存続の根幹にあるものもやはり「垂れ」（結い垂れ）であったことは動くまい。

この歌の場合、前掲歌の「れんげの花」「卯の花」「いと柳」と同じように、眼前のモノの観察が発想の基盤に据えられている。ただ、それが自然の景物でなく、田植え仕事に並び立った早乙女「十七」の田植え装束、その結び余りの「結ひ垂れ」であったということである。

田植えに臨む早乙女の出で立ちは笠からはじめ、すべてを新しくするのがならいである。その新しさは早乙女の清らかさ・若々しさにつながり、この労働の神聖さを象徴する。田植えは田の神を迎えての、いわば神事であるから、早乙女はその神に奉仕する聖女なのである。

早乙女の肢体そのものの輝き、身につけている衣装すべての輝きは、溢れる生気の象徴であり、植えている苗の生命力の祝福につながっている。その上でさらにこの詞章は呪術的な期待を持って発唱されている。それは新しい木綿絣の上衣、白い足とは対照的な真紅（緋）の下裳（腰巻）など、早乙女装束で最も目につくはずのものを謡うのでなく、とりあげたのが「襷」であることである。しかも、早乙女のはちきれる若さの中のきびきびした動きを襷姿に見るのではなく、結び余しの「結ひ垂れ」を謡っているのである。そこには大きな儀礼的な意味があったのだとしか考えられまい。

この歌の儀礼歌的要素ということからすれば、むろん一つには「早乙女讃美」がある。それも田植え唄の大事なテーマである。ただ、この歌はそのテーマのみで謡われているのではない。そのもう一つの、より大きなテーマを感じ取っていたのが「垂れ」なのである。早乙女の襷は紫色（薄青色でも薄桃色でも）なのであろうか。それが花房を垂れて咲く「藤の花」に見立てられていて、「早乙女美」から「豊熟・豊穣」へと主題が大きく発展している（注6）。

稲作りの最初である田植え ― むろん、厳密には春先の田打ち（タブチ）に始まり、苗代作り、田ならしなど、田植えに先行する稲作作業はあるが、持ち田（植え田）に苗が移し植えられる田植えが、実質的にというか本格的な稲作り・稲育て仕事の開始という意識で受け止められていた ― に臨んで、「豊熟・豊穣」を謡うのは、言うまでもなく予祝である。今植えている苗が、この後の梅雨・日

照り・風の時期を無事越えて、重く穂を「垂れる」ことができるようにと、秋の「垂穂」を先取りしての願い・祈りの詞章であったということである。その意味で儀礼歌だというのである。

福島県大沼郡会津高田町の「高田伊佐須美神社」の「御田植」（注7）歌の十二段の詞章のうちに次のように謡われるものがあるのは、同じ趣旨である。

○おほかみのお苗坪におろす　豊千垂穂（第五段）
○しなひたや　しなひたや　秋垂穂は八束穂に　オー（第八段）

前者は植え田へ降ろす早苗を「豊千垂穂」と予祝し、後者は移し植えられた早苗の「しなひ」に「秋垂穂の八束穂」になることを確信し祝福していて、これも予祝である。「しなう」は「垂れる」でもある。

(二) しだれる

前項の「垂れる」と同義語として捉えていい言葉である。モノが重さ・長さ故に垂れさがること、またそうした状態を形容して「しだれる」という。そこに祝意を感取する故に儀礼歌の言葉「歌謡儀礼語」としての認定があった。

「しだれる」ものの典型は「しだれ柳」であり、唐の王城の街路樹からわが奈良・平安の都づくりもそれに倣ってのたたずまいを見せたことから、それは都ぼめ・主上ぼめ・国ぼめの景物として謡われてきたという久しい伝統を持っている。

○我が門のや　垂ら小柳さはれ　とうとう　垂る小柳　垂るかいては　なよや　垂る小柳
垂るかいてはや　國ぞ富みせむ　郡ぞ栄えむ　里ぞ富みせむ
我家ぞ富みせむや　垂る小柳

平安王朝時代の風俗歌の「我門」である。「垂ら小柳」「垂る小柳」の繰り返しがこの歌の祝意を強調している。柳の「しだれ」に国・郡・里・我家の「富み」と「栄え」を見ているのである。

○浅緑　濃い縹　染めかけたりとも　見るまでに　玉光る　下光る　新京朱雀の　しだり柳
または田居となる　前栽秋萩撫子　蜀葵しだり柳

同じく平安王朝貴族の遊宴歌謡催馬楽の「浅緑」（呂歌）である。この歌においては、今は「田居となる」の解釈がもう一つはっきりしないため、王都跡の荒廃を嘆き悲しんでいる歌のような側面も持っているが、「玉光る下光る」「しだり柳」には、「新京朱雀」の繁栄を称えている。新しく都になったばかりで、まだ十分、完成していない都（周辺には田居が広けている）をあえて祝福しているのが「しだり柳」なのであろう。

そもそも柳自体、その根付きのよさ、成長の早さといった生活の中での実感（観察）から、繁栄の象徴として神事や行事に持ち出される神聖木であった（注8）ことは、今さらとりあげるまでもない。その上に立って、「しだれ柳」は、その垂れさがった形状から豊穣とか成熟の具現化されたものとして尊ばれ、喜ばれてきたのである。

次の歌なども、表向きの恋愛的な遊び気分からばかり発想され謡われてきたのではなかったろう。

○しだり小柳けづり細めて楊枝木によいもの　だての男に楊枝ほそめて持たせうよ

『俚謡集』に載る広島県の「田植歌」である。「しだり小柳」の細い枝をさらに細く削って楊枝を作ってあの洒落男（伊達男）のわが恋人に持たそうというのである。この詞章が地方の田植えの仕事歌に落ち着く道筋には、

○柳の陰に御まちあれ　人とはゞなう　やうじ木きるとおしあれ（『閑吟集』）

という中世小歌が交差し、それを受けての近世の風流踊り歌としての歩みがあった（注9）と思われる。恋愛的な気分は、その間に成長してきたものであったろうが、この歌を田植え唄に組み入れて受け継いできた心意を、明るく華やかで艶っぽい恋愛的な気分によって、田植え仕事のきつさ（腰の痛さ・作業の性急さ・単調さ）を紛らわそうとしたのだと見るだけでは足りない。むろん、それはそれとして謡い手である早乙女の華やぎにふさわしいし、彼女等の関心（「だて男」－やさ男・いい男）に叶った主題として喜ばれたはずである。さらに言えば、田植えに限らず、恋愛（性愛）は、感染呪術としての予祝というねらいもあって、仕事歌（稲作作業の歌）に限らず民謡全体に及んでといってもいいほどの大きなテーマになっているのであるが、この歌が田植え唄であるという部分において、謡う人達の心意を見据えてみるに、そうした恋愛的な気分を謡う楽しさの一方に、やはり「しだり小柳」にこだわるものがあったと思われるのである。それは、今植えている苗の無事な成長を祈る思いである。もっと端的に言えば、「しだり小柳」に「稲穂の垂れ」（植えている苗の無事な成長の果ての）を見ているということである。

「垂れる」ものが「稲穂の垂れ」に通じたものとして次のようなものもある。

○木綿垂（本）での　神の幸田　稲の穂の
稲の穂（末）の　諸穂に垂でよ　これちほもなし（神楽歌、大前張「木綿垂で」（注10））

いかにも神を祭る歌、神楽歌にふさわしい詞章である。そうした古い宮廷の儀礼歌の祭り歌ではない、つい先頃まで謡われていた米搗きの仕事歌にも次のようなものも謡われていて、「垂れ」に対するこだわりが縷々と続いて来たことがしれる。

○美事美事　上方街道　枝垂柳に　稚子トンボ

新潟県三条辺の「米搗うた」（注11）である。採集者が「このうた意味不明。しかも尤も普通なもの」と注記しているように、全体の歌意がやや不明確であるが、上方に通じる街道の枝垂柳の並木にトンボを追いかける子供の情景を謡ったものか。そうした童謡的発想のほほえましさはそれとして、「美事美事」と冠せられた「枝垂

柳」はやはり祝福性を出している。「上方街道」を讃美しているということは、上方そのものの讃美であり、その主（京の主上か大阪の豊太閤か）への讃美でもある。ともあれ「儀礼歌の名残」をとどめている一章と言えよう。

(三) たわむ

この語も物の先端に重みがかかって、弓なりにしない、垂れさがる様を形容した語である。これも田植え唄に散見される。「たわむ」単独でもむろん謡われているが、すでに前項の「こだれる」でもあげたように、「こだれたおむ」という複合語の形でも謡われていた。

（音頭）○けふのひは八つぢゃもの　お日はやまばになう
（早乙女）れんげのはなやら　さきがこだれたをんだ

『俚謡集』に載る広島県安佐郡の「田植歌」（「六朝子」）の一章である（注12）。前項ですでに引用したものと合わせて、これが中国地方の田植え唄の詞章として広く行き渡っていたことが確認できる。

弓なりにしなうほどの先端にかかる重みは「なり物の豊かさ」「穀物の豊穣」を連想させることで、「たわむ」もやはり祝福語として「うた」に採用されたものであったことは、次のような歌々に明確に示されている。以下も中国地方の田植え唄や苗取り唄の詞章である。

○しのだのもんの朝露　払うて　たをうだ（広島県御調郡、田植歌、『俚謡集』）
○なぜに中がたわんだ　実が入るとてたわんだ（鳥取県東伯郡、田植歌（注13））
○しなひ竹がたわんだ　実がいるとてたわんだ（鳥取県飯石郡、苗取歌、『俚謡集』）
○ヨイナガ　長い髪がたわんだ　実が入るとて（鳥取県大原郡、同、『同』）

第二歌は、松本穣葉子編『鳥取県民謡一〇〇選』でも東伯郡関金地方の「田植唄」として載せているものであるが、そこには、

植え遅れた早乙女をはやす唄

という興味深い注記がある。

植え始めは一線に並んでいた早乙女の列が、やがて植え遅れた早乙女がいることで曲線になる。特に中央の何人かが植え遅れたり、逆に植え進んだりした場合には、田面に大きく放物線ができる。まさに「たわんだ」状態である。この時、遅れた早乙女を励ます意味でこの詞章が謡われるというわけだ。「たわみ」を作った早乙女の遅れに対して、「たわみができたから、先を植えている早乙女たちに追いつくように精出しなさい」との警告と激励だというのである。ここにも「うたの場」における「うたの言葉」の非日常性（象徴性）をみることができる。その非日常性というのは、「謡うべきトキ・バ」において「謡われる」ことで機能するのである。その意味で第

二歌は、単に慰安・娯楽（謡う楽しさ）のため、あるいは「からかい」などの戯笑的な仕事歌としての機能を越えて、「うたのトキ・バ」において果たすべき役割を明確に持っていたということになる。そういう点で儀礼歌と呼ぶのである。そして、その儀礼性の拠ってくるところが、この詞章の大事な一句（一語）「たわむ」なのである。

ただし、「たわむ」を田面にできた植え終わった部分とこれから植える部分（植え残した部分）との境界の曲線（早乙女たちの不揃い）と見ての「励まし歌」としての機能は本来的なものではなかったと思われる。「励まし歌」「警告歌」としての機能の拠って立っているところは、田面に現出した「平面的なたわみ」の観察にある。確かに民謡の発想（唱）方式として「うたの場」における景物描写・即物描写は大きな側面を持っていて、その方式がここでも適用されて謡い出されたものと見れば、その意味でも「田植えの場」の仕事歌として、十分な機能賦与がなされているが、本来的な「たわむ」はやはり立体的なものとして捉えるところにあったと考えられるし、それでこそ「苗取り」とか「田植え」という、稲作りの最初ともいえる仕事の歌としての儀礼性が発揮されるのだと思う。端的に言えば、「たわむ」歌の一つの替え歌、即興歌として謡い出され、やがてそれが「植え遅れ」を知らせて「激励」「警告」する歌（詞章）としての地位を与えられることになったのであろうということである。つまり、田植えや苗取りの歌としての「たわむ」歌本来の機能は別にあったということである。

あげた他の歌も多少分析してみよう。第一歌の「しのだのもん」は「しなったもの」であろうか。あるいは「篠竹」の訛り、変化したものであったろうか。第三歌の「しなひ竹」がそう思わせるし、竹のしないを「たわむ」と見るのは、日常生活の中で身近かに観察していることであった。「朝露を払うて」しなうものに生命力の躍動をみている。第四歌の「長い髪」は、眼前の景物としての早乙女の「ほめ詞」の一つとして発唱されたものであろう。

日常の観察であれ、この場（苗取りや田植えの場）での観察であれ、「たわむ」ものが持ち出されるのは「実が入るとて」の形状であるとして喜ばれたからである。そこに「苗取り」「田植え」が労働のトキ・バである以前に稲作儀礼（農耕儀礼）のトキ・バであったことが示されている。したがって、そこでの「うた」が儀礼歌であったことは労働歌であることに先行する。それを象徴的に残しているのが「たわむ」にこだわって謡うこれらの詞章にも示されているのだといいたいのだ。「実が入ろうとしてたわむ」は、秋の豊穣の先取り、つまり予祝なのである。

春の「田植え」（苗取り）に秋の「豊穣」を思う（願う・祈る）心は、「春の神祭り」を営む心に重なる。田植え唄が春の祭り歌であったことは、次のような田植え神事の歌謡を合わせることで素直に納得できる。第（一）項の「こだれる」でもあげた福島県の会津高田町の高田伊佐須美神社の御田植え祭りに謡われる、

○しなひたや（いだ）　しなひたや（いだ）　秋垂穂の八束穂に　オー（第八段）

という詞章も、植えた苗（今は神田での田植えはないが）の「しな

い」に、早くも秋の「垂穂」「八束穂」を見ているのである。「しなう」「たわむ」は田植え唄においては同範疇の言葉であったことは確認済みである。

「しなう」（しない）が旺溢せる生命力・繁栄を示す祝福語であったことは、すでに古代歌謡の世界でも確認できる。

○大路に　沿ひてのぼれる　青柳が花や　青柳が花や
　青柳が撓ひを見れば　今さかりなりや　今さかりなりや

催馬楽「大路」（律歌）である。都大路の柳並木の「しない」に都の繁栄、王城の地の安泰、主上讃美がこめられている。

○立ち鳥　媒鳥　堤の上　青柳が撓はる　中に婦立たるめる　夫立たるめる　何どやな夫　隠ろにして

この東遊歌「太刀掻歌」（注14）にも「青柳のしない」が謡われているが、この場合は祝意より恋愛的な華やぎ・明るさは「青柳」のみずみずしさ・旺盛さ、そしてその「しない」のたおやかさ・柔らかさから導き出されたのであろう。

民謡の「たわむ」「しなう」の系列にある語として、その響きにいささか日常的な卑俗さが加わるものの、「まがる」「かがむ」も稲作の仕事歌に謡われる祝福語に入れていいと思っている。

青森県東津軽郡の「稲刈歌」に次のように謡っている。

○ばばのこしや　ほはいほはい　まがだ　まがらねで　かゞんだ

（『俚謡集』）

いわゆる「ホーハイ節」であるが、『東北の民謡』（注15）では次の如くである。

○婆の腰ァ　ホーハェホーハェ　ハェホー曲ァがたぢや
　曲ァがった腰ァ　伸らネァ　ホーハェホーハェ

○婆の腰曲がった　稲の穂がみのる

「婆の腰が曲った」というのは、必ずしも「婆」だけをさしているのではなく、かがんで稲刈り仕事に精出している自分達全体の観察から来ているものであろうが、それを「婆の腰」と言い立てているところに戯笑歌としての仕事歌の一面を見るし、その戯笑性・即興性がこの歌（詞章）発生の、享受の第一義的側面であろうが、「曲がる」に重みで垂れさがり、曲がっている稲穂を重ねて稲刈り唄にしたところで、この歌は単なる仕事歌を越えて儀礼歌になったのである。

苗取り唄・田植え唄における「垂れる」「たわむ」の儀礼性は「祈り」であり「予祝」（祝福）であるが、稲刈り唄の「曲る」の儀礼性は「喜び」であり「感謝」である。「春まつりの歌」に対して「秋まつりの歌」ということになる。

(四)　さ　が　る

これまでとりあげたものと同系列に含めていい「歌謡儀礼語」にもう一つ「さがる」も加えられる。

○苗葉（のは）にさがりたは露か白玉かな　露ならば落ちもせうが　玉ゆら／＼　苗にさがらば　黄金の玉でさうろな（『俚謡集』）

広島県山県郡の「田植歌」である。田植えに臨んだこの日、苗の葉先に光る朝露の見事さを謡っている。苗代田から取って（引き抜いて）束ねた苗からは露はこぼれ落ちてしまっているはずだという理屈はいらないのである。植え田に臨んで手にした苗、あるいはすでに植え終えた苗の葉先に玉の露を見ていて、それは落ちない露でしかも黄金の玉だというのである。

「白露」（白玉）自体も久しく祝福語であるし、「ゆらゆら」も内在する活力・霊力の発動するさまを形容する言葉として、祝福的・呪術的用語である（注16）が、この歌に最も大きな祝意を与えている言葉（この歌の謡い手の意識の上で具象語としての認識を最も強く持った語）は、「さがりた」「さがらば」であったろうと思う。苗葉にさがる白露の玉を、「落ちない黄金の玉」と見る心根は、今植えている苗の讃美・祝福を越えて、秋の黄金の稲穂の重い「垂れさがり」を先取りしての予祝であることは明確だ。

田植え唄の「さがり」はほかにも拾える。

○次郎や太郎や与之助（よ）は駒を何処へつないいだ　「うねをこし谷をこし　さがり松へつないだ（広島県、田植歌）

○酒飲ませうや　下り苺（いちご）のさかなで（新潟県西頸城郡、田植歌）

ともに、『俚謡集』に採録されているものである。

前者「さがり松」の歌は、「駒」が一つのテーマになっていて、信仰的には「田の神」の乗り物としての意識が潜在しての仕立てであろう（注17）し、もう一つには、田植えの場における実景描写という点で、歌の一素材としての「駒」でもあるのだろう。「次郎」「太郎」「与之助」は「駒扱い」（馬使い）の若い衆を代表させたものであろう。

田植えは早乙女の仕事であるが、それと並んで若い衆（男衆）は「代掻き」（田ならし）をする。「代掻き」には牛馬を使う。そこにこの歌の「駒」は重ねられているのである。「代掻き」の済んだ田は、さらにエブリ（エンブリ）などを使っての「田ならし」があって、次々と植えられていくのである。

男衆の「代掻き」「田ならし」は、早乙女の華やぎと賑やかさに追い立てられ、あるいは競争のように進められていく。当然、「代掻き」が終わらなければ、田植えはできない。何とかその日に植えるだけの田の「代掻き」が終了したことを「若い衆の駒つなぎ」で表現している。そこには早乙女たちに追い立てられるように、大奮闘した若い衆の仕事ぶりへの称賛・慰労と若い衆そのものへの讃美、そしてくだけては、「やっと間に合ったのね」という揶揄もこめられていよう。ここにも仕事歌の哄笑・戯笑的要素も芽生えているが、「駒つなぎ」は田の神の降臨をも意味していて（注18）、この詞章には、神事としての田植えの田の神迎え、そしてそれを謡う神歌の発想も影響していよう。「うねこし、谷こし」（～越し、～越し）は、遙々とやって来てくださる神（遠来神）の道中の「言い立て」の名

残を示していようし、その「駒」の「つなぎ所」が「さがり松」の下であったというところに、神降臨の神聖な場という意識も伝えている。

「松」自体、その常磐木であることのめでたさから、久しく祝い歌の素材であるが、その中でも「三蓋の松」「五葉の松」などというように、枝が上から覆いかぶさるように下向きになっている「さがり松」はよりめでたいものとして祝い歌に謡われてきた。上からかぶさるように覆ったその下の空間は、まさに聖なる空間であり、神降臨の場所としてふさわしいのである。そもそも、「松の下」「松の根元」はめでたい空間であって、その意識は、

○雉子のめんどり小松の下で　夫(つま)を呼ぶ声千代々々と

という民謡（「さんさ時雨」、宮城県）にまで続いている（注19）。

そうした神歌発想にも寄りながら、早乙女の「今の」（田植えに臨んで、隣りの田で代掻きをしている若い衆の「駒つなぎ」を実景として受け止めている）心意には、「さがり」にこだわる祝福性があって、それはやはり「稲ぼめ」（予祝）であったろうということである。

もう一つの歌の「さがり苺」の歌についても、田植え唄次第から見れば、「酒」「肴」が謡い出されていることから、その日の田植え終了か、その年の田植え終了か、ともあれ「田植え」作業の「果て」、あるいはそれに近いことを示す詞章（役歌）であったと思われる。田植え唄の構成（次第）において、「ひるま持ち」（昼食を運ぶ）などを謡う「昼歌」以外、酒や馳走を謡うのは「夕」の歌（晩歌）である。特にその年の田植え終了は、サナベ・サナブリといって、田の神送りの祭り・祝宴でもあって、手伝い人を招いての酒盛りが行なわれる。その酒や馳走が楽しみであり、励みであったことが、こうした詞章を生んできたのである。

酒の肴が苺というのはそぐわないといった非実際性・非現実性を言い立てて、この詞章を労働の場の単なる戯笑歌としてみてしまってはならないのである。むろん、彼等にとっても「酒」と「苺」との取り合わせは実生活の体験の枠外のことではあった。それでもこの取り合わせで発唱するところにこそ、「さがり」へのこだわりがあると見られるのである。「さがり苺」は田植え時節の野の景物の一つである。野苺（茨苺）か木苺か（ともすると、それは食べられない蛇苺であったかもしれないが、それはこの歌の仕立てに何ら不都合をもたらさない）、初夏、一面の緑の中に赤く輝いてさがっている苺は印象的であり、その「さがり」（実のり）がやはり、秋の稲の実のりを連想させるのであり、そのことが、「酒の肴」にそぐわないことは承知の上で、「さがり苺」を田植え唄の素材の一つに加えずにいられなかったのである。

(五)　な　び　く

もう一つ、これまでの系列でここに取りあげておきたいものがある。それは「なびき歌」（ここでいう歌謡儀礼語の「なびく」もの、「なびく」ことを謡う歌を仮りに呼ぶ）とも言えるほど、久しい伝

統と広い分布を持つ歌の存在である。

まず、苗取り唄・田植え唄・田の草取り唄の中のものをいくつか拾いあげてみる。

（Ⅰ）大山の北山かげのすげのもと　なびかばなびけ　すげのもと
（島根県飯石郡、苗取歌、『俚謡集』）

（Ⅱ）苗をとるなら　もとへ手をいんれて　うらのかたへなびけて
もとへ手をいんれて（山口県阿武郡、苗取歌、『同』）

（Ⅲ）そよーノ＼ふく風は　竹の林（広島県比婆郡、田植歌、『同』）
そんよりノ＼吹く風は　竹のはやしこそな（下）なびけてと
ほるものを竹のはやし（島根県大原郡、田植歌、『同』）

（Ⅳ）朝はかに植ゑた田を見れや　幾らにざりなびいた（山口県阿武郡、田植歌、『同』）

（Ⅴ）風吹くは　東になびく　奈良のかたへソヨノ（京都府北桑田郡、田植歌、『同』）

（Ⅵ）池に蓮下の　つゝじに咲いて　せと風吹けばなびけかりやす
（高知県土佐郡、田植唄、『土佐民謡集』（第一輯）（注20）

こうして並べてみると、単なる偶然ではなく、どうしても「なびく」にこだわって発唱された詞章であったと思わずにいられない。その「こだわり」が何であったかという、これら仕事歌の「なびき歌」についての総体的な物言いをする前に、個々の詞章について多少の分析・検討を加えておこう。

（Ⅰ）歌は、苗取りをしながら眺めやる大山を出し、その「北山かげ」に生えているにちがいない「菅」に「なびけ」と呼びかけ、命じている。菅の「なびき」自体は、自然の情景の一つとして古くから「うた」の素材として持ち出されているし、そこにはすでに「景」から「情」への道筋も出来ていた。この歌の場合にも「なびけばなびけ」という強さ・切実さの中には恋愛的な気分が含まれていよう（注21）。少なくとも詞章の上で、苗取り唄の必然性は何もない一章である。

それに対して（Ⅱ）歌は、いかにも苗取りの作業歌としてふさわしい。苗の上手な、手際のいい取り方、つまり作業そのものを謡っている。その意味では、次第に娯楽・慰安的詞章（恋愛歌、戯笑歌など）を抱え込んでいく仕事歌の発展というかふくらみの上からは、古風というか（必ずしもそれが時代的に成立が「古い」と言えるかどうかは別の問題となる）、本来のあり方（仕立て）に叶っていて、その限りにおいてより納得をもって謡われたものと言っていいだろう。

多少うがった捉え方をすれば、「もとへ手を入れて、うらのかたへなびけて」という部分にはエロチックな響きも感じ取っていたかもしれない。それが本来のものかどうかは別にして、そうした性愛的くすぐりが集団の歌においては大きな役割を果たしてきたのは事実なのであった。（Ⅱ）歌の場合も、辛い（腰の痛さとか長時間続く単調さといった）仕事の戯れ歌・慰安歌としても機能していたものと思う。

（Ⅲ）歌は美しい詞章である。その仕立て（発想）も含めて、中世小歌にみる洗練された雅やかさのようなものすら感じられる（注22）。

竹林をなびかせて通り過ぎる風のやさしさを謡っている。

（Ⅳ）歌は、明確に「祝福のなびき」を謡っている。この日、一番に植えた苗（朝はかに植えた苗）が、「ざらりとなびいている」。それは「植えた苗」が「根づき」、精気みなぎり生命力を発揮している故だと見たのである。その確かさを、今植えている苗（「昼はか」か「夕はか」か）にも及ぼしたいという願望、あるいは及ぼされるはずだとの確信を得たくて、これは謡われているのだ。さらに言えば、「ざらりなびいた」の「ざらり」は、その多量さの故に「溢れこぼれる」様の形容であるから、ここにも秋の豊かさの先取り・予祝がこめられていると見ていいと思う。

（Ⅴ）歌は、何がなびくのか示されていないが、「東へなびく」（注23）にこめられた意味があるのだろう。ただし、この歌の伝承地（京都府北桑田郡）の東の方向がたまたまそれに当たるとしても、「奈良のかたへ」なびくというのは何を意味しているのであろうか。「奈良の方」を祝福の対象と見る例をしらない。

（Ⅵ）歌、「池に」あるのだから「蓮下」は「蓮華」（蓮か水蓮の花）なのであろうが、「つつじに咲いて」ということになると、「れんげ草（その花）」がふさわしい。「つつじに咲く」というのは、花々が寄り集まって咲きこぼれている様子を言うのであろう。その盛りあがった花が風になびいているのである。祝福歌としては「れんげ草の花」でなければならない。それは田植え時期に咲く花（蓮や水蓮の花は夏の盛りの花）であり、「こだれる花」「たわむ花」でもあった。

以上があげた仕事歌の「なびく」であるが、むろん仕事歌以外の歌にも「なびくもの」は謡われている。まず、雨乞いの歌に拾える。

○靡く稲葉も　サ　色まして　民の恵みの神垣や

『俚謡集拾遺』（注24）に載る和歌山県海草郡のものである。七五七五の形式に古風さはあるとしても、いかにも厳かに仕立てあげられているところからみて、神官などの知識人の手になるものであろうか。現実にはうち続く日照りの中で、生気息々たる稲葉を眼前にしているはずであるが、歌としてはその逆を謡い、その恵みを賜った神への感謝を謡っている。それによって、「降雨」と「恵み」を先取りしているのである。「靡く稲」はやはり生気漲った稲を祝福した表現である。

もう一つ、「雨乞い」に関するものが拾えた。『紀州有田民俗誌』（炉辺叢書、笠松彬雄、郷土研究社、昭二、一〇、三〇）に「雨乞踊」として載せているものである。

○雨のざんざと降る夜には　作り耕作木草まで　いぞろしぞろとなびきよる

前述の雨乞い唄よりは素朴でくだけた詞章になっているが、この方ははっきり「雨の降る夜」、しかもその降り方を「ざんざと」（注25）と信じ、その大降りの雨で、作物はむろん一切の草木が生き生きとしている様を謡っている。つまり、「雨乞い」の祈りとしては「雨を乞う」「どうか雨をいただきたい」というのが、雨乞い

唄の詞章ではなく、「もう雨をいただいている」ことを謡うのが雨乞い唄の形であったことがわかる。「雨乞い」であるから、「雨をください」という「祈り」であるはずなのであるが、祈ればきっと聞き届けてくださると信じている。それほど慈悲深い神、威力ある神だと信じて疑わないわれわれですというのである。つまり、神の威徳を讃美しているわけだ。「祈り」が届いて、「雨が降る」という次第を追うのでなく、「雨が降る」という結果を先取りすることが、「雨乞いの神事」であったということである。その雨の恵みによって作物・草木の復活・蘇生を示す言葉が「なびく」（なびき）であったということになる。

これらの歌においては「なびく」「なびき」を、外的力によってもたらされる動き・作用でなく、内在的な力の活発化・躍動化現象として捉えていて、それが本来の「なびく」「なびき」であったことを見せている。そこにこの語が祝福歌、儀礼歌の構成語（歌謡儀礼語）になる根本があったと思われる。雨乞い唄（雨乞い踊唄）は、まさに儀礼歌であり神事歌であったのである。

田植え神事の歌謡中にも「なびく」（なびき）の歌があって、この面からもこの語の儀礼性・信仰性を確認できる。

三重県志摩郡の「神田祭歌」（一名、御田祭）として『俚謡集』に次の三章が収録されている。

○実のる垂穂の美米こそは　御饌に作りて神前へ奉るなれ
○千町の小田に靡く稲は　今日の祈年祭の験と知らめ
○今年や世がよて垂穂の稲を　家に積みはえ豊かなり

どこの神社のいつの祭りで謡われているものか示されていないが、歌中に「祈年祭」とあるから、正月（春）の田植え神事とみてよかろう。まだ、一般の田への植え付けは始まっていない時期なのに、今年の秋の実のりの豊かさを入念に言い立てている。それを端的に示しているのが「垂穂」であり、「靡く稲」であったということである。その意味で歌謡語の儀礼性とか祝福性という点で、「靡く」も「垂る」（垂れる）も同じ枠内、あるいはその発展とか延長の中で捉え得る、同属語と見ていいだろう。次の田植え神事歌謡にも同様に見られる二語である。全詞章を、多少長くなるが引用しておく。

神の御田植はきようでそうろ　そおとめ袖打ちかついで田植よ
うよ　苗乙女田植ようよ　そうとめ
田植そ乙女笠かうてきしようよ　笠かうてたもうなら猶も田を
植ようよ　猶も田を植ようよ
いかにそ乙女天筒山を見よかし　賽屹と見たれば　黄金の花も
さき候　米の花も咲候　秋の垂穂の　なびきたりや八握穂　な
びきたりや八握穂
千歳々々　千歳やちとせの千歳也
万歳々々　万歳やよろづ世乃万歳也

福井県敦賀市の気比大社の御田植祭の詞章である。『福井県の民謡』（福井県民俗学会、昭四二、七、一）には、この祭礼について次の

ように注記している。

本祭は太陰暦で六月十五日であるが、現在でも六月十五日に行われ、拝殿前に白砂を盛り稲苗を植える田植の模擬祭典行事であるが稲苗は実物を使用する。

右の記事によれば、この方は一般の田植え時期と合わせての田植え神事であるが、やはり秋の豊かな実のりを謡っていて、その象徴的な言葉として「垂穂」「八握穂」に合わせて「なびき」が謡い込まれている。

「なびき」を謡った神事歌謡としてもう一つあげたい。福島県北会津郡河沼町塔寺八幡宮の神楽歌「八月朔日」の詞章は次のようになっている。

○榊葉や、立ち舞ふ袖の追風に／＼　靡かぬ神はあらじとぞ思ふ
○柳はやし立て申す　ゆふしでつけてまねくには／＼　何れの神もおはすらん
○柳はやし立て申し／＼　袖の追風に／＼　靡かぬ神はあらじものを

『俚謡集』によると、後の二章は「毎年八月朔日御神木に注連を張り柳を立てる時」の歌としている。中止されて久しいのか、実地調査で確かめ得なかったので、断定的な物言いは避けるべきであろうが、八朔行事であるから、みのりを真近かにして風の害を避けるための祭りであり、それを願っての神迎え、神降ろしの詞章であったと思われる。第二章の「まねく」にはそれが端的に示されているし、「靡かぬ神はあらじ」というのは、「神は必ずや降臨してくださる」との確信に出たものなのである。ただ、この神楽歌の「なびき」には、恋愛的要素も芽生えている。それは「榊葉」「柳」を採物にしての巫女舞の詞章であることから導かれていようか。神は清らかな乙女の「袖の追風」に引かれて「靡き」来るのである。そこに聖女と神の恋愛を感じ取っていて、「靡く」に思う人へ気持ちが「引かれゆく」「傾きかかる」という恋愛語としての機能が成立している。

恋愛語としての「靡く」を含んだ歌は、それこそ枚挙に暇がない。男が女に、女が男に引かれ、その対象に向かって思いが傾きかかっていくのが「恋」であり、両方が同時に「靡き」合えば、その恋は成立するのであるが、「歌」としては、そうした両思いの恋の歓喜を謡ったものより、一方のみが「靡き」、一方が靡いてくれないという「嘆きの恋歌」が圧倒的に多い。それが「靡きの恋歌」の大きな特色であったといえる。

○いかに野に咲く花なればとて　吹（か）ぬ風には靡かれぬ（科埜の國春唄、曳臼唄ともに颯ふ『鄙廼一曲』）（注26）

相手の男がそれらしい素振りを見せてくれないので、こちらの気持ちも思い切って打ち明けられないのだと嘆いている。

○道のほとりの二本柳（ふたもと）　風にふかれてどちらへなひこ　おもふとのこのかたへなひこよの（小うた『南葵文庫旧蔵小唄打聞』）（注27）

「是は新吉原ひらけしころのうた也」とあって、遊廓を舞台にしての三味線歌謡であったことがわかるし、「遊女」（女郎）と「客」との擬似恋愛を背景にして生み出されていく、おびただしい数の恋歌の一つである。こうした中で「靡く」（靡き）が恋愛用語としての方に、より傾いていき、その氾濫が地方の歌にまじ及んでいって、いわゆる民謡の詞章をも支配していくのである。それはそれとして遊里歌（遊女歌）としては、この歌は二人の男から思いをかけられ、さてどっちに靡いたらよかろうか（端の目からはどっちに靡くのやらと、興味深く眺めていることになる）というのである。結局は「思う殿御」に靡くのが女心であるというのである。

○柳よ／＼すぐなる柳　いやな風にも靡かんせ（茨城県行方郡、潮来節、『俚謡集拾遺』）

少しもその気を示してくれない相手に対して、「いくら嫌いでも、少しは思いをかけてください」というのである。前歌と合わせて「柳」が「靡く」素材として持ち出されやすいのは、祝福歌としての前提があったことを忘れてはなるまい。次も「柳」と合わせて謡われている。

○桜島見て　靡かぬ人は、枝垂柳でもてかへる（鹿児島県鹿児島郡、雑謡、『同』）

「枝垂柳のもてかへり」はよじれた糸枝がもとに返ってしまうことで、それを「靡かぬ」こととしている理屈である。その理屈っぽさにすねた女の口ぶりがうかがわれ、そこに長い「女歌」（注28）の伝統も感じられる。

歌の表面は、桜島の見事さに心打たれない人の無風流さ・無感動さをあきれるという形であるが、「こんな美しい私を見ても少しも心を動かしてくれない人」を責めているのである。恋愛の主題としては「片思い」であろうか。「私に靡いて欲しい」「私に靡かぬあの人は憎らしい」というのである。

「靡く」歌については、確かに恋愛語としての広がりが一方にあって、余興歌や踊歌（盆踊）などの「遊び」的な歌にそれはより色濃いと思われる。その一方の、祝福語（注29）・儀礼語としての「靡く」との関係については、一方から一方が出たものだとか、二つながら歌謡語として並び行なわれてきたとか言うのは、今のところこれ以上の論断は避けるとしても、儀礼的、祝福的「靡く」は次のような歌にも及んでいて、この意味合いが根強く感じ取られていたことを確認しておきたいのである。

○十五七がやい　沢をのぼりに笛を吹く（吹ば）　峯の小松がみな靡く（おなじ国（陸奥）ふり津刈の十五七ぶし『鄙廼一曲』）

今日、青森県の民謡「津軽山唄」にも、

○十五七が　沢を登りに笛ふけば　峰の小松は皆靡く（『東北の民謡』）

と謡われている。ともあれ、一人前の杣人の仲間入りした「十五七」の晴れ姿をほめたたえた詞章で、その晴れ姿に峰々の小松が靡きかかるというのは祝福であり、この歌が座敷の祝宴歌になる道筋はそこから発していると思われる（注30）。

注1、ただし、生産生業に携わるときにも「うた」が謡われているが、仕事歌・作業歌そのものについては別の観点から扱うべきものと思っている。

注2、民謡の詞章の中で、「うたの場」にかかわっての重要な一語というものに注目したのは柳田国男であった。（『民謡覚書』、創元社、昭和十五年）

注3、「うたの場」（「儀礼文化」創刊号、昭五六、一〇、二五）・「民謡の歌詞 ― 埼玉県の麦打ち唄をめぐって」（「埼玉県史研究」第十五号、昭六〇、三、三〇）・「夜明けの歌 ― 歌謡儀礼論序説」（「儀礼文化」第十五号、平成三、三、二五）

注4、島根県女子師範学校編、昭七、二（『日本庶民史料集成』〈二十四巻〉所収）

注5、文部省文芸委員会編、国定教科書共同販売所刊、大三、九

注6、『俚謡集』にはいくつもの「藤の花」を謡う「田植歌」が載る。

○山川に咲きこだれる藤の花　藤の花　瀬にゆらされてゆら／＼と
（広島県比婆郡）

○娘千代の笠を裏見やれや　藤の花やら見事にさがりた（早乙女）
（音頭）
（同安佐郡）

○日はとろ／＼とさがり藤　ナーイ仕事を見れば　富士の山程　ナーイ
（千葉県市原郡）

○奥山に　ヤーハレ　さきほだれた花は何はなか　ヤーハレ／＼
（下）
何花か　ヤーハレ　さきほだれたはふぢの花（島根県大原郡）

○奥山の草刈りに栗の花も咲いたり　藤の花も咲いたり（山口県大島郡）

こうして並べてみると、ことさら田植え唄に「藤の花」が謡われるのは、その花の形状（房）の垂れさがるところに稲の穂の垂れさがりを見ているからであったことがわかる。最後の例では、「栗の花」とともに謡われているが、それもまた房状に垂れさがる花であるからであった。

注7、伊佐須美神社は陸奥国二の宮として古くから厚い信仰のあった社で、「お田植祭り」は七月十一日から十三日まで行なわれる。「御田植歌」は御田神社への神輿の渡御行列のあいだと、そこの神田で行なわれる田植えの祭典のあいだ、裃姿の楽人によって謡われるもので、一般には「催馬楽」といわれている。福島県文化叢書Ⅰ『福島の民謡とわらべ歌』（懸田弘訓編著、岩瀬書店、昭四九）では、

○大神（宮）の　みてつぼに　おろす豊（とよ）の　千垂（ちたりは）穂
○しないだや　しないだや　秋の垂穂　八束穂に

とある。

注8、いちいち詳しく述べ立てることはしないが、「柳卒塔婆」（三十三年忌の弔いあげに立てる卒塔婆）、「柳髪」（古く三月三日に婦女子が頭につけた）、「柳迎え」（小正月の豊穣予祝の飾り物）のほか、

神事や年中行事の折に作られる「柳箸」などの民俗は、いずれも柳の生命力にあやかってのものといえる。

注9、川端の柳で楊枝を作る生活が下地にあって、その柳陰が思う男女の忍び逢いの場所であった。そして、「○○にお待ちあれ、人問はば△△と答えあれ」が一つの型としてもてはやされ、様々な頓知・機知をはたらかせた逢い引き（忍び逢い）歌ができていった。そこに力を貸したのは中世から近世にかけての風流踊の盛行であり、その「忍び踊」の歌詞として各地でさまざまなこの型のものを伝えている。一つの資料として、高知県香美郡夜須町手結の「ツンツクツン踊」の「シノビをどり」の詞章をあげておく。

○おれを忍ハヽ　我家のつまの下におまちあれ　もしも人かいさとはヽ　我家の林とこたへさん／＼

○おれをしのハヽ　ほそ谷川でおまちあれ　もしも人がいさとハヽ手水をつかふとこたへさん

○おれを忍ハヽ　柳の下でおまちあれ　もしも人かいさとはヽ　ようしをけつるとこたへさん／＼

○おれを忍ハヽ　小松の下にてお待ちあれ　もしも人とハヽ　小松をはやすとこたへさん／＼（本田安次『語り物・風流二』より）

注10、同じ伝承であろう、琴歌譜「片降（かたおろし）」では次のようになっている。

○木綿垂（ゆふし）での　神が崎（さき）なる　稲の穂（ほ）の　諸穂（もろほ）に垂（し）でよ　これちふもなし

注11、外山暦郎「越後三條南郷談」（炉辺叢書、郷土研究社、大正一五・四・三〇）

注12、別に単に「広島県　田植歌」としても収録している。

注13、中村慶郎「因伯民謡 ― 特に労働民謡について」（鳥取県師範学校、郷土研究紀要第一輯、昭一四・三）（『日本庶民史料集成、二四』所収）

注14、東遊歌拾遺（日本古典文学大系『古代歌謡集』岩波書店）

注15、仙台中央放送局編、日本放送出版協会、昭一二・一二・五

注16、「白玉」は真珠である。『日本書紀』の、

琴頭に来居る影媛　玉ならば　吾が欲る玉の　鰒白珠（しらたま）

は影姫の美しさを真珠にたとえたもので、その高貴な美しさをほめたたえたものである。「催馬楽」の「高砂」（律）の、

高砂の　さいさごの　高砂の　尾上に立てる　白玉玉椿玉柳　それもがと　さむ　汝もがと　汝もがと　練緒染緒の　御衣架にせむ（以下略）

の「白玉」も「玉椿」「玉柳」を起こして椿・柳を祝福している。自然界にあっては、草木に置かれて白く美しく輝く「白露」と重なり、「白玉」に通ってほめ言葉になり、結果として「白露の」は「玉」にかかる枕詞にもなる。例えば『万葉集』の、

玉に貫き消たず賜らむ秋萩の末（うれ）わ　わら葉に置ける白露（八、一六一八、湯原王）

の「白露」は「玉」に見立てられ、ほめたたえられている。

「ゆらゆら」は生命力の旺溢せるものの動き・状態を言う。『延享五年小歌しやうが集』の、

○雨が降ろとて天王寺山の　松の緑がゆら／＼と

なども単なる叙景の歌ではないと思われる。また注6に挙げた「藤

の花」を謡う広島県の「田植歌」の「ゆらゆら」や次の「田植歌」の、

○おらがおせどの玉椿　もとが白銀葉が黄金　さゝもさ　たよゆら／＼と（千葉県千葉郡、『俚謡集』）

○むかう小山の百合の花　よくもさいたよ　ゆら／＼と（同印旛郡、同）

の「ゆら／＼」も単純に藤の花や椿の花、百合の花の揺れる様を謡っているのではなく、生命力の見事さをたたえているのである。

注17、『田植草紙』の「晩哥壱はん」には次のようにある。

こていとの（御亭殿）／＼　こまとこに（駒）（何処）つないた（繋）（だ）　うねをこし（畝）（越）谷をこし　さかり（下が）松につないた（だ）　うねをこしてはのきわ（野際）の松につないた（だ）　野辺につないで（て）　こまをいさませう（駒）（勇）

『俚謡集』の島根県美濃郡の「田植歌」、

○ゆくやごに駒はどこへつないだ　尾を越し谷をこし　さんがり松につないだ

○日は暮れる　ゆくやごぜんこまー　どこへつないだ　尾を越し谷を越し　さんがり松に繋いだ

注18、会津高田伊佐須美神社の「御田植歌」（催馬楽）にも、

○しら葦毛の　白の駒を　高天原に　つないだ

○大神（宮）の召さうとて　葦毛の駒を　つないだ

とある。神楽歌「日霊女歌（ひるめのうた）」（末）には、

○いづこにか　駒をつながむ　朝日子が　さすや丘辺の　玉笹の上に　玉笹の上に

とあって、「送り歌」の次第に組み込まれている。

注19、○雉の雌鳥小松の下で　親を待つやら　ほろゝうつ（山口県阿武郡、田植歌、『俚謡集』）

『閑吟集』にも巻頭部の賀歌の一つにある。

○めでたやな　松の下　千代もひくちよ　千代／＼と（六八）

注20、高知県立女子師範郷土室編（昭和八年六月、謄写版刷り、〈『日本庶民生活史料集成』二四所収〉）。なお「土佐郡じょや」として『巷謡編』にも残る。

注21、そもそも、「菅」が田植え唄の素材になるのは、早乙女の田植え装束の一つに「菅笠」があったからである。そして、その「なびき」を謡うのは早乙女たちの心のはなやぎ（恋の気分）の投影である。

注22、感動を表わす「なう」（間投助詞、終助詞）は、『閑吟集』に代表される中世小歌の味わいの一つ「嘆きの恋歌」を特徴的に示すものとされている。

注23、「東」は「幸」「祝福」の来る方角として意識されていたようである。

○こゝのお家は東の破風　あたる夜風は宝風（長野県木曽地方、地搗唄、『木曽民謡集』）

○めでためでたのどうづき様は　東枕に納めおく（同、同、『同』）

○これの御亭主の建方見れば　なぞな大工が建てたやら　白金柱に横黄金　東切窓銭すだれ　銭の穴から旭さす　朝のさしさに俵万俵　どんで此家は福しがる（秋田県、かけ歌、『東北の民謡』）

○ひがしへ向いたる小枝を見れば　しろがねばながつぼみそろ（広島県山県郡、盆踊歌、『俚謡集』）

特に田植え唄において、「東」のめでたさを謡っているものが目につく。『俚謡集』のみでも左記のものが拾える。

○ウンソーデハ　ハイ御正月の朝の寝起きに東を見れば　黄金まじりの霧がおす（山形県最上郡）

○東むきの東戸をさらりとあけて見たればー　こーがねまさりのあさひこそさいづる（島根県美濃郡）

○今日の農神様どちらの方からおいでたのー　東の方から　りゅごの駄馬でおいでたのー（同）

○千石出来る米を又どの倉に積まうなう　東向きの倉にこそげに積まう（広島県比婆郡）

○朝霧が東山に舞ひ居る　舞ひ居る　東山に（同）

○東くるまど　ほそどゝあけて見たらばの　こがねまさりのあさ日さしてはの（同県安佐郡）

注24、高野斑山・大竹紫葉共編、六合館刊、大正四・四

注25、「ざんざと」は、水の流れ、雨・風・雲といったものの勢いのよさ、盛んなものの立てる音、あるいはその状態を形容する言葉であることが「祝福」につながる。

○ざんざとあられの降るは　見立在所の米かいな（石川県羽咋郡、籾摺歌、『俚謡集』）

一体に「ざんざと」は臼摺りの仕事歌に広く謡われているが、直接、祝意ということより、その仕事のはかどりをこの語によって予感したかったようである。木曽地方の臼摺唄に、

○臼よ廻れよ　ざんさとおりろ　かけた襷の廻る程（『木曽民謡集』）

○臼よ廻れよ　ざんさとおりろ　明日はお客をたてたいに（『同』）

といったものがある。

注26、菅江真澄編著、文化六年（一八〇九）年頃成立

注27、編者未詳、寛政二年（一七九〇）成立

注28、折口信夫は、女性の歌は神の祭りの夜のかけあい文句から出ていて、あげ足とり・はぐらかしであり、その恋歌には真実味というものがなく、無意識の性の焔と機智の閃きであると説き、それは歌垣のかけあいに起源をもつ日本の恋歌の特性なのだという（「古代生活に見えた恋愛」〈全集一〉ほか）。

注29、祝福語としての「なびく」は、

〽○○へ○○へと草木もなびく　○○いよいか住みよいか

という民謡の詞章に典型化されている。「○○」には土地名が入り、その土地の繁栄ぶりを謡う、「土地讃め」の詞章となっている。

注30、拙著「婚礼座敷歌の役割――津軽山唄」（『近世歌謡・民謡の研究』桜楓社、昭和五五、七）

NEWNHAM LANGUAGE CENTRE

8, Grange Road, Cambridge CB3 9DU, England
Telephone (+44) 1223 311344, Fax (+44) 1223 461411

Principal
Marie-Louise Banning, BA, RSA Dip TEFL

Certificate of attendance

RE: NAOKI KONO

I hereby certify that the above-mentioned student has successfully completed an intensive two week Teachers' Refresher course at our Centre, receiving 27 lessons of 50 minutes per week.

From *31 July 1995* To *11 August 1995*

The course consisted of language development, methodology and some classroom observation.

P. O'Sullivan Class Teacher

Principal

Recognised by the British Council

Directors: Michael Short, BA, Dip Ed and Gertraud Short.

ARELS

Shetland Islands
0 100 km
0 100 miles
Orkney Islands
Tongue
John O' Groats
Hebrides
Inverness
Aberdeen
Fort Augustus
SCOTLAND
Dundee
NORTH SEA
Edinburgh
Glasgow
NORTHERN IRELAND
Belfast
Newcastle
Richmond
Isle of Man
Bradford
York
REPUBLIC OF IRELAND
IRISH SEA
Leeds
Manchester
Liverpool
Dublin
Anglesey
Sheffield
Nottingham
Birmingham
Norwich
Cambridge
WALES
Colchester
ENGLAND
Swansea
Cardiff
Bristol
London
Clevedon
BELGIUM
Southampton
Portsmouth
Land's End
Plymouth
Isle of Wight
Isles of Scilly
ENGLISH CHANNEL
Penzance
ATLANTIC OCEAN
Channel Islands
FRANCE

4．真の国際交流のために、自国のことを英語で説明できる力をつけておくことも必要不可欠です。日本の文化・伝統・歴史等を普段から英語で言えるようにしておくことは最重要です。

5．そして最後に、授業をする上で最も重要なのは“徹底した教材研究”です。良い授業をするためには時間を惜しまず、何度も何度も教材に目を通すことです。

最後になりましたが、今回の研修に派遣させて戴きまして本当にありがとうございました。獨協中学・高等学校の教職員の方々に感謝をしながら、この報告書を終えたいと思います。

Tourist Information Centre（ツーリスト・インフォメーション・センター：旅行案内所）へ行き、宿泊施設を斡旋してもらいました。たまたま車を持っているのが幸いし、エジンバラから車で40分程の田舎のホテルを紹介してもらったのです。ここのホテルも今回が4回目です。朝食を作ってくれるおばさんとはすっかり顔馴染みになり、ここでもおばさんとの再会を楽しみました。

8月17日(木)、この日はどこへも寄らず、ひたすらエセックス大学のあるコルチェスターを目指すのみでした。エジンバラ・フェスティバルを全く無視して、我々はエジンバラの町を通過しました。これは教授も私も既にエジンバラを何回か見学をしているからでして、決してこの美しい町（北のアテネと呼ばれています）が嫌いというわけではありません。エセックス大学には夜の9時頃に無事事故もなく到着しました。今回の旅、教授は運転免許証をお持ちではないため、すべて私1人の運転でした。しかし、疲れたというよりはドライブと美しい風景、そして知人との再会を楽しんだという満足感の方が率直な気持ちでした。日本と比べて渋滞がほとんどないこと、道路が良く整備され広いこと、その上、すばらしい自然を見ながらの運転等々、列挙すればきりがない程楽しい充実した時間を過ごすことができました。

おわりに

以上長々と書いて参りましたが、今回の研修のおかげで私自身本当に貴重な時間を過ごすことができ、また貴重な体験を得ることができました。今回得た経験をこれからの獨協中学・高等学校の教育活動に活かしていきたいと思っております。今回の英国滞在で本当に様々な人との出会いがありました。こういう民間外交、草の根の国際交流がもっと大きな国際親善に繋がっていけばと思っております。また、是非近いうちに彼らと再会し、長い付き合いを続けていきたいと思っております。

以上の報告をまとめまして、日本の英語教育に関する私見を申し上げたく存じます。

1．英語は生きている“音”であるということです。英語の教員は良い音を生徒に何度も何度も聞かせて繰り返すことが重要です。これが英語教育、特に中学英語教育の基本であると思います。
2．そのために、英語教員は英語圏（English-speaking country）で研修することが必要不可欠であると信じて疑いません。期間は最低1年間が理想です。
3．そして、英語圏へ行ったら、文献からの勉強だけではなく、自ら現地の人の中へ入っていき、交流することです。こういうのが、真の国際交流へとつながっていくものと確信しています。

ルの食堂から出てくると、町全体が1時間前とは全く違う風景と交通規制がありました。我々は町の中心部を通れず、遠回りする形で町を走っていますと、町のあちらこちらで正装をしたスコットランド軍人らしき人が多数いました。彼らの正装というのは言うまでもなく、スコットランド特有のタータンチェックのキルトスカートを身につけることです。私たちは、今日が何の日であるかをすぐ思い出しました。我々にとっては終戦（敗戦）記念日でありますが、彼らにとっては戦勝記念日なのです。我々は何とも言えない気分になり、最北端を目指しました。

John O'Groats は北の端という印象を本当に受けました。空は雲が低く立ちこめ、鬱蒼とした暗さも加わり、“ずいぶん遠い所まで車だけでやってきたなあ！”という思いで感傷に浸りました。ここはブリテン島の最北端というだけで、ここからさらに北にはOrkney Islands（オークニー諸島）、Shetland Islands（シェトランド諸島）が続いています。今度来る時には、飛行機でこれらの島にも行きたいと思いました。我々はさらに海岸線を西に進み、この日はTongue（タン）という町のホテルに宿泊しました。Lake viewという部屋から美しい湖が見える部屋で、ここでも景色の美しさと広大さにため息ばかりでした。今年のイギリスは異常気象で、気温が日中は30度を越え、これは異常な天気だとイギリス人はみな口を揃えて言っていました。ところがここスコットランドの北端では非常に寒く、暖房のスイッチを入れた程でした。北海道の帯広では、夏でも朝はストーブをつけるという話を聞いたことがあります。こういう所は英国と日本は似ているという印象を持ちました。

8月16日㈬、我々はA836という本当の田舎道を走り、Edinburgh（エジンバラ）を目指しました。この田舎道は1車線のため、対向車がいつ来るかとはらはらどきどきの連続でした。道路のいたるところに待避所があり、緊張の連続で運転をしました。自転車やオートバイで旅行している人も多く、みなこの美しいスコットランドの自然を楽しんでいました。右に左に湖が見え、消えたかと思うとまた河や小川が流れ、是非近いうちに再訪したいと思いました。インバネスからはA9という道路を走り、Perth（パース）を経由し、本日の目的地であるエジンバラの北の町Dunfermline（ダンフェルムライン）の近くの田舎のKingseat（キングシート）のホテルThe Halfway Houseを目指しました。なぜこんな田舎のホテルを知っているのかといいますと、時は1993年8月下旬まで逆上ります。この時期はエジンバラの町でEdinburgh Festival（エジンバラ・フェスティバル）というお祭りをしており、エジンバラ市内の宿泊施設は予約で一杯となり、ほとんど宿泊不可能になります。そんなことを知らない私は夜8時頃、まだ明るいエジンバラに車で到着し、あちらこちらのホテルを片っ端から探していました。1時間程しても宿泊不可能なことがわかった私はエジンバラ駅の

のに“Welcome to Scotland!”と書いた看板があります。スコットランド人が運転しているバスに乗ると、この国境を越える時に“It's our country!”と叫び、ガッツポーズをするという話を聞いたことがあります。途中、高速道路の休憩所で給油する時に、ホテルのオーナーであるHector(ヘクター)にホテルの予約の電話を入れました。ヘクターは“安全運転をして来てくださいね。あなた方に再会できるのを楽しみに待っています。”と言って、電話を切りました。5ヶ月前の3月、教授と私はヘクターのところで宿泊をしていますので、我々のことをよく知っているのです。私はダニエル同様、ヘクターにも樽酒を用意してきました。スコットランドのthe Highlandsと呼ばれている山岳地方の美しい風景を見ながら、夜7時頃、ヘクターのホテルへと到着しました。3月に訪れた時は、息子さんは大学にいたため会えませんでしたが、今度は夏休み中ということで息子さんにも再会することができました。ヘクターも息子さんも私たちとの再会と日本酒の樽酒を非常に喜んでくれ、“こんな貴重な日本酒をありがとうございます。私はフロント業務がありますから、パブが閉まる11時からならお相手できますから。”という挨拶でした。我々はのんびりと夕食をホテルのパブで食べた後、そのままパブのソファーに座ってくつろいでいました。ヘクターはこの地元でしか飲めないという最高級のスコッチウィスキーを我々に3種類4杯ずつ無料で出してくれました。こんな高級なものを日本のホテルのバーで飲んだら、一体いくら取られるのだろうかと思いました。ヘクターは若い頃、弁護士として働いていて、歳をとったので、今は知人に頼まれてホテルのオーナーをしている話等をしました。“自分はケンブリッジ大学出身、息子はオックスフォード出身なので、いつもどっちの大学が良いかで、冗談半分の口論になるんですよ。”とも話していました。話しているうちに夜の12時を越え、8月15日、終戦記念日になってしまいました。話題が戦争の話にもなってしまったのですが、“そんなのは過去のこと。”と言いながら、私たちが不愉快になるような話は一切せず、日本人に対する気遣いを感じました。夜も1時になりましたので、私たちの方から“今日は本当に楽しい時間をありがとうございました。”と言い残し、部屋に戻りました。

8月15日㈫、ヘクターは早起きして飛行機に乗りに行ってしまい、息子さんはまだ睡眠中ということで、我々は“よろしくお伝えください。”というメッセージを残し、ホテルを後にしました。今日はとうとう最北端のJohn O'Groatsを目指します。先ずはネス湖を北上します。たまたま曇りだったせいか、湖の色も雲っており、本当に怪獣ネッシーが出そうな気がしました。Inverness(インバネス)まではA82を通り、そこからさらにA9の道路を北上しました。John O'Groatsまであと25㎞までの地点にWick(ウィック)という町があり、我々はそこで遅い昼食を取りました。ホテ

パブに教授と２人で入って行くと、大変びっくりすると同時に喜んでくれて、力強い握手をしました。私は持ってきた日本酒の樽酒をお土産だと渡すと、彼は“It's silly.”（そんな馬鹿なことをするな。）と言い“Thank you very much!”を繰り返していました。彼は北部訛りなので“ベリーマッチ”という発音ではなく、“ベリーモッチ”となっていたのが印象的でした。“これは日本酒で滅多にイギリスでは手に入らないし、飲み終わった後も、飾りになるよ。”と言うと、ダニエルは本当に嬉しそうでした。その後、教授と私に、“何を飲む？”と聞いてくれ、その日、我々からはビールのお金を取ってくれませんでした。私は数えきれないくらいの回数パブへ足を運んでいますが、こんな経験は初めてでした。

８月14日(月)、朝、ダニエルは私たちに１つずつ袋をお土産にくれました。その袋を見てみますと、大量の枚数と種類のbeer coaster（ビール・コースター：ビールジョッキの下に敷くビールの銘柄の印刷された紙）、beer towel（ビール・タオル：パブでジョッキにビールをついで、泡がこぼれた直後にジョッキを置く布のこと）、ビールの銘柄が入った灰皿が入っていました。それらはすべて非売品で、ダニエルは“昨日のお礼だよ！”とウインクをしながら笑いました。我々は大変恐縮しながら、お礼を言い、ダニエルとパブの前で記念撮影をして別れました。娘のヘレン(Helen)も見送ってくれました。私が“日本語を習っているんでしょ？”と言いますと、ヘレンは“私はヘレンです。”と流暢な日本語を話し、みんな大笑いをしました。私たちはヨークシャー・デールの素晴らしい景色を堪能しながら、次の目的地スコットランドのネス湖の南にある町Fort Augustus（フォート・オーガスタス）のLovat Arms Hotelへ向かいました。私にとってこの地を訪れるのも３回目です。最初に訪れたのは、リッチモンドと同じ1994年８月でした。夜の７時を過ぎたので、そろそろホテルを探そうかと教え子とあちこち探している時に、少々値段は高いけれど、こぎれいなホテルなので宿泊することにしました。チェックインをしている時に、ホテルのオーナーが“日本人？”と尋ねるので、“Yes!”と答えますと、オーナーは嬉しそうに、“私の息子は大学生なのですが、去年日本に３ヶ月いて、日本人からものすごく良くしてもらったのです。今、息子を呼ぶから待っていてください。”と言うと電話で息子さんを呼び出しました。息子さんはオックスフォード(Oxford)大学の学生で、東京の私立高校にアシスタントとして３ヶ月滞在したそうです。私は名刺を出し、“私は東京にある獨協中学・高等学校という私立学校の英語の教員です。”と言うと、彼はびっくりした様子で、“僕は音羽にホームスティしていました。”と言うではありませんか。私の名刺の“Bunkyo－ku”（文京区）というのが大変懐かしかったのだと思います。

私たちの車はイングランドからスコットランドに入りました。同じイギリスである

ブとイン（inn）を経営しているDaniel（ダニエル）に再会するのが主な目的です。私は1994年8月、1995年3月と2度訪れており、今回で3回目ということになります。日本人にはほとんど知られていないリッチモンドをなぜ訪れたかと言いますと、1994年8月ケンブリッジを訪れた際、ホームスティのお父さんグラハムから、これから車でどこへ旅行するのかと聞かれたことに起因します。私は“以前行ったヨークにもう1度行くつもりです。私は行ったことがありますが、私の生徒（私のかつての教え子が同行していました）が行ったことがありませんから。”と言うと、グラハムは“ヨークなんてたくさんの人が行く観光地だから、その先のリッチモンドに行きなさい。そして、Yorkshire Dale（ヨークシャー・デール：ヨークシャー州一帯に広がる谷。大変景色の素晴らしいところ）を通って、スコットランドに行きなさい。”と言いながら、私の地図にお勧めのコースを書き込んでくれたことが始まりでした。その時、グラハムに言われた通りのドライブをしたところ、最高の風景を堪能することができました。まさしく車がないと行けない場所で、またほとんど日本人がいないので異国情緒を感じました。リッチモンドは城がある町で、今は廃墟に近くなってしまった城の周りを散歩コースとして歩くことができます。この散歩コースから見る谷の風景が素晴らしいのです。町の中心部にはホテルやスーパーマーケットがあり、パブも集中しています。イギリス名物Pub Crawl（パブ・クロール：日本で言う“はしご酒”です。1杯飲んだら、次のパブへと行くものです）をするには最高の場所です。ダニエルが経営するパブThe Buck Innは町の中心部から少し離れたところにあります。ダニエルと初めて会った時はパブ・クロールの最中でした。日本人なんか滅多に来ない田舎ですから、日本人が珍しかったのでしょう。その上、ダニエルの娘さんが日本語を習っているということから、余計にダニエルは日本人に興味を持ったのだと思います。その時には、“また来るね！”という挨拶だけを残して別れました。1995年3月下旬、7ヶ月ぶりにリッチモンドを訪れました。この時は秋山教授と私のかつての教え子2人と合計4人で訪れました。ダニエルは再会を喜び、本当に再び来てくれたことが大変嬉しいと言ってくれました。別れ際には我々4人にビールの銘柄が印刷されたTシャツをくれました。そして、“今度来るときには自分の所に宿泊しなさい。”と言ってくれました。我々は大変恐縮しました。ただの通りすがりの旅行者のパブの客にTシャツをくれるダニエル。年齢は50歳前後だと思います。北部訛りと労働者訛りが強いため、決してわかりやすい英語ではありませんでしたが、そこには温かい心が感じられました。私は絶対にもう1度訪れよう、そして、今度はダニエルのインに宿泊しようと決心しました。そして5ヶ月後の今回、実行に移すことができました。私は前回のお礼にと成田空港の免税店で日本酒の樽酒をダニエルに買っていきました。

なるべくホテルに宿泊せず、キャラバンを引っ張り、キャンプ場を目指すのです。キャンプ場は安い値段で場所を提供してくれ、水、トイレやシャワー等の心配をすることもないのです。そういうところで、なるべくお金を使わないようにして、のんびり自炊をして暮らすのです。ただ休みも取れずに働く日本人と違って、人生の楽しみ方を知っている国民だと思います（イギリスに限らず、ヨーロッパは全部そうです)。日本のゴールデンウィークに大量の人が移動しますが、イギリスではそういうことはないようです。渋滞の原因は、道が急に狭くなったことと（2車線が1車線になった)、キャンプ場が密集している地区に入ったためでした。予定の時間を大幅に過ぎて、最西端まで到着しました。そこは観光化されていて、イギリスらしくない場所でした。日本の観光地はほとんど観光化され、お土産屋やホテルが並び、自然の状態がほとんど残っていませんが、イギリスはNational Trust（文化保護財団）がある国ですから、自然のままかと思いましたので、正直言って驚き、がっかりしました。この日はPenzance（ペンザンス）という港町のinn（宿屋）に宿泊しました。1階がパブで2階と3階が宿泊用の部屋がある宿でした。このパブは珍しく（土曜日の夜ということもあったかもしれませんが)、音楽の生演奏をしていました。私たちは静かなパブを求めてその場所を辞去しましたが、近所のパブはもっと煙草の煙がもくもくで、喧騒としており、自分の宿のパブに戻りました。私の印象からするとイギリスのパブは比較的静かな所が多いのですが、やはりここは港町なのかなあと思いました。パブの従業員の女性の1人が、獨協大学国際交流センターの職員の方にそっくりで、教授と私は“イギリスにいる気がしませんね？”と言いながら、飲み物を注文する時にその女性に“あなたのお姉さんは日本で働いていませんか？”と冗談まじりで話しかけ、“でも、あなたの方がずっと若くて、きれいですよ！”と言い、彼女は照れて真っ赤になりました。これをきっかけにパブの従業員と話が弾み、パブでの会話を楽しみました。

8月6日(日)、この日はただひたすらColchesterを目指し、走るのみでした。夕方、無事Colchesterへ到着し、私はその後、Cambridge へと戻りました。

【John O'Groatsへの旅】

今回の旅はJohn O'Groatsというブリテン島最北端を目指す旅でしたが、同時に知り合いとの再会の旅でもありました。1995年3月下旬、春休みを利用して英国を訪れましたが、その時に北イングランド、ウェールズ（Wales)、スコットランド（Scotland）を訪れました。その時に宿泊をした宿を再び訪れるという目的もありました。

8月13日(日)、秋山教授と私は、朝早くColchesterを出発しました。今日の目的地はYork（ヨーク）の北にあるRichmond（リッチモンド）という場所です。ここでパ

【Land's Endへの旅】

Land's Endはブリテン島の最西端にあるところです。北へはよく旅行をしたことがありましたが、西へは全く行ったことがなかったため、この機会を利用して訪れてみることにしました。出発は8月4日㈮。午前中で授業が終わるため、午後から車で出発しました。先ずはCambridgeからエセックス大学のあるColchesterへ向かいました。エセックス大学には私の学生時代の恩師である秋山武夫教授が、獨協大学長期海外研修員として滞在していらっしゃいました。先生を旅行にお誘いし、旅が始まりました。目指すLand's EndまではColchesterから約600kmあります。とてもその日のうちに到着できないので、取り敢えずは行けるところまで行きましょうということになりました。ロンドン近郊を循環しているM25（MはMotorways モーターウェイ・高速道路の略です）を走り、私たちはBristol（ブリストル）を目指しました。今日はその近くのどこか田舎町で宿泊をしましょうという計画を立てていました。車の旅行の良いところは、行き当たりばったりで適当なところに宿を探せるところです。日本と違って、英国では旅行をする時に、余程混雑する時期以外、予約を入れる必要は全くありません。

夜の8時を過ぎましたので（あまりに明るいので、時間の感覚が麻痺するのです）、そろそろ宿を探そうということになり、我々はBristolの西の海岸に面しているClevedon（クレヴドン）というところに行ってみました。町全体がリゾート地で、ほとんどの宿は満室でした。しかし、諦めずに30分ほど探していると、町の外れにこじんまりした良いホテルが見つかりました。Sea viewというホテルの部屋から海が見える素晴らしい部屋で、朝食付きで1人£20（約3,200円）でした。イギリスはだいたいの宿がB&B（Bed & Breakfast）のシステムをとっており、寝る場所と朝食の料金が基本単位となっています。日本では考えられない安さですし、そのホテルは日本人が初めて来たらしく、夕食後、パブでホテルのオーナーと話が弾みました。オーナーはニュージーランド人、奥さんはイギリス人で、若い頃イギリスへ旅行に来た時に奥さんと知り合い、それが縁で結婚し、ホテルを経営しているとのことでした。私はニュージーランドに3回行ったことがあるので、余計に話が盛り上がりました。また機会があったら、訪れてみたいホテルでした。

8月5日㈯、この日はLand's Endを目指しました。M5に戻り、一般道路を最西端へ目指していると大渋滞に巻き込まれました。イギリスの道を運転していて、こんな大渋滞に遭遇したのは初めてでした。丁度、夏休み中の週末、ホリデー（holiday: 長期休暇）を利用して家族連れの旅行が多い時期でした。多くのイギリス人は、自分の車の後ろにキャラバンと呼ばれるキャンピングカーを連結して、旅行をするのです。

に参加し、スティーブは現れませんでした。翌日、女性軍が“スティーブ、昨日はどうして参加しなかったのか？”と詰め寄り（女性、特にヨーロッパの女性は怖いと、この時改めて思いました）、スティーブは“昨日は用事があったので、参加できなくて申し訳ない。代わりに、今日の夜、自分の行きつけのパブで飲もう！”ということになり、その日の夜、今度はスティーブの家の近所のパブでビールを飲みながら、楽しい会話が続きました。我々のグループは、本当にアルコールの好きな人が集まっているようでした。

〈資料11〉

NLC Social Programme－SUMMER COURSES－August 1995

WEEK	MONDAY	TUESDAY	WEDNESDAY	THURSDAY	FRIDAY	SATURDAY	SUNDAY
JULY 31－AUG6	31 Sport－4 6pm. Film Night in the Clubroom at 8pm.	1 Sport 4－6pm. Film Night in the Clubroom at 8pm.	2 Sport 4－6pm. Welcome Evening at 8pm. Chance to meet old and new students	3 Sport 4－6pm. Table Tennis Tournament at 8pm in the Clubroom.	4 Sports and activity afternoon	5 London Trip for SC4 (B), Teacher Course, SC4(25+), IBE students. York Excursion £ 18.	6 Stratford and Warwick Excursion £ 16. Nottingham and Sherwood Forest £ 13.
AUG 7－13	7 Sport 4－6pm Film Night at 8pm	8 Sport 4－6pm Film Night at 8pm	9 Sport 4－6pm Barbecue for SC4 (25+), Teacher Course, and IBE students at 8pm.	10 Sport 4－6pm One Man Theatre Show in Clubroom at 8pm.	11 Sports and activity afternoon	1213 London Trip for SC4 (A) students. Depart form NCL at 8. 30am Oxford and Blenheim Palace £ 16 Edinburgh 2－day £ 79 Edinburgh 1－day £ 31	 Alton Towers Theme Park. £ 13 Canterbury and Leeds Castle £ 14

Ⅳ. ブリテン島最西端（Land's End）と最北端（John O'Groats）への旅

今回は学校から金銭的な援助を戴きましたので、1ヶ月という長い間、レンタカーを借りることに致しました。せっかく1ヶ月という期間を与えて戴きましたので、勉強だけではなく、旅行をしながら英国文化を直接自分の目で見て、現地の人と交流することも大事だと思ったからです。ここ数年、夏休みや春休みを利用してイギリスへ何度か行っていましたが、いつもロンドン・ヒースロー空港からレンタカーを借りていました。日本と同じ左側通行であることから運転はし易く、その上、イギリスの道路は大変良く整備されています。道路標識もわかりやすく、外国人である私でも迷うことは全くありません。さらに良いことには、イギリスのほとんどの高速道路が無料であることです。電車の本数が少ないこと、また車でないと辿り着けないところも多々あります。今回の旅は、まだ行ったことがないところと、かつて行った場所で知り合いになった英国人との再会の旅でした。

このような作業をする度に、私は自分の語彙力の無さに途方にくれました。ヨーロッパ人は直感的にどんどん答を出していくのです。語彙力をつけるには、上記のような問題集を使い、自分で実践するしかないと思いました。“Practice makes perfect.”（習うより慣れろ）という諺がありますが、なるほどと思いました。

授業の話はこれくらいにしておいて、放課後の話に移りたいと思います。

【NLC Social Programme】

この学校の大きな特徴として挙げられるのが、このソーシャル・プログラムです。日本語では何と訳せばいいのかわからないのですが、日本の中高でいうところの『放課後の活動』というのが適語だと思われます。〈資料11〉を見て戴ければわかりますが、毎日多彩なプログラムが我々学生のために用意されていました。月～金だけでなく、土日には数々の旅行が企画され、町の旅行会社と提携し、値段もかなり格安になっていました。教室の勉強だけではなく、このような行事を通じて、友人との交流から自然に語学が学べるよう工夫されています。そのため、学校にはSocial Organiser（このプログラムの責任者）としてDavid Hammond氏がこのプログラムを統括していました。私が参加したのは、8月9日㈬の夜に行われたバーベキューパーティーだけでした。我々先生コースは2週間と短期間のため、毎日のようにたくさんの宿題が出されましたし、プログラムに参加している多くは10代後半から20代前半の若者が多く、ついジェネレーションギャップを感じてしまい、参加することから遠のいてしまいました。8月6日㈯のロンドンへの旅行は無料でしたが、私自身既に何度もロンドンへは行っていますし、帰りのコーチ（coach：イギリスではバスのことをコーチと呼びます。ですから、町の中心部の大きなバス停留所のことを“コーチステーション”と言います。）の出発時間が早すぎるため、参加しないことにしました。せっかくロンドンに行くなら、夜、ミュージカルやクラッシックコンサートに行きたいと思っていました。

バーベキューパーティーは夜8時から始まりました。既に述べましたが、夜8時というと真っ暗だと思ってしまうかもしれませんが、イギリスの夏の夜の8時というのは太陽が高く輝いています。学校の職員の方が肉を焼いてくれたり、ソフトドリンクを振る舞ってくれました。ラムが嫌いな私はお世辞にも美味いバーベキューとは言えませんが、ハンガリー人男性が高級ハンガリーワインを持ってきて、それをみんなに振る舞い、アルコールが入ったせいか、会話が弾みました。ヨーロッパの人はアルコールが強く、酔って乱れる人はほとんどいません（当然、例外もありますが）。飲むと陽気になり、本当に楽しい一時でした。私たちの担当の先生はパットだけがパーティー

2. The London-to-Sydney flight touched down in Bombay.
(a) made a stop (b) crashed (c) flew low (d) was forced to land

3. Jeremy loves tinkering with old sports cars.
(a) impressing girls by taking them out in (b) driving fast in
(c) buying and selling (d) trying to repair

4. The doctor is busy right now, but she could probably fit you in later.
(a) examine (b) try to cure (c) find time to see (d) look after

(以下省略)

〈資料10〉

Phrasal verbs with OUT

Complete these sentences by adding the correct verb from the list below. (in some cases, you will need to change the tense or form of the verb.) Use each verb once only.

dig	fall	pick	slip	throw	drop	help	rub
stand	wipe	dry	pass	show	take	work	

1. Don always uses a pencil when he is writing a report, so that, if he decided to remove something from it, he can just [ ] it out.

2. "Where's Jonathan?"
"He won't be long. He's just [ ] out to the tobacconist's to get cigarettes.

3. The idea of an indentity parade is quite simple. You stand a number of people in a line, including the suspected person. Then a witness is asked to [ ] out the suspect from the others.

4. There has been no rain at all this summer: even the village pond has [ ] out completely.

5. To celebrate my examination success, my parents [ ] me out for dinner.

(以下省略)

と内心思うことにした私でした。

【8月3日㈭】

2時限目はLL教室（Language Laboratory）で“Listening Exercise”の授業でした。“Stress（ストレス、強勢）and Intonation（イントネーション、抑揚）”をプリントを使いながら勉強しました。英語と日本語という言語を accent（アクセント）という観点から見てみますと、英語は stress accent（強弱アクセント）の言語、日本語は pitch accent（高低アクセント）の言語ということになります。これはどういうことかと言いますと、英語というのは、音の観点から見ると“強い”“弱い”が基本となっています。強弱のリズムをうまく使わないと、俗にいう“日本人英語”になってしまいます。日本語というのは、音の高い、低いで意味を使い分けます。具体的に言いますと、“はし”という2文字の言葉も、“は”を高く、“し”を低く発音すると“箸”の意味になり、逆に“は”を低く、“し”を高く発音すると“橋”“端”の意味になります。この点、日本語と英語はアクセントの種類が全く違うのだということを、我々英語教員が意識して生徒に指導しなければいけません。しかし、私もそうですが、生まれてからずっと日本語を自然に使用してきましたので、英語を話す時にはかなり意識をしないと、英語の正しい読み方をするのは大変困難なことです。先ずは、ネイティブ・スピーカーの音を模倣することが基本だと感じました。そのためには、このＬＬ教室での授業というのは、大変有効な方法だと思いました。また、本校の新校舎にＬＬ教室は必要不可欠であると痛感致しました。

4時限目は、“Phrasal Verbs”（句動詞）の授業でした。句動詞とは動詞だけ単独に使われるものではなく、動詞の後に前置詞、副詞、名詞などが続き、1つの意味をなすものです。これは日本の大学入試でもよく出題されるので、大変重要なものです。

〈資料9〉

Definitions

Choose the alternative which best matches the meaning of the underlined phrase.

1. Simon hasn't got a job, and isn't trying to get one: he just sponges on his friends.

   (a) works with them　(b) complains to them about his situation

   (c) borrows money from them　(d) takes advantage of their kindness

仕上げとして、〈資料8〉が配付されました。最近は、イギリス英語とアメリカ英語だけではなく、様々な英語の変種が世界各地で使用され、国際英語（International English）として確立されようとしています。1995年3月、ケンブリッジ大学出版局から“CAMBRIDGE INTERNATIONAL DICTIONARY of ENGLISH”が発売され、大好評です。まさしく、そのような時代になったと感じます。我々英語教員もイギリス・アメリカの2大英語を標準英語と考えるのが自然であるように思えますが、さらにグローバルな観点から英語の変種を見ていきたいものです。

“Dialect and Accent”ではイギリス方言の勉強をしました。これは私の学生時代の専門であった言語学の一部門である“社会言語学（sociolinguistics）”の領域に入ると思われます。“dialect”は“方言”“地方語”“地方なまり”などと訳されます。日本にも当然、地方方言があります。但し、イギリスと日本の明らかに違う点は、イギリスの場合、地方方言（regional dialect）の他に、階級方言（social dialect, class dialect）があるということです。階級社会が残るイギリスならではのことであり、“dialectology（方言学）”の研究が盛んなこともわかるような気がします。同じケンブリッジに住んでいる住民でも、大学の教授が話す英語とバス・タクシーの運転手さんなどが話す労働者階級の話す英語とでは明らかに違うのです。日本だったら、同じ横浜に住んでいる人なら、大学の先生であろうとタクシーの運転手さんであろうと、地方出身者でない限り、同じ格好をしていれば、方言の違いには気がつかないでしょう。

一方、“accent”はこの場合、“訛り（なまり）”と訳すのが適当だと思われます。例えば、“He has a strong accent.”と言うと、「彼の訛りは強い。」という意味です。

話を元に戻しましょう。この授業ではイギリスの地図が配られ、次の地名はどこにあるのかをクイズ形式で確認していく作業を行いました。Birmingham（バーミンガム）、Manchester（マンチェスター）、Nottingham（ノッティンガム）、Cardiff（カーディフ）、Edinburgh（エジンバラ）、Cambridge（ケンブリッジ）、Oxford（オックスフォード）、Bristol（ブリストル）、Bournemouth（ボーンマス）、Belfast（ベルファースト）の有名な10の都市です。それから、先生は5種類の声のテープを聞かせ、一体この声はどこの地方で話されているかを当てさせる作業をしました。この5つとは、the West Country（西部）、East Anglia（東部アングリア地方）、Londonderry（ロンドンデリー）、the Pennines（英国北部ペニン山脈）、the Highlands（スコットランド・ハイランド地方）です。我々にはさっぱりわかりませんでしたが、先生は各地方の特徴を真似しながら詳しく説明して下さいました。“こんなの我々日本人にはわからないよなぁ？”と思う反面、“我々日本人だって、九州、四国、関西、関東、東北の言葉の違いくらいなら、特種な訓練をしなくてもわかるよなぁ？　それと同じだろ！”

リングで書くと、御丁寧に赤で直されますし、文法的にも直してくれます。戦後、アメリカの経済力のため世界の英語はイギリス英語からアメリカ英語へという傾向にありますが（日本も例外ではありません）、イギリス人は今でも英語の本場はイギリスだと思い込んでいます。よく“イギリス最大の財産は何でしょうか？”というなぞなぞの答が“英語”と皮肉っぽく言われますが、ある意味ではあたっているような気がします。　この時間、先ず、上記の〈資料7〉が配られ、イギリス英語とアメリカ英語のスペリングの相違をクイズ形式で問題を解いてから、先生の説明という形がとられました。プリントが配られた時、当然［　　］内は空欄でしたが、アメリカ英語とイギリス英語の相違を明らかにするため、ここでは正解を示したものを、〈資料7〉として出しておきます。

〈資料7〉が終了後、短い文章の一節が配付され、次のような指示が英語で書いてありました。

Read the extract below from Muhammed Ali's autobiography. There are several examples (grammar, spelling and vocabulary) of American English. Find them, and say what their equivalent is in British English.

我々はモハメッド・アリの自叙伝を読み、イギリス式の文法・綴り・単語に直していく作業を行いました。

〈資料8〉

Here are some more Americanisms.
Write their equivalents in British English.

a. He ain't gonna help.
b. I gotta go.
c. Monday thru Friday.
d. Did you have a good vacation?
e. Boy, he was real mad!
f. Wanna cookie?
g. I arrived in the fall.
h. Waiter! The check, please.
i. I'm going downtown.
j. What did you do on the weekend?

negativeであるのか、2人ずつのペアを作らせて、議論させていました。9年前にも感じたことですが、この学校（この国或はヨーロッパ全体かもしれませんが）の方法として、pair work→discussionというのが流れの基本であるかのように思えました。これが日本人の私には苦手でしたし、他の日本人（特に大学生）にも直接聞いてみましたが、同じ答が返ってきました。日本の教育はそうなっていませんし、我々は議論すること、自分の意見を持ち、理論立てて話すことに本当に慣れていないと痛感しました。若い人がどんどん英語圏に留学することによって、そういう経験を日本に紹介し、日本の教育もどんどん変化していくのではないかと期待しています。

3時限目は“British v American English”“Dialect and Accent”でした。これは全く私の経験からの判断なのですが、イギリス人は“英語を話せること＝偉い”と思っている人間が非常に多く、また英語というのは生粋のイギリス英語であると信じているような気がします。ですから、アメリカ英語を極端に嫌い、田舎者英語と馬鹿にする傾向があります。実際、エッセイやレポートを、もし、アメリカ英語のスペ

〈資料7〉

British and American English

Write down the missing British or American words.

	AMERICAN ENGLISH	BRITISH ENGLISH
1.	bill(money)	[bank note]
2.	[smokestack]	chimney
3.	monkey wrench	[spanner]
4.	[purse]	handbag
5.	flashlight	[torch]
6.	[Scotch tape]	sellotape
7.	yard	[garden]
8.	[undershirt]	vest
9.	tag	[label]
10.	[wire]	telegram
11.	street musician	[busker]
12.	[streetlight]	lamppost
13.	blow－out	[puncture]
14.	[trailer]	caravan
15.	mortician	[undertaker]
16.	[fire department]	fire brigade
17.	sideburns	[sideboards]
18.	[baby carriage]	pram
19.	sucker	[lollipop (candy)]
20.	[vacation]	holiday

められない、きわめてくだけた場面で用いられる語（句）〕の学習も行われました。1年間、学生寮に住んでいましたので、telly（＝television ）や ta（＝Thank you）はフラットの友人が使用していたので、自分の生活経験として意味は理解していましたが、日本でだけ学習していたのではとても知る機会がないものだと思いました。ただこれは、幾つかの考え方があると思うのですが、我々英語を母国語（母語）としない者は、標準的な基本単語だけ知っていれば充分だという考えもあっていいような気がします。但し、英語の教員であれば、たとえスラングであっても、知らないよりは知っている方がベターだと思います。

【8月2日㈬】

1時限目は“Observation of NLC teachers”という我々が2人ずつのペアになり、各クラスに赴き、Newnham Language Centre の先生の授業を見学し（ほとんどがサマーコースの授業）、2時限目にそれについて議論するというものでした。前日の5時限目の授業で、「他の教師の授業を観察することによってどういうことが学べるか？」、また「どういう観点に注意をして授業を見学すべきか？」という一定の議論をした後の実践でした。私が見学した授業は、中堅より少し下のレベルで、学生が14人いました。日本人は3人いて、そのうちの1人は、私が前任校で5年前に担任をした、現在大学2年生の学生でした。夏休みに語学留学したいという相談を受け、この学校を紹介したのですが、まさか私は彼の授業風景を見学できるなんて思ってもいませんでしたし、彼も何で自分の先生（私）が授業を見学に来るのかと驚いていました。担当の先生はサラ（Sarah）という30歳前後の美人女性でした。このような美しい先生に英語を習っている私の教え子が大変羨ましく思えました。この先生も非常にクリアなきれいな発音をする方で、どちらかというとボーイッシュな感じで、てきぱきとしていました。この日のテーマは何かと思って見ていると、サラがホワイトボードに、

My ambition is to own a bar, on a beach, in the Caribbean.

と書き、これはpositive（積極的、肯定的）かそれともnegative（消極的、否定的）かという問いを学生にしていました。一通り聞き終わると、7枚の写真をホワイトボードに張り〔ヒットラー（Hitler）、マザーテレサ（Mother Terresa）、ナポレオン（Napoleon）、マーチン・ルーサー・キング・ジュニア（Martin Luthur King Jr）、ジュリアス・シーザー（Julius Ceaser）、スコッツ（Scots）、ナブラ・チロワ（Navla Tirowa）〕、これは誰であるかと学生に尋ねていました。それから、それでは何をした人かを学生に言わせ、そして、この人たちがしたことは一体 positive かそれとも

自宅に帰ってからの復習として、メアリーに先ず質問してみました。質問をするというか、家に帰ってくると必ず、“今日は学校で何を勉強した？”と親切心で聞いてくれました。暗記しているものは、その場で。記憶が曖昧なものは学校で配られたプリントを見ながら、メアリーと会話をしました。メアリーはイギリス人ですから、当然、全部完璧に答えられるのですが、私はまだまだ自分は英語を知らないと思いました。まして、口語表現だけは常に時事英語を聞いていても力がつくわけではありませんし、ネイティブ・スピーカーと常に話さなくては駄目だと改めて思いました。こういう問題集が我々外国人のために売り出されており、日本で勉強するつもりで数冊購入してきたのですが、残念ながら、今でも本棚に眠っているだけです。この報告書をまとめたのを機会に、ケンブリッジで学んだことをもう一度勉強し直したいと思っております。

〈資料６〉

Colloquial English and Slang

After each conversation below, first explain each colloquial or slang item listed and then rewrite the conversation in a more formal style.

E.g. Alan : Do you fancy going to the pictures tonight?
Jill : Great. Hang on, though. There's something good on telly.
(a) Do you fancy (b) Great (c) Hang on (d) telly

Answer : (a) Would you like to (b) Wonderful (c) Wait
(d) television

Alan : Would you like to go to the cinema this evening?
Jill : Wonderful. But wait. There's good programme on television.

1 Peter : Lend us a few quid. I'm broke.
Tony : Here's a fiver.
Peter : Smashing. Ta.
(a) us (slang) (d) fiver
(b) quid (slang) (e) smashing (slang)
(c) broke (f) ta (slang) 以下省略

引き続き、〈資料６〉を使用し、スラング〔slang：俗語→正規の語法としては認

いつも日本語を介して英語の授業をしているので、精神的に本当に疲れました。しかし、ヨーロッパ人は全然疲れていないというか、英語を話すことを全然苦痛としていないようでした。英会話ができるのは当たり前のようです。普通、ヨーロッパ人が英語を話す場合、とにかく量だけは喋るのですが、文法・発音は全く目茶苦茶ということがよくあります。特にイタリア人はそうです。“イッツ　ヴェリイ　ダンガラス”（下線部のラの音がすごい巻き舌です）と言うので、何のことかと思って、よく考えたら“It's very dangerous.”でした。大事なのは発音ではなく、コミュニケーション能力だとこの時思いました。少なくとも、私のクラスのヨーロッパ人は全員英語の先生でしたので、標準的なきれいな発音で文法もみんな完璧でした。自分が一番、英会話能力は劣っていると感じ、英語学習にはゴールがないということを改めて痛感しました。

〈資料５〉

COLLOQIUAL LANGUAGE

＊Can you explain the following ?....

1. Shall I give you a buzz?
2. Shall we leave it to John?
3. Shall we wet our whistles?
4. Shall we go for a run on Sunday?
5. Shall we square up later?
6. Shall we have a breather?
7. Shall we put it off for a while?
8. Shall we have one for the road?
9. Shall we go halves?
10. Shall we bury the hatchet?

＊Match each of the sentences above with a paraphrase below.

a. Shall we have a drink?
b. Shall we share the bill?
c. Shall I phone you?
d. Shall we let... deal with the problem?
e. Shall we take a break?
f. Shall we take a drive out in the car?
g. Shall we forget our disagreement?
h. Shall we have our last drink?

のようなプリントを使用し、クイズ形式で学んでいくのです。

授業の方法についても興味あるものでした。先ず、２人１組のペアを作ります。そして、１人に〈資料４〉、そしてもう１人に〈資料５〉を配ります。ある一定の時間を与え、生徒に問題を解かせます。パットが常に巡回しているので、答がわからない時にはパットがヒントを与え、答案を埋めていきます。次にペア毎に先生役（資料４を持っている）と生徒役（資料５を持っている）になって、生徒役は〈資料４〉をもらい、先生役のヒントを参考にしながら問題を解いていきます。次は生徒役が先生役に代わり、〈資料５〉をもらい今と同じ作業をします。私にとってこれは大変な作業でした。つまり、今覚えたばかりのものを、今度はすぐに先生役として英語で説明していくのです。

〈資料４〉

Colloquial Language

All the following are normal expressions in spoken English.

Can you explain them?

1. It was a write−off, I'm afraid.
2. It's a bit of a sore point.
3. It wasn't to be sniffed at.
4. It was a humdinger.
5. It was a bit airy−fairy.
6. It's a doddle.
7. It was a bit dodgy.
8. It seemed a bit fishy.

＊ Match each of the sentences above with a paraphrase below.

a. It wasn't very precise or well thoughtout.
b. It was a little risky／illegal／unsafe.
c. It was a dreadful argument.
d. It was a bit strange, odd.
e. It's really easy.
f. The car was completely destroyed. It couldn't be repaired.
g. It was too good a bargain to be ignored.
h. It's a difficult／sensitive subject to talk about.

の時に、日本人が私１人しかいないせいか、先生も含めみんなが私に色々日本のことを聞いてきました。特にスティーブは今まで数多くの日本人を教えているため、日本の教育事情その他日本人はどういう人種であるかまで熟知していました。この日スティーブが、“日本の学校は１クラス40人以上が普通でしょ？”という言葉に、クラスが騒然となりました。他のヨーロッパ人は驚き、“それは本当か？　そんなに多くてどうやって生徒の名前と顔を覚えるのか？　どういう授業をするのか？　あなたが今教えているクラスは生徒が何名か？”等々、矢継ぎ早に質問が続きました。私は正直に“高２のクラスは44人、中Ⅱのクラスは45人。”と答えると、みんなは信じられないというような顔をして、会話が止まってしまいました。“だから、生徒の名前と顔をできるだけ早く覚えることは理想だが、日本のように１クラス45人もいると、なかなか覚えられないのが現状である。”と言うと、ヨーロッパ人全員がうなずいていました。最初の授業からこうであると、これから２週間が思いやられると思いました。しかし、このような厳しい質問を受けてたち、日本の実情を説明し、かつ各国の実情を問うことが本当の研修であると思わざるを得ませんでした。

３・４時限目、そして午後の５・６時限目の担当はパット（Pat）でした。彼女もスティーブと同じ位の年齢で、発音のきれいな女性でした。ｔの発音が強い、典型的な英国女性の話し方であると思いました。スティーブもパットも教え方が大変上手でした。何といっても、我々現役の英語教員を年２回（春には３週間コースがあります）指導するだけのことはあると思いました。彼らと我々の大きな違いは、彼らがネイティヴ・スピーカーであるかどうかの違いだけではないような気がしました。彼らに限らないのですが、イギリスという国が外国人を長い間受け入れてきて、外国語として英語を指導してきたというれっきとした歴史を感じさせられました。

〈資料１〉、〈資料２〉の時間割を見て戴ければわかりますが、授業の中には「教育法」のような理論のような科目も当然用意されていました。しかし、ほとんどの受講者は“理論はどうでもいい。プラクティス（practice: 実践）をしたい。”と言い、要するに短期間で英語力を高めたいと主張していました。２週目からの時間割は受講者みんなで話し合って決めることになりました。これにも驚きました。とにかくヨーロッパ人が言いたいことを主張するということは自分の過去の経験から知ってはいましたが、これだけ15人（私以外）のわがままな先生集団（私は物静かな日本人）を相手にする先生はもっと大変だと思いました。自分が生徒でありながら、つい仕事がら先生の気持ちになるところは、自分は日本人だなぁと思い、一人苦笑いをしていました。

“Colloquial language”（口語体、会話体、くだけた言葉）の授業は大変勉強になり、これこそ現地イギリスでしか学べないものだと思いました。例えば〈資料４〉

だとあの時に思いました。しかし、今回の彼らを見ているとあの時の顔とは全く違うのです。そんな彼らとこれから2週間一緒に勉強できるなんて、当時では全然想像できなかったことでした。

1・2時限目の担当は男性の先生スティーブ（Steve）でした。年齢は40歳前後だと思います。ヨーロッパの人間の年齢は不可解ですし、聞くのも失礼なことです。スティーブは最初の授業ということで、先ずお互いの自己紹介をするゲームをプリント〈資料3〉にして配付しました。

〈資料3〉

Warmer　　Name(s)

Find someone who

A　is a big fan of English

B　is really into using videos

C　teaches children

D　worries about how to motivate 'switched off' students

E　is favourably disposed towards British culture

F　is a bit keyed up about new challenges

G　knows what P.O.S.H. stands for

H　knows her way around Lancaster

I　used to teach another language

J　fancies a trip to the theatre

K　is worried that the course leaders might "try to teach their grandmother how to suck eggs"

先生の合図とともに、一斉に16人が動きだし、お互いにどこかに該当するかを聞きます。そして、もし該当するのがあったら、自分の名前、国籍、スペリングを相手に言います。この作業を5分程で終えた後で、再び先生の合図で全員が自分の席に戻り、先生がホワイトボードに全員の名前を書き、プリントの補足説明を加えます。"先生というのは先ず生徒全員の名前を覚えることが重要だ。"と当たり前のことを言っていましたが、なるほどと思いました。またスティーブが一生懸命リピートしながら、その日のうちに全員の名前を覚えようとしているのには驚きました。実は、私はこの作業が一番苦手です。日本人の生徒の名前ならすぐに覚えられますが、ヨーロッパ人の名前を暗記するのは聞き慣れない名前のせいもあり、何十倍も大変です。自己紹介

り、午後の授業を抜け出してパブに飲みに行ってしまったり、それだけならいいのに、酔っぱらって授業に戻って、呂律がまわらず、何を喋っているのかさっぱりわからなかったことが数回あり、同僚のハンガリー女性は“みんなハンガリー人があだと思われたら、国辱だ。”と言い、泣き崩れたことがありました。彼にしてみると、共産党政権崩壊前はエリートコースにいたのに、“今の自分は一体どうなっているのだろう？こんなはずじゃなかった？”とアルコールで寂しさを紛らわしているのではないかと勝手に推測しました（まさか、本人には聞けません)。語学学校の秘書から言われたことなのですが、今回のクラス構成員の最大の特徴は、ソ連の崩壊で、東ヨーロッパの人が今頃になってやっと自由にイギリス（西ヨーロッパ諸国）に来れるようになったことだそうです。そういえば、私も留学中の1987年３月、ビザを取得しながらソ連以外の東ヨーロッパ諸国を旅行したことがありますが、市民の顔に全く笑顔や希望が見られませんでした。当時の彼らには自由が全くなかったと思いますし、外国に行くなんていうのは夢のまた夢だったと思います。自分は日本で生まれ育って本当に幸福

〈資料２〉

Class OT 2　Week 2　Course SC 4　Room Tyndale House

Time	Teacher	Monday 7/Aug	Tuesday 8 /Aug	Wednesday 9 /Aug	Thursday 10 /Aug	Friday 11 /Aug
9 : 10 10 : 00	Steve Laslett	Runthrough of Test Prepositional Verbs Communication Activity	Comment Adverbs+ Responses	Exploiting Authentic Texts	Conversation Practice: Discourse markers	Ways of Testing students
10 : 05 10 :55		Comment Adverbs	Error correction ↓ Arels Dip（Grammar)	mixed Grammar Exercises	Language Laboratory:	Exploiting songs for Language learning
Mid－morning break						
11 : 20 12 : 10	Pat O'Sullican	Vocabulary + discussion	Coursebook Evaluation +	English for the Teacher－unit 9 Personal Development	Idioms	“Literature” Character Sketches
12 : 15 13 : 05	↓	Contrastive stress	English for the Teacher－unit 4	Listening	Pronunciation Phonology	Vocabulary
Lunch hour						
14 : 05 14 : 55		“Cultural Awareness” Proverbial values	Pronunciation Linking/Weak forms “Elements of Pronunciation”	Colloquial language researched	Phrasal Verbs	
15 : 00 15 : 50		“Advanced Games” Proverb Game	Reading		Language Game (from “Communi-cation games”)	

クラス分けテストがあり、採点をしている間に、クラス担当の先生が、ケンブリッジの町を案内しました。そして、午後、学校の掲示板にクラスが発表されるシステムになっておりました。ところが、我々は2週間という短い期間ということ、それから今回の受講者は16名しかいないということで、いきなり初日の9時10分から授業ということになりました。我々の国籍を見ていると、先ず、私日本人が1人、ラトビア人2人、スペイン人3人、ハンガリー人3人、ポーランド人4人、デンマーク人2人、チェコ人1人でありました。男女比率は、男性2人、女性は残り14人でありました。年齢で見ると、一人ひとり聞いたわけではありませんが、一番下は、ハンガリーの女子学生（まだ日本で言うところの教職課程在学中)、年長者はハンガリーの男性（推定年齢55歳位）でした。この男性はもと外交官でしたが、共産党政権が崩壊し、数ケ国語堪能だという理由から、今はただの語学教師になってしまったらしいのです。今回の研修にも自ら進んで参加したわけではなく、学校（彼の勤務校）がお金を出したので、嫌々参加したと同僚のハンガリー人女性が言っていました。朝からウォッカを飲んだ

〈資料1〉

Class OT 2　　Week 1　　Course SC 4　　Room Tyndale House

Time	Teacher	Monday 31/Jul	Tuesday 1 /Aug	Wednesday 2 /Aug	Thursday 3 /Aug	Friday 4 /Aug
9 : 10 10 : 00	Steve Laslett	Introductions and warmer	Ways of presenting language	Observation of NLC teachers	Ways of developing vocabulary	Language games for revision
10 : 05 10 : 55		Discussion of teaching situation and teaching style		Reporting back on observations	Language Laboratory: Listening Exercise	Review of week 1 Forward planning for week 2
Mid－morning break						
11 : 20 12 : 10	Pat O'Sullican ↓	Difficult teaching areas Discussion	English for the Teacher－unit 13 Trouble: ↓	British v American English Dialect and Accent	English for the Teacher－unit 7 Teacher development	English for the Teacher－unit 9 Personal development
12 : 15 13 : 05		Colloquial language	Dealing with difficult behaviour in the classroom	Authentic listening: 'European drivers'	Phrasal Verbs Phonology	Talking about the future
Lunch hour						
14 : 05 14 : 55		Article browsing Focus on areas of personal interest	Preparation for live observation: "How can you learn from observing ?	Presentations of articles researched	'A lesson that has worked well for me'. Discussion ↓	
15 : 00 15 : 50		Select articles from journals. Prepare summary of ideas	Video viewing: Teaching extract			

が100人分以上も用意され、ワインも数えきれないくらいの量がありました。食べ物はビュッフェ形式で、好きなものを好きなだけとってよいというものでありました。食べ物の量と豪華さに驚きましたけれど、これをウィルのお母さん１人で全部作ったという方が、私にとって驚きでありました。夜の９時、やっと暗くなりだした頃から本格的なディナーが始まり、ウィルのお母さん、家族の紹介があり、パーティーが盛り上がりだしました。楽器の演奏が始まり、陽気に踊りだす人もたくさん出てきました。私は近くに座っている人と英語を話しながらワインを飲み、彼らのダンスを見ていました。このウィルの家は、山の中にぽつんと１軒あるだけで、隣の家までは程遠いので、近所からは一切関係ありませんでした。我々は家が遠いということもあって、夜の12時には辞去しましたが、パーティーは夜の２～３時頃まで続くと聞いて、ビックリしました。イギリスの社会・文化を垣間見たような気がしました。家に帰る車の中でメアリーが“パーティーは楽しかった？　来て良かった？”と聞きました。多分、無理に誘って、洋服代まで払わせてしまったことを気にしているのかと思いました。私は直ぐに“大変楽しかったし、良い経験になった。多分、このような経験は普通の日本人にはできないし、いくら金を払ったって無理だ。本当に来て良かった。私はヘンダソン家の一員として扱われて嬉しい！”と言い、改めて家族に感謝しました。メアリーの“何言ってるの。あなたは９年前から家族の一員じゃないの！”という言葉にジーンときました。イギリスのホームスティはだいたいが主婦のお小遣い稼ぎで成立しています。そこが聞くところによるアメリカのボランティア精神とは違うと思います。私もこの家族と今のような関係になるには時間がかかったような気がします。幸い、私の場合、最初のホームスティが終わってからも、エセックス大学からケンブリッジは車で１時間30分程でしたので、よくメアリーの家には遊びに行っていましたし、日本文化紹介ということで日本食を作ったりもしていました（今でもそうなのですが、とにかく日本食レストランはお金が高いことで有名で、一般のイギリス人には行く余裕がありません。さらにロンドンには何軒もあるのですが、ここケンブリッジには残念ながら１軒もありません）。そして、ここ数年、イギリスに行った時には、必ずケンブリッジを訪れ、ヘンダソン家を訪れています。というのも、ここが私のイギリス留学の原点なのです。こういう民間外交こそが真の国際交流へと繋がるのではないかと思っております。

【７月31日(月)】

いよいよこの日から授業が始まりました。我々「教員コース」の時間割は〈資料１〉〈資料２〉のようになっていました。他の「サマーコース」の学生は、当日の午前中、

嬉しい。”と言いました。イギリス人の感覚からすると、たかがレンタル衣装を数時間借りるために、そんな大金をかけるのはもったいないと感じるのだろうと思いました。日本人は最近の円高のおかげで簡単に海外に行けるようになりましたが（私もその１人）、イギリス人は本当に質素であります。イギリスでポンドを使用する場合、すぐ日本円に換算して考えるのではなく、イギリス人の感覚（彼らの年収や生活レベル）で考えたほうがいいと思います。しかし、そんなことはイギリス人と長く深く付き合わないと理解できないことは言うまでもありません。そういう意味では、私も発展途上人であると思わざるを得ません。

ウィルの実家はノリッジ（Norwich）というケンブリッジの北東にあり、車で１時間30分程かかるところにありました。パーティーは夜の８時から始まるということで、我々は７時に家を出ました。午後７時と言っても、まだまだ太陽は高く空中に輝いていました。時間にうるさい日本人からすると、随分のんびりしているなぁと思いましたが、私たちが到着した頃から、やっと暗くなりだし、我々は早めに到着した方でありました。イギリスの昼は夏の期間、本当に長いのです。サマータイムを導入しているのも、充分納得できます。到着して先ず驚いたのは、家の大きさであります。家だけではなく、とにかく敷地が大きいということです。駐車場というか、そこは芝生の広場になっているのですが、50台以上の車が余裕で駐車できるのです。我々は８時30分に到着したのに、まだまだパーティーは始まらないのです。始まらないと言っても、みんな食前酒を飲んでいるので、これがパーティーの始まりかもしれないと思いました。私も勧められて、取り敢えずビールを貰いました。色々な人が自己紹介をしながら、会話をしていました。私が何より驚いたのは、パーティーに来ている全ての人がイギリス人でありました。それも白人だけであり、要するに外人というか有色人種は私１人しかいないのです。ましてアジア人であるから、よく目立ちました。今年は戦後50年という日本人にとって嬉しくない年でありましたので、日本人としてのアイデンティティーを意識し（私は外国に来る度に、自分が日本人であることを本当に意識します）、日本文化紹介者としての役割に徹しました。私がメアリーに“この中の誰も知らないから大変緊張している。”と言うと“何言っているの。ここに来ている人は、ほとんどお互いに誰も知らないのよ。だから、こういう機会に色々な人と知り合いになる必要があるのよ。”という言葉を聞いて、私はホッとしました。メアリーは知人に私を紹介してくれ、私の緊張をほぐしてくれました。私も“日本人は英語も喋れないと思われては日本人として恥だ。”と思い、なるべく上品にゆっくり話し、かつユーモアを交えながら、パーティーでの会話を楽しもうと努めました。

パーティーは庭に大きな白いテントを幾つも張って行われました。テーブルと椅子

して教えています。趣味はゴルフで、家の近所のゴルフ場の会員であります。年齢は60歳前後です。子供は娘１人タムシン（Tamsin）だけで、彼女は今バース（Bath）の大学へ行っているため、ケンブリッジには住んでいません。長期休みにしか帰って来ませんが、今回は夏休みのため家にいました。イギリスの学生は、この機会を利用してアルバイトをし、自分の学費・生活費を稼ぐのが常です。彼女も例外ではなく、ケンブリッジ市内のレストランでウェイトレスとして毎日夜遅くまで働いていました。日本の学生もアルバイトはよくしますが、ほとんどが遊ぶ金欲しさではないかと思うと、改めてイギリスの学生に頭が下がる思いでありました。

７月29日㈯昼過ぎに到着したところ、到着するなりメアリーが、“今日の夜、ウィル（Wil：娘タムシンのボーイフレンド。現在、ヘンダソン家にホームスティして、グラハムの学校に通っている英国人）の母の誕生日パーティーがあり、家族みんな招待されているので、直樹も行こう！”と言われました。私は“ウィルのことは知っているが、ウィルの母のことは知らないし、今回はスーツを持ってこなかったから、家で留守番をしている。”と言うと（本音を言うと、もし日本的な感覚だったら、見ず知らずの外人をパーティーには誘わないし、もし、そのパーティーに行っても、周りの人から変な顔をされるよなぁ？と思っていました。でもイギリスのみならずヨーロッパではそうではないことは、かつての留学経験からわかっていましたが、最近、旅行でしかイギリスに行っていないので、そんなことは忘れていました）、メアリーは“全然問題ないわ。服だったら、ケンブリッジ中心部のモス・ブロス（Moss Bros）というレンタル専門の洋服屋があるわ。もし、どうしても行くのが嫌だったら行かなくてもいいけど、料理も豪華で、全部ウィルのお母さんの手作りよ。大体、私の家の大きさぐらいの台所を持っているんだから。絶対に行く価値があるわ！”と言い、私はせっかくの御好意なので、すぐ衣装を借りにいくことにしました。ワイシャツ・蝶ネクタイ、イブニングドレスを借りて、学生ということでディスカウントしてくれ£28でありました（“Are you a student in Cambridge？”と聞かれ、確かにこの夏休みだけは学生なので、“Yes！”と嬉しそうに答えてしまいました）。靴のレンタルはないので、マークス・アンド・スペンサー（Marks & Spencer）というイギリスのチェーン店のスーパーマーケットで靴と靴下を購入しました。私は初めて蝶ネクタイをし、非常に緊張していました。まるで、オーケストラの指揮者になったように感じました。家に帰ってくると、メアリーがレンタル料金がいくらかと聞きました。私は学生料金で割引してもらったこと、靴は購入したことを告げますと、彼女はそんな大金の出費を申し訳ないと言いました。私は“とんでもない。蝶ネクタイをするのは初めてだし、家族の一員としてパーティーに連れていってくれることの方がよっぽど

Meyer）にすぐファックスを送り、宿の予約をお願いしたところ、返答のファックスが翌日に来て、“バス・トイレ共同とバス・トイレ付きのどちらの部屋がいいか？”とありました。料金にして1泊£3（約500円）しか違わないので、今回はバス・トイレ付きのを頼みますという内容を、すぐ次のファックスでお願いしました。ケンブリッジの言語学校もそうでありますが、ディリーのような有能な秘書がイギリスにいるのはまことに頭が下がる思いです。

Ⅱ．英国での日程とレンタカー

私がロンドン・ヒースロー空港（London Heathrow Airport）に到着したのは7月24日。24日～28日まではエセックス大学の学生寮に宿泊。29日の午後、ケンブリッジのホームスティ先へ移動しました。29日～8月11日までケンブリッジにホームスティし、12日から21日までは再びエセックス大学へ戻りました。そして、22日昼、ロンドン・ヒースロー空港から旅立ち、23日朝、成田空港へ到着しました。今回の英国滞在の1ケ月間、「ハーツ（Hertz)」という会社からレンタカーを借りました。イギリスは車社会で、どうしても車がないと生活できないというわけではありませんでしたが、以前1年間留学した時に車を持っていたこと、それからここ数年イギリスに行く時には、必ず空港からハーツのレンタカーを借りることが不可欠と信じ、そう致しました。後で述べますが、今回はレンタカーを利用して授業以外の休みを利用し、英国国内を車で旅行しました。日照時間が長いイギリスの夏であります。ブリテン島最西端（Land's End）と最北端（John O'Groats）とふつうの旅行者は行けない極美の場所まで辿り着きましたが、誠に得難い体験でありました。

Ⅲ．ニューナム・ランゲージ・センター（Newnham Language Centre）

7月29日、ケンブリッジに移動してホームスティのヘンダソン家の人々と再会しました。5ケ月前の3月に会ったばかりでしたし、ここ数年、年に2回は会っていましたが、お互いに感動は深く、これから2週間一緒に生活すると思うと、いつもとは違う緊張感がありました。ここで家族を簡単に紹介しておきます。先ず、私の世話をしてくれるお母さんのようなメアリー（Mary)。ケンブリッジで生まれ育った、きれいな上品な英語を話す素晴らしい女性で、料理が大変上手です。イギリス料理はまずいという評判ですし、私自身も決して否定はしませんが、彼女は例外であります。特に、デザートを作るのがうまいのです。年齢は50代前半だと記憶しています。御主人のグラハム（Graham）はスコットランド人。心理学・生物を教える日本で言うところの高等学校の先生でありますが、2年前定年を迎え、今はその学校で非常勤講師と

つまり、お互いに“あいつの英語は発音が悪い。”とか“あの人は英語の先生のくせに文法的に間違った英語を話した。”等々批判してしまい、なかなか活発な議論ができないのが痛ましい現実であります。そういうことから私はこのようなツアーを避けたいと念じました。時間が充分にないために、学校選びは大変でありました。先ずは、国を選ばないといけません。ここ数年、私はイギリスには頻繁に行ってはいますが、アメリカやカナダには行ったことがありません。英語教師として、やはりアメリカ文化を見ていないと問題ではないかと思いました。すぐにアメリカやカナダの大学主催の英語教員のための語学コースを調べましたが、日程がほとんど合いませんでした。期日も迫っているので、慣れているイギリスに絞ることにしました。イギリスにもブリティッシュ・カウンシル〔British Council（英国文化協会）：1934年に創立された海外への英国文化普及のための機関〕主催で英国の大学で開催される英語科教育法の語学コースがいくつかありました。しかし、これも日程が合いませんでした。それで、以前1ケ月通ったケンブリッジの語学学校に、英語の先生を対象にしたコース“Refresher Courses for English Teachers”というのがあるのを思い出しました。その学校にはよく教え子を紹介しますので、頻繁に連絡をとっていたため、すぐにファックスを送ったところ、返答がすぐに参りました。それには“日本人はかつて参加したことがなく、今年も参加する予定がないので、是非、参加してほしい。”とありました。2週間という短い期間ではありましたが、英語を学生としてではなく、英語教員（a teacher of English）として勉強するには絶好の機会であるうえに、久しぶりにホームスティをするというのも良い機会でありました。以前ホームスティした家族と今でも交流が続いておりましたので、私は学校に再度送るファックスの中に、“以前ホームスティした家庭Mrs. Mary Hendersonの所に滞在したい。”と書きました。返答は“OK”で、私は9年ぶりにホームスティをして英語を勉強することになりました。残りの前後2週間はエセックス大学の寮に入り、言語学の勉強と語学学校の先生コースの復習をすることにしました。他のイギリスの大学の事情はよく知りませんが、エセックス大学は、6月いっぱいで学部の学生は寮を退寮し、帰郷するようになっております。夏休みは様々なセミナーや合宿が学内で行われ、学生寮を研修生の宿として開放するのであります。一種のホテルと考えて戴ければ良いでしょう。イギリスの大学は財政が苦しいので、宿泊料金はあまり安いとは言えませんが、荷物を置く場所も必要でしたし、図書館に通い、久しぶりにじっくり言語学の勉強もしたいと思いましたので、私は入寮することにしました。また、私の恩師カーデュー先生も文部省派遣の先生を教えている時期ですので、言語学の様々な質問ができると思いました。言語学部（Department of Language and Linguistics）の秘書ディリー（Miss Dilly

アーを組んでいる例がよくあります。例えば、アメリカやイギリスで3週間程度の語学研修をし、最後の1週間その国の代表的な場所や、イギリスだったらヨーロッパの幾つかの国を旅行するというものであります。値段も手頃ですし（こういった場合、たいてい学校が料金を負担してくれます)、何といっても留学の煩雑な手続きをする必要が一切ない上、航空券の手配から旅行する時でも添乗員やガイド（日本語が堪能な地元ガイドも含む）が同行してくれ、旅行業者主導型のパックになっています。その上、日本人の団体として集団で行動しますので、英語を話す必要がほとんどなく、まったく気が楽であります。まして、海外に行ったことのない教員なら尚気楽であろうと思われます。私の場合、出発まで2ケ月足らずでしたので、この種のツアーに参加するのが一番安易な方法だったと思います。しかし、私はそのような方法を選びませんでした。なぜかと申しますと、せっかく海外に行くのに、常に日本人と一緒にいるというのは、語学力を高めるという点では極めて悪い環境であると思ったからであります。日本語が話せるという環境に身を置くなら、日本人団体旅行のパックツアーと何ら変わりはないと思われます。さらにこういう場合、たとえ語学研修を受けたとしても、先生はネイティブ・スピーカー（a native speaker of English)、生徒はすべて日本人だけという異質な環境であることが非常な問題点であります。ここ数年、日本人、特に大学生が夏休みや春休みを利用して英語圏の語学学校へ短期留学と称して3～8週間多数出掛けるため、1クラスに日本人が1人ということはほとんどありません。但し、イギリスの場合だと、私が知る限り、1クラス12～3名（学校によって人数は違いますが、普通この位です）の中に、日本人は最大限3名程度に限定というところが多いのです。この程度ならまだ良いと思いますが、すべてが日本人というと大変な問題となります。私がかつて留学していたエセックス大学には、毎年8月になると全国から選び抜かれた各都道府県代表の文部省派遣の英語教員約30名程が研修に参ります。私自身、個人的に夏休みを利用してイギリスに行くことが多く、恩師や知人に会うために必ずエセックス大学へ行くために、この Monbusho－Teachers〔私の指導教官であったアラン・カーデュー先生（Dr.Alan Cardew）が彼らをこう呼んでいます〕をいつも見かけます。彼らはほとんど常に一緒に行動し、授業に行くのも、学食に行くのも、コインランドリーに行くのも、町に買い物に行くのも一緒であります。つまり、授業時間以外すべて日本語で生活するのです。授業は当然、日本人のみが学生なのです。ここでどういう問題が起こるかというと、イギリスはじめヨーロッパの大学や語学学校では、授業はディスカッション（議論）を中心に行われており、日本のように先生から生徒への一方通行の授業ではありません。日本人はこのディスカッションに慣れていないうえ、周囲の日本人を気にして英語が話せないのです。

た。前任校には名前だけの制度はありましたが、実際にそれを利用する人がいないばかりか、夏休みの業務内容（英語科の教員でしたら、中学３年生対象のニュージーランド海外研修引率24日間か中学１・２年生対象の英語合宿６泊７日の引率があったほか、運動部を担当していましたので、校内でのクラブ指導、クラブ合宿引率がありました）を考えると、とても口に出せる状況ではありませんでした。

さて、これは全くの私見でありますが、英語の教員として勉強するなら、国内ではなく、海外で研修するのが最善の方法だと思います。私は獨協大学３年生の時、交換留学生の試験に合格し、大学４年次の後期から、つまり1986年８月から１年間、イギリスで勉強する機会を得ました。獨協大学とエセックス大学〔University of Essex：ロンドンから北東に約100km、イギリス東部コルチェスター（Colchester）市にある国立大学〕は1984年に学術交流協定を結んでおり、教員・学生の交換を定期的に行っていて、私はエセックス大学第３期交換留学生として、10月から１年間、言語学を勉強する機会を得ました。エセックス大学内の学生寮でイギリス人はじめ他の外国人と共同生活し、非常に貴重な時間を過ごすことができました。私は海外に留学するのが初めてで、当時、語学は堪能ではなかったため、イギリス文化とエセックス大学での学生生活に慣れるための準備期間として、ゼミナール担当の教授（児玉仁士教授）の紹介で、ケンブリッジ（Cambridge）の語学学校ニューナム・ランゲージ・センター（Newnham Language Centre）に４週間通い、イギリス人家庭にホームスティを致しました。その時に強く感じたことは、語学を勉強するうえで重要なことは、その文化の中でその土地の人と一緒に生活するということでありました。現在、日本には多数の英会話学校が諸所に溢れており、『リスニングの力を高める』『外国人アレルギーを無くす』等の目的で英米へ行くなら、それはそれなりの目的を達成することはできると思いますが、語学（英語）を勉強するには英語圏で生活するのがこの上ない方策だと信じて疑いません。

本校に海外研修制度があることを聞いても、私は獨協の専任教員になってまだ２年足らずなので、自分とは全く縁がないことだと思っておりました。ところが年度初めの英語科科会において、私より優先的に選ばれる資格の先生が辞退なさったので、急遽私のところに白羽の矢が回ってきて、英語科の先生方の御好意により自分が選出されました。大変だったのはそれからであります。手元の英語科科会議事録を見てみますと、４月18日、候補として私が英語科より選出され、学校首脳部で検討され、正式に学校から許可が出たのが５月23日でありました。たとえ短期の留学、海外研修であるにしろ、普通は少なくとも半年前から準備をするのが常識であります。それからが本当に大変でありました。最近は、各旅行会社が中高英語科教員を対象に、パックツ

英国に魅せられて【海外研修報告書】

河　野　直　樹

はじめに

1995年度獨協中学・高等学校海外研修員として、７月24日～８月23日まで31日間、英国に滞在し、研修の機会を与えて戴きました。夏休みの１ヶ月間、学校業務を外して戴き、金銭的な援助をして戴いたおかげで、充実した時を過ごすことができ無上の光栄でした。今回の研修に派遣させて戴けたのは、英語科をはじめ、獨協中学・高等高校の教職員の方々のおかげであると心より感謝しながら、この報告書をまとめております。

Ⅰ．研修先の決定とその手続き

今、英語教育が大きく変わろうとしています。文部省の高等学校新カリキュラムも今年度で２年目を迎えました。今までの『読み・書き重視』の英語だけではなく、『聞く・話す』も加えた４技能のバランスがとれた英語教育が指標とされています。高校では『オーラル・コミュニケーション』という科目が新たに導入され、実際、昨年度、私もオーラル・コミュニケーションＢ（配当学年は高校１年生）を担当しました。これからの英語の教員として必要なのは、大学受験のための英語だけではなく、実用英語、実践英語の指導ができることが望まれています。外国人と対等に英語が話せることは当たり前の時代になってまいりました。

“光陰矢の如し”とはよく言ったもので、私自身、大学を卒業して既に７年が過ぎ、教員生活も８年目を迎えました。大学を卒業してすぐ、運良く東京６大学付属の私立中学校に専任教諭として奉職することができ、６年間勤務致しました。教員になるときに、将来は中学のみならず高校も担当できると思っていましたが、学校の特殊な事情で高校を担当することは不可能であるばかりか、将来高校生に英語を教える展望も皆無でありました。中学生に英語を教えることは嫌ではないどころか、むしろ好きではありましたが、中学だけ担当していると自分の英語力が下がっているのを痛感致しましたし、できれば高校生を教えてみたい、今ならまだ再び勉強する意志があると思っていたところ、母校獨協大学の母体である、この獨協中学・高等学校で教える機会を与えられました。獨協中高に奉職後、本校の外国語の教員には夏休みを利用した１ヶ月の海外研修制度があると聞きまして、これは大変素晴らしいことであると思いまし

seul?, dans *Mélanges Henri Grégoire* 2, Bruxelles, 1950, pp.283〜91.

(88) Michael Whitby, *Maurice*, pp.7〜8. 但し、彼はゲルマヌスがアニキウス家の血も引くと考えているが、それが誤りであることは既に述べた通りである。

(89) 仏訳からの重訳。*La Chronique de Jean de Nikiou*, ed. and Fr.tr.by M.H. Zotenberg, dans *Notices et extraits des manuscrits de la Bibliothéque nationale* 24, I, Paris, 1883, 94.26, p.522.

(90) Michael Whitby, *Maurice*, p.7. cf.Jones, op.cit., p.1024.

(91) カエサル位については以下を参照。J.B.Bury, *The Imperial Administrative System in the Ninth Century*, London, 1911, p.36 ; Jones, op.cit., pp.322〜3.

(92) *Ius Graecoromanum* I, Coll. I, Nov. XIII, J.and P.Zepos, Athens, 1931. 筆者未見のため、以下を利用。*PLRE* III, Theodorus 38, p.1257.

(93) Theophylactus, LiberVIII.4.10, p.291.

(94) *Chronicon Paschale*, p.695 ; Theophanes, op.cit., A.M.6094, p.284.

(95) *PLRE* III, Theodosius 13, pp.1293〜4.

(96) *La Chronique de Jean de Nikiou*, p.522 ; *PLRE* III, Germanus 11, pp.531〜2.

(97) *Chronicon Paschale*, p.693.後でテオドシオスの義父と記す。ibid., p.695.

(98) Averil Cameron, The Empress Sophia, *Byzantion* 45 (1975), pp.5〜21.

(99) 詳しくは、拙稿「ユスティノス二世・ティベリオス時代におけるローマ帝国の対外政策」、『西洋史学』第173号、1994年、50〜63頁を参照されたい。

(100) 皇帝の遺言状と分割統治の構想については、同「マウリキオス帝の所謂アンキアロス遠征について」、『上智史学』第35号、1990年、68頁を参照されたい。

(101) Theophylactus, LiberVIII.6.2〜9.9. 紙幅の都合により個々には記さない。

(102) Michael Whitby, *Maurice*, pp.11, 177.

(103) ibid., pp.25〜6 ; Browning, op.cit., pp.35〜7.

(104) E.Stein, *Studien zur Geschichte des byzantinischen Reiches vornehmlich unter den Kaisern Justinus II und Tiberius Constantinus*, Stuttgart, 1919, S. 99.

(105) 皇帝家のハギオグラフィが、テオファネスの『年代記』の情報源の一つになっているとされる。Michael Whitby, *Byzantion* 53 (above n.75), pp.312〜45.

(106) Theophylactus, LiberVIII.9.14〜10.4. やはり個々には記さない。

(107) Theophanes, A.M.6098〜9, pp.293〜5.

出版社、1981年、100～03頁、で知ることが出来る。

(67) Michael Whitby, *Maurice*, p.30 ; *PLRE* Ⅲ, Heraclius 3, pp.584～6.

(68) Theophylactus Simocatta［以下、Theophylactus］, *Historiae*, ed.by C.de Boor, 1887 (re-ed.by P.Wirth, Stuttgart, 1972), Liber Ⅰ.1.1, p.38.

(69) Michael Whitby, *Maurice*, pp.39～46.

(70) Theophanes, *Chronographia*, ed.by C.De Boor, Leipzig, 1883～5, A.M.6074, pp.251～2.

(71) Malalas, *Chronographia*, *CSHB*, ed.by L.Dindorf, 1831.

(72) Sophocles, op.cit., p.1014.

(73) Leo Grammaticus, *Chronographia*, *CSHB*, ed.by E.Bekker, 1842, p.138.

(74) *PLRE* Ⅲ, Gennadius 1, pp.509～11 ; Theodorus 38, p.1257.

(75) 史料の相互依存性については、Michael Whitby, Theophanes' Chronicle Source for the Reigns of Justin Ⅱ, Tiberius and Maurice (A.D.565～602), *Byzantion* 53 (1983), pp.312～45 ; idem, The Great Chronographer and Theophanes, *Byzatine and Modern Greek Studies* 8 (1982／83), pp.1～20.

(76) Theophylactus, Liber Ⅶ.6.6, p.255.

(77) *PLRE* Ⅲ, Germanus 5, p.529.

(78) E.Stein, Iustinianus 2, *RE*10Ⅱ, 1919, col.1310～13.

(79) トゥールのグレゴリウス、兼岩正夫・臺幸夫訳註『歴史十巻（フランク史）』東海大学出版会、1975年、Ⅰ、歴史五巻30、436～37ページ。但し、一部を改訳した。

(80) パウルス・ディアコヌスの記述はここから取ったもの。Paulus Diaconus, *Historia Langobardorum*, ed.by L.Bethmann and G.Waitz, *MGH. Scriptores rerum Langobardorum et Italicarum, saec. Ⅵ～Ⅸ*, Hannover, 1878 (1964), Liber Ⅲ.12, p.99.

(81) *Iohannis Ephesini Historiae Ecclesiasticae pars tertia*, ed.and tr. by E.W. Brooks, *Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium* 106, Scriptores Syri 55, Louvain, 1936, Liber Ⅲ.Caput 6～7, pp.97～8.

(82) ペルシア戦線への登場は 572年２月。*PLRE* Ⅲ, Iustinianus 3, pp.744～5.

(83) ibid., pp.745～7.

(84) ibid., Mauricius 4, p.857.

(85) Iohannus, op.cit., Liber Ⅵ.Caput 27, p.250.

(86) 詳しくは以下を参照。Michael Whitby, *Maurice*, pp.110～2, pp.245～8.

(87) P.Goubert, Le Mystère de Germanus et de Charito : Deux Césars ou un

History of the Wars: Book Ⅷ.29～35, ＬＣＬＶ, pp.352～418.

(45) 正確な生没年は不明である。*PLRE*Ⅲ, Procopius 2, pp.1060～6.

(46) Cameron, op.cit., p.190.なお、n.20に先行研究が挙げられている。

(47) Iordanes, Getica 313, p.138.

(48) *PLRE*Ⅲ, pp.713～4 ; *Der Kleine Pauly* 2 , col.1439.

(49) *Agathiae Myrinaei Historiarum Libri Quinque*, R. Keydell, Berlin, 1967.

(50) *PLRE*Ⅲ, pp.23～5.

(51) Agathias, *The Histories*, Translated with an Introduction and short explanatory Notes by Joseph D.Frendo, Berlin, 1975, Introduction Ⅸ～ⅩⅢ.

(52) *The History of Menander the Guardsman*, Introductory Essay, Text, Translation and Historiographical Notes by R.C. Blockley, Liverpool, 1985.

(53) ibid., pp.1～30 に詳しい。

(54) *The Ecclesiastical History of Evagrius*, edited with introduction critical notes, and indices by J.Bidez and L.Parmentier, London, 1898 (rept. New York, 1979), LiberⅤ.22, p.217.

(55) ibid., LiberⅥ.1, pp.222～3.

(56) ibid., LiberⅣ.9～41, pp.159～92.

(57) ゲルマヌスへの賛辞が掲載されている。Procopius, *History of the Wars*: Book Ⅶ.40.9, ＬＣＬＶ, p.40.

(58) Evagrius, op.cit., LiberⅤ.1, p.196.

(59) Procopius, op.cit., 39.17, p.32 ; 40.10, p.42 ; 40.27, p.46, etc.

(60) エウァグリオスに関しては、詳しくは例えば次の文献を参照されたい。Michael Whitby, *The Emperor Maurice and his Historian : Theophylact Simocatta on Persian and Balkan Warfare* [以下、*Maurice*], Oxford, 1988, pp.109～10.

(61) 彼自身が記している。Evagrius, op.cit., LiberⅥ.24, pp.240～1.

(62) [ユスティヌス] ibid., LiberⅤ.1～2, p.196 ; [ユスティニアヌス] Liber Ⅴ.14, p.210 : 19, p.214.

(63) *Chronicon Paschale, Corpus Scriptorum Historiae Byzatinae* [ＣＳＨＢ], ed.by L.Dindorf, Bonn, 1832, p.690.

(64)『復活祭年代記』に関して詳しくはその翻訳である次のものを参照。*Chronicon Paschale 284～628 AD*, trans.by Michael and Mary Whitby, Liverpool, 1989.

(65) ibid., Introduction, ⅨⅣ.

(66) その経緯について邦語では、杉村貞臣『ヘラクレイオス王朝時代の研究』山川

(25) *PLRE* Ⅲ, p.528.

(26) ibid., p.529.

(27) 「カエサル」については、例えば以下を参照。Jones, op.cit., pp.322〜3.

(28) *PLRE* Ⅲ, pp.855〜60.

(29) ibid., pp.531〜2.

(30) *PLRE* Ⅲ, p.528.「ポストゥムス」とは「父の死後に生まれた」という意味。

(31) Iordanes, Getica 314, p.138.

(32) または「アマリー(Amali)」。詳しくは以下を参照されたい。Burns, op.cit., Table 3, pp.96〜7 ; Wolfram, op.cit., Appendix 3, pp.374〜5.

(33) または「アニキイー(Anicii)」。Jones, op.cit., p.546, p.557, p.561.

(34) Cassiodorus, Variae Epistolae X 11.1, p.304, *MGH.AA* X Ⅱ, ed.Th. Mommsen, Berlin, 1894 ; Wolfram, op.cit., n.222, p.502. あるいは、アニキウス家と親戚関係にあるという意味か。将軍ゲルマヌス自身が、アニキウス家と血縁関係を持つという説は今日では受け入れ難い。Bury, op.cit., Ⅱ, p.255.n.1 ; *PLRE* Ⅱ, pp.505〜7.

(35) Brian Croke, Cassiodorus and the *Getica* of Jordanes, *Classical Philology*, 82 (1992), pp.117〜34.

(36) テオドリックの死後、彼の孫であるアタラリック（在位 526〜34）に引き継がれ、更にテオダハド、ウィティギスと継承された。詳しくは以下を参照されたい。Bury, op.cit., Ⅱ.pp.159〜80 ; Wolfram, ibid., pp.332〜49 ; Burns, op.cit., pp. 93〜5.

(37) ウィティギスについて詳しくは、*PLRE* Ⅲ, Vitigis, pp.1382〜6を参照のこと。

(38) Wolfram, op.cit., p.358 ; Burns, op.cit., pp.84〜92.

(39) 新国王テオダハドが、前王アタラリックの母でもあった摂政のアマラスインサを535年に殺害したことが契機となった。Bury, op.cit., Ⅱ, pp.168〜75.

(40) *PLRE* Ⅲ, Iordanes 1 (Jordanes), pp.713〜4.

(41) Iordanes, Getica 313〜4, p.138.

(42) プロコピオスは、546年にローマにいた可能性があるものの、それを除けば540年代後半から晩年まで帝都で諸作品を著した。以下に詳しい。Averil Cameron, *Procopius and the Sixth Century*, London, 1985, pp.8〜12, pp.188〜9 など。

(43) このような両者の視点の相違を指摘している研究に例えば以下のものがある。Cameron, ibid., pp.196〜7. ただ、両者の接触を跡付けることは難しいという。

(44)「(535年の戦争開始から) 18年目(552年) にゴート戦争は終結した」。Procopius,

(11) ローマ史研究のみならず、ゴート史研究でもこのミスは繰り返されている。例えば、Herwig Wolfram (Eng.trans. by Thomas J. Dunlap), *History of the Goths*, Berkeley and Los Angeles, 1988 (原著: München, 1979), p.15 ; Thomas Burns, *A History of the Ostrogoths*, Bloomington and Indianapolis, 1991, p. 93.

(12) *ODB* I , p.846.

(13) *RE* 7 I , 1910, col.1258 ; *Der Kleine Pauly* 2 , col.770.

(14) ユスティヌス1世の経歴と甥たちの召致について簡便なものとして、Robert Browning, *Justinian & Theodora*, London, 1971 (re-ed.1984), pp.19〜24.

(15) Procopius, *History of the Wars* : Book I (The Persian War) 29.53, Edition of the Loeb Classical Library [LCL, Eng. trans. by H.B. Dewing] I , 1914, p.236 ; Book II .6.9, ibid., p.308 ; BookIV (The Vandalic War) 16.1., LCL II , 1916, p.354 ; Book VII (The Gothic War) 12.11, LCL IV , 1924, p.250, etc.

(16) E.A. Sophocles, *Greek Lexicon of the Roman and Byzantine Periods*, 1914, Leipzig (Nachdruck, 1983, Hildesheim), p.167.

(17) 例えば、Procopius, *The Anecdota*, VI.19, LCL VI, 1935,p.74.

(18) PLRE II , p.505. その典拠となっている研究は、Kallenberg, Berliner *Philologische Wochenschrift*, 35 (1915), cols.991〜2である (筆者未見)。

(19) Procopius, *History of the Wars* : Book VII.40.5, LCL V , 1928, p.38.

(20) *PLRE* III , p.528.

(21) 549年に未遂に終わったユスティニアヌス暗殺事件の際に、首謀者の一人であるアルタバネースが彼をそのように見なして、他の血縁者を糾合するために誘った。Procopius, *History of the Wars* : Book VII.32.10, LCL IV , p.422. 彼がユスティニアヌスの後継者になる予定であったと見る者もいる。Browning, op.cit., p.131.

(22) ibid., Book VII.39.14〜5, p.32.

(23) イタリアの「再征服戦争」に関しては、古いものだが依然として次の文献が最も詳しい。J.B. Bury, *History of the Later Roman Empire : from the death of Theodosius I to the death of Justinian*, London, 1923, pp.151〜291.

(24) Iordanes, De Summa Temporum vel Origine Actibusque Gentis Romanorum 383, p.51 ; De Origine Actibusque Getarum [以下、Geticaと略記する] 81, p. 77 : 251, p.123 : 314, p.138, *Monumenta Germaniae Historica, Scriptores, Auctores Antiquissimi* [以下、*MGH.AA* と略記する] V , ed.Th.Mommsen, Berlin, 1882(1961).

リキオス帝が失脚せず、テオドシオスとゲルマヌスの娘との間に息子が誕生し皇帝になれば、マウリキオスの家系にユスティニアヌス、将軍ゲルマヌス、ティベリウス、そしてテオドリック王の血統が全て取り込まれる筈であった。少なくともこの一連の手続きからは、血統が帝位の獲得に大きな比重を占めていたことが窺える。

「三人の」ゲルマヌス全てに言及する史料は現存しない。また、本来最も依拠すべき同時代史料は、マウリキオス・ヘラクレイオス両皇帝への特別の配慮から、あるいはゲルマヌスの処刑により、彼に関する情報を意図的に抑えた。これらのことが、ゲルマヌスが何者であったかについての我々の認識を不十分なものにしたのであった。その隙間を埋めるためには、史料の寡黙や沈黙を解釈するという作業を必要とした。それゆえ、その解釈は唯一のものとは言えないが蓋然性はかなり高いと考える。

ところで、ゲルマヌスの息子の存在は史料上確認できないが、彼の娘とテオドシオスの結婚は、グレゴリウスの伝える「約束」が、むしろマウリキオスとゲルマヌスの間で取り交わされたもののような印象を受ける。つまり、カエサルのゲルマヌスがマウリキオスに帝位を譲る条件に、この婚姻が最初から入っていたことを感じさせもするのである。しかし、これはもちろん全く推測の域を出ていない余談である。

註

(1) Pauly-Wissowa, *Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*, Stuttgart, 1893〜1974. 以下、*RE*と記す。

(2) *Der Kleine Pauly: Lexikon der Antike*, Hg. Walther Sontheimer und Konrat Ziegler, 1964〜75 (dtv-Ausgabe, in fünf Bänden, München, 1979).

(3) *The Prosopograpy of the Later Roman Empire*, Cambridge, Ⅰ, ed. A.H. M. Jones, J.R. Martindale, J. Morris, 1971 ; Ⅱ, ed. J.R. Martindale, 1980 ; Ⅲ, ed.J.R. Martindale, 1992. 以下、*PLRE*と記す。

(4) A.H.M. Jones, *The Later Roman Empire 284〜602: A Social, Economic, and* Administrative Survey, Oxford, 1964.

(5) 経緯は、*PLRE* Ⅰ, Preface, Ⅴ〜Ⅶ及び *PLRE* Ⅱ, Preface, Ⅴ〜Ⅸ参照。

(6) やはり詳しくは、*PLRE* Ⅲ, Preface, Ⅴ〜Ⅸを参照のこと。

(7) *The Oxford Dictionary of Byzantium* 1 〜 3, ed.by Alexander Kazhdan, Alice-Mary Talbot and Nancy Patterson Sevcenko, Oxford, 1991.

(8) *PLRE* Ⅲ, Theodorus, pp.1244〜89 ; Ioannes, pp.624〜711.

(9) ibid., Germanus 3, p.528 ; 5, p.529 ; 11, pp.531〜2.

(10) *PLRE* Ⅱ, Germanus 4, pp.505〜7.

る。名誉称号ではあってもカエサル就任という公式行事に関しては、同時代史料の全てが沈黙することは出来なかったが、その後のゲルマヌスについて沈黙することは容易であった、ということである。すなわち、カエサルに任命された人物が自ら軍隊を率いて前線に赴くことは通常なく、彼の名前を挙げなければマウリキオスの戦争続きの治世を描けないということはない。ゲルマヌスが、テオドシオスの義父となって初めて皇帝家のハギオグラフィに登場し、それが利用可能な史料として後代に残ったため、例えばテオファネスは彼をパトリキウスとしてのみ認識したのである(105)。

パトリキウスのゲルマヌスの最期を見よう(106)。反乱軍の指導者フォーカスは、テオフュラクトスによれば、一旦はゲルマヌスを皇帝に推す振りをして、帝都の住民がそれを拒むのを確認した後に自ら皇帝となり(602年11月23日)、帝都に難無く入城したという。脱出したマウリキオスは捕えられ、帝都の対岸のカルケドンまで連行され、そこで長男テオドシオスを始めとする5人の息子たちと共に処刑された。そして、彼の政権を支えた多くの有力者たちも文官武官を問わず処刑された。

しかし、言わばこのフォーカスの軍政下にあっても、ゲルマヌスは処刑されることなく帝都に止まった(107)。フォーカスの帝位奪取に何らかの支援を行ったのであろうか。その後、マウリキオスの未亡人コンスタンティナと謀り、自ら帝位を得んとして603年にフォーカスの打倒を図ったが、やはり処刑されることなく、ただ地位を剥奪され聖職者とされた。更に、605年に再度反乱を企てたとされ、遂にコンスタンティナやその3人の娘たち、そしてゲルマヌスとその娘(テオドシオスの妻)は、他の有力者たちと共に全員処刑された。彼の記録が抹消されたのはむしろこの時かもしれない。この経過は、ゲルマヌスが、マウリキオス一族の人間としてではなく、武勇を馳せたゲルマヌス家の人間として、兵士たちに尊重されたことを物語っていないだろうか。彼が、軍事力を有していないにも拘らず、二度にわたり反乱を企てたのは、帝位奪取の希望を抱かせるだけの高貴な血統を伴っていたからに他ならない。

4. 結　語

東ゴート王テオドリックの孫娘マセスエンサとユスティニアヌス帝の従兄弟である将軍ゲルマヌスの間に生まれたゲルマヌス・ポストゥムスは、ティベリウス2世から娘を与えられた上で、582年にマウリキオスと共にカエサルに就任した。彼のカエサル位は、皇帝位の正統性を補強する役割を担った名誉称号であったと考えられる。そして、601年にはマウリキオス帝の長男テオドシオスの義父となり、翌年の反乱時には、マウリキオスに代わり皇帝になるよう反乱軍により要請された。それらは、やはりその血統の高さゆえに、彼が帝位継承の有資格者と考えられた結果であった。マウ

も、この気前の良さがマウリキオス時代の緊縮財政を強いたのであるが。

更に、帝都では飢饉により食料不足が深刻となっており、テオドシオスの結婚パレードの際に市民が暴動を起こしていた。軍隊のみならず帝都の住民をも敵に回すこととなった皇帝は、防戦不能と判断して早々と帝都を脱出した。その頃、パトリキウスのゲルマヌスは、反乱軍の要求を知ったマウリキオスにより謀反の疑いを掛けられ、聖ソフィア教会に避難していた。そして、彼の逃亡を知ると、その同じ日に自ら皇帝になろうとして帝都住民に協力を求めたが拒絶され、そうと分かると反乱軍の指導者フォーカスの支持に転じたという。帝都の住民がゲルマヌスを支持しなかったのは、ユスティニアヌス帝が彼らに不人気であったことの影響ではないかと考えられる。すなわち、ゲルマヌスの帝位継承の正統性は、彼がゲルマヌス・ポストゥムスと同一人物であるとするなら、彼の兄ユスティヌスを殺害したユスティヌス2世ではなく、父ゲルマヌスの従兄弟であったユスティニアヌス帝に由来するからである。ゲルマヌスが、帝都市民の意見を代表する青党派（circus faction）の熱心な支持者であったことまで似ている。そのため、もう一方の有力な緑党派の支持を得られなかったのである(103)。

ゲルマヌスが軍隊の反乱を誘発したとは考えられないが、それよりも重要な点は、彼が皇帝となることを反乱軍から求められ、更には自ら皇帝になろうとまでしたことである。これは何を意味するのか。彼が、ティベリウスの娘を妻としていたからであろうか。しかし、彼自身がティベリウスと血縁を持っていたわけではないので十分ではない。彼が、やはりユスティニアヌス帝と血縁を持つゲルマヌス家の人間であったからではあるまいか。そして、ゲルマヌスが自ら皇帝になろうとしたのは、この血統のために皇帝位を要求する資格を自分が有していると考えたからではないか。

上述のように、*PLRE*Ⅲも601年に登場するゲルマヌスが、やはりシュタインの説を採用して、ゲルマヌス・ポストゥムスではないかと考えている。では、なぜ彼をカエサルのゲルマヌスとは別人と考えるかといえば、彼がマウリキオスとの帝位争奪戦に敗れ失脚したと考えているからである(104)。その根拠は、史料の沈黙でしかない。しかし、グベール説への反論として既に述べたように、同時代もしくはそれに近い時代に執筆された史料が、カエサルに就任後のゲルマヌスに言及することを控えたと考えるべきである（後段）。また、シュタイン説に従うなら、同時代に「ゲルマヌス」の名を持つ人物が二人揃ってパトリキウス位を有し、しかも両者は叔父と甥の関係にあったことになる。更に、甥（ユスティニアヌスの息子）がカエサルとなりマウリキオスと帝位を争い失脚した後も、叔父（ゲルマヌス・ポストゥムス）はパトリキウスの地位に止まり影響力を行使し得たことになる。不合理なことが目立つのである。

では、後代の史料にも登場しないのはなぜか。彼らが殆ど知り得なかったからであ

言及していない[97]。テオフュラクトスは、それをもっと徹底させたのではなかろうか。後代の史料である上述のレオンやヨハネスは、このゲルマヌスには触れていない。残るテオファネスは、テオフュラクトスや『復活祭年代記』よりも、反乱の経過について詳しい情報を提供するが、パトリキウスと記すだけで他には何も添えていない。

以上より、カエサルのゲルマヌスをパトリキウスと再び呼んだ可能性はあるものの確証はないことが分かる。ならば、状況証拠から検証するしかない。

ゲルマヌスがテオフュラクトスの伝えるような人物に過ぎないなら、マウリキオスは彼を息子の義父とするであろうか。元老院の実力者ならば他にも存在した。ましてや皇帝の協力者となれるのであろうか。マウリキオスは、ティベリウスの娘婿となることでしか帝位の正統性を有していなかった。そこで、カエサルのゲルマヌスの娘とテオドシオスを結婚させることで、ユスティニアヌス・ティベリウス両家のみならず、東ゴート王家の血統をも自らの家系に取り込もうとしたのではないだろうか。更に、既に彼の前任者であるティベリウスが、ユスティヌス2世の養子になることでしか帝位の正統性を有していなかったのであり、自分の娘をゲルマヌスに与えたこともマウリキオスの帝権の安定のためではなかったかと考えられる。ティベリウスのカエサル就任に影響力を行使した、ユスティヌスの未亡人ソフィアも、アウグスタ［女帝］の称号を有したまま、マウリキオスの治世を通じて生きたのであった[98]。

当時の帝国は、572年から591年までの20年間をペルシアとの戦争に費し、続いて593年からはバルカン半島においてアヴァールとの戦争に明け暮れていた[99]。しかし、マウリキオスは、帝国の旧西方領域についても諦めたわけではなかった。ヘラクレイオスの治世に発見された彼の遺言状によれば、彼は長男テオドシオスに東方領域を、そして次男ティベリオスにイタリアとティレニア海の島々を、そして残りの地方を息子たちに分与するつもりでいた[100]。彼の構想では、アヴァールとの戦争が終結した後に、今度は西方のゲルマン諸王国への影響力を強める計画であったのである。この構想にとり、上述のようにゲルマン諸王家とも血縁関係を有した東ゴート王家の血を引くゲルマヌスを自らの家系に取り込む必要があったのではなかろうか。

反乱の経緯を見よう[101]。ドナウ戦線でアヴァール・スラヴ連合軍に対峙していた帝国の軍団が、602年秋にマウリキオスに対して反乱を起こし、彼の退位を要求しながら帝都に迫った。反乱軍は、彼の代わりにテオドシオスか、それがだめならゲルマヌスを皇帝に求めたのである。テオドシオスが求められたのは、マウリキオスの息子として既に共同皇帝の地位にあったからだけではなく、ティベリウス帝の血を引いていたからではなかろうか。ティベリウスは、極度の倹約家として有名なマウリキオスとは異なり、軍隊に対して気前が良く評判の高い皇帝であったのである[102]。もっと

後継者を意味したのではなく、協力に報いる名誉称号に過ぎなかったのではないかと考えるのである[91]。

そのことを暗示する情報がある。再びテオファネスの記述に注目してみると、マウリキオスはティベリウスの婿になっているが、ゲルマヌスは娘を与えられているだけである。つまり、継承者はあくまでも「息子」マウリキオス一人であった。また、582年8月11日付の書簡が残っているが、そこにはティベリウスとカエサルのマウリキオス（皇帝即位は13日）の署名しかなく、ゲルマヌスのカエサル位が名誉称号である可能性を高めている[92]。そして、最後に彼の年齢と経歴を考慮すると、カエサルに就任した時まだ31歳の若さであり（マウリキオスは43歳）、恐らくアフリカ道長官を務めた経験しかなく、どちらも皇帝の資格としては不十分であったと考えられる。

では、601年に登場するゲルマヌスが、果してゲルマヌス・ポストゥムス（カエサルのゲルマヌス）と同一人物であるかどうかを最後に検討しよう。

C．パトリキウスのゲルマヌス

ゲルマヌスはカエサル就任後、601年まで史料に現れない。テオフュラクトスによれば、「父（マウリキオス）は、息子（テオドシオス）にゲルマヌスの娘を与えた。彼は、非常に著名な人物であり元老院議員の中でもで特に輝かしかった」[93]。また、ここには見えないが、『復活祭年代記』やテオファネスはゲルマヌスにパトリキウス（文武高官の爵位）の称号を付している[94]。そこで、便宜的に彼をパトリキウスのゲルマヌス［Germanus11］と呼ぶ。しかし、彼をカエサルと呼ぶ史料はない。

マウリキオス帝の長男テオドシオスは、既に587年に4歳の若さでカエサルに就任していたばかりか、更に590年には共同皇帝の地位を得ていた[95]。つまり、パトリキウスのゲルマヌスは、次期皇帝テオドシオスの義父となったわけである。それにしても、この形式上に過ぎない、異例の若さでのテオドシオスのカエサル、そして更に共同皇帝への就任は、それを急ぐ理由があったのではないかと考えさせられる。なお、マウリキオス帝の方に健康上の問題があったわけではない。

さて、このパトリキウスのゲルマヌスとは何者か。カエサルのゲルマヌスが、やはりパトリキウス位を有していたことは既に述べた。これは、ヨハネスの『世界年代記』でも採用されている[96]。テオファネスは採用していないが、この情報は確かと考えて良いであろう。ゲルマヌスは、カエサルに就任した後もパトリキウスを肩書きとしたのであろうか。しかし、同時代史料がカエサル就任に触れないとするならば、『復活祭年代記』のようにパトリキウスとだけ記すのではないか。更に、同書はテオドシオスの結婚に触れているだけで、その際には皇族の結婚にも拘らず相手が誰であるかに

を採用しないのは、いかなる理由によるものか説明していない。ユスティニアヌスは、敗戦後に帝都に帰還しなかったのである。なお、ヨアンネスはカエサルのゲルマヌスに言及していないが、マウリキオスの治世にしかも帝都で『教会史』を執筆したためと考えられる。

以上の通り、カエサルのゲルマヌスに言及するテオファネスやレオンの史料にユスティニアヌスの名前が付随して現れず、息子の存在に触れる唯一の史料であるグレゴリウスの記事の信憑性が薄いのであるなら、*PLRE*Ⅲ（シュタイン説）は受け入れ難い。つまり、ユスティニアヌスの息子の存在を直接的には否定できないものの、それがカエサルのゲルマヌスと同一人物であるとする説は根拠が非常に弱いのである。

同様にグレゴリウスを採用しない研究者もいる。例えば、グベール（P.Goubert）は、カエサルのゲルマヌスの存在そのものを疑問視している[87]。彼は、同時代史料の少なさから、これは601年に登場するパトリキウスのゲルマヌスを過去に投影したに過ぎない、としているのである。しかし、十分な検討がなされておらず説得力を持ち得ない。カエサルのゲルマヌスに言及する史料が、マウリキオスからヘラクレイオスに至る時代に存在しない理由については、既に触れた通りであるからである。

また、ホィットビー（Michael Whitby）は、やはりグレゴリウスの記事を退け、カエサルのゲルマヌスをポストゥムスと同一視している[88]。彼の考察は、ゲルマヌスを主題にしたものではないが、本稿の見解に最も近いものである。なお、彼もレオンの情報を採用し、ゲルマヌスの肩書きを「アフリカの統治者(governor)」としている。

ところで、カエサルに任命された人物が二人いたというのは何を意味するのであろうか。ニキウ（エジプト）のヨハネスの『世界年代記』（7世紀末にギリシア語とコプト語で執筆という。後代のエチオピア語版が断片で現存）によれば、先ずゲルマヌスがティベリウスにより帝位に就くように勧められたが、彼が「謙遜の気持ちのために皇帝になることを拒否した」結果、マウリキオスが皇帝になった、という[89]。しかし、これについてホィットビーは、ヨハネスが著作の中で宗教上の理由からマウリキオスに敵対的態度をとっていることを理由として、この記述を信用できないものであるとしている[90]。この指摘が正しいとしても、やはり同時代ではなく後代の史料にカエサルのゲルマヌスが登場することは、既に指摘した点に符合するばかりか、これがレオンやテオファネスとは完全に独立した史料であることは、その実在を更に補強するものである。

息子のいなかったティベリウスは、帝位を自分の腹心の部下マウリキオスに譲るに際して、娘コンスタンティナの夫でもある新皇帝の協力者にゲルマヌスがなることを望んだのではないかと筆者は考える。つまり、ゲルマヌスに与えられたカエサル位は

の研究である[78]。そして、そのシュタインが根拠としている史料は、帝国のものではなく西側のもので、トゥールのグレゴリウスが著した『歴史十巻』である。「またユスティニアヌスを叱責したが、その後、(ティベリウスは) 彼の息子に自分の娘を約束をし、逆に自分の息子に彼の娘を求めるほどに彼を大いに可愛がった。しかし、これは実現しなかった」[79]。ユスティニアヌスが、ユスティヌス2世の未亡人ソフィアと謀って、ティベリウス帝の打倒を二度にわたり企てたにも拘らず、皇帝は彼を赦したという記事である。ところが、これ以外に彼に息子がいたことを記す史料は存在しない[80]。しかも、そのグレゴリウスも名前を明らかにしていないばかりか、彼の息子とティベリウス帝の娘との結婚は「実現しなかった」と述べている。更に、ティベリウスには二人の娘の他にもう一人子供がいたが (性別不明)、カエサルに就任する以前に死亡しているのである[81]。

このクーデタ未遂事件について真偽を検討しよう。ユスティニアヌスは、史料上明確ではないが、兄ユスティヌスと共にバルカン半島から引き続き554年にペルシア戦線 (黒海東岸のラジカ地方) に派遣され、561年頃にバルカン半島に再び転属となった兄の後を受けて、アルメニア方面軍の最高司令官を573年まで務めたと考えられる[82]。兄が帝位を争ったユスティヌス2世 (彼らの又従兄弟) により殺害された (566年) のに対して、彼がそのユスティヌス2世の治世においても軍人として高位を保つことが出来たことは注目に値する。これは、彼が兄の殺害以後も、恐らく軍隊における名声と指揮能力の高さにより、無視できない存在であったことを示している。

その後、574年末から77年まで序列の上では更に高位のオリエント方面軍の最高司令官を務めた[83]。すなわち、ティベリウスがカエサルに就任し実権を掌握した574年12月以降、彼は東方における軍事上の最高司令官を務めたことになる。グレゴリウスが、ティベリウスがユスティニアヌスを厚遇したと述べていることを完全には否定できないわけである。ところが、彼は577年夏にアルメニアにおいて、ペルシア軍に大敗を喫して解任され、しかも後任にはマウリキオスが就いているのである[84]。

とは言え、ならば彼はティベリウスが帝位に就いた578年には帝都にいたことになる。ところが、*PLRE* Ⅲはグレゴリウスを信用しているので採用していないが、エフェソスのヨアンネスの『教会史』(シリア語で580年代に執筆) は、577年の敗戦時にユスティニアヌスが死亡したと述べている[85]。これは、グレゴリウス以外には彼の名がその後二度と史料に現れないことに符合する。ヨアンネスは同時代史料であり、570年代のペルシア戦争に関して最も詳しい情報を我々に伝えていることを考慮するなら、ユスティニアヌスの死を疑うことは難しい[86]。シュタインも、このペルシアとの戦闘に関してヨアンネスの記述も参照しているのであるが、ユスティニアヌスの死亡記事

てきた史料より後代のものに、すなわちマウリキオスやヘラクレイオスの帝位の正統性を意識する必要のない時代に著された史料に、カエサルのゲルマヌスが登場することは興味深い。そして、ゲルマヌスに関する情報量の少なさは同時代史料の少なさを示しており、上述の指摘に合致している。なお、テオファネスはユスティニアヌス時代に関しては、プロコピオスとマララスの『年代記』(565年頃までを扱う)に大幅に依拠しているが、後者にもゲルマヌス・ポストゥムスの記事はない(71)。

テオファネスの表現に注目してみよう。彼は、ゲルマヌスを「ストラテーゴス」とだけ呼んでいる。しかし、ギリシア語のこの用語は、通常は軍事の「最高司令官」を意味するが、政事の官職を意味する場合もあり判定するのは難しい(72)。この件に関して、レオン・グランマティコスの『年代記』(10世紀に執筆)は、「アフリカでストラテーゴスを務めるパトリキウスのゲルマヌス」と記している(73)。字句通りならば、「アフリカ方面軍最高司令官」または「アフリカ道長官」を意味する。しかし、前者の官職はゲンナディウスという人物が該当期に保持していたことが確かめられ、後者についてもテオドルスという人物が582年8月11日にこの地位にあった(74)。テオドルスの着任時期は不明であるので、ゲルマヌスの後任であったのかもしれない。

レオンは、同一の情報源(8世紀後半に編纂され断片でのみ現存)を利用しているが、テオファネスの『年代記』そのものは参照していない(75)。テオファネスは、「ストラテーゴス」という情報を彼と同様に採用したが、「パトリキウス」や「アフリカ」は採用しなかったことになる。だが、レオンとテオファネスに共通する「ストラテーゴス」職をゲルマヌスが持っていた可能性は高いと考えて良い。テオファネスの用法ではこの用語は「最高司令官」を意味するので、上述のゲンナディウスの存在をレオンが利用していないテオフュラクトスなどから知り、「アフリカ」が誤りであると判断して、それを削除したのかもしれない(76)。無任(vacans=特別な任地を持たない)の軍司令官かあるいは名誉称号であると考えたのであろう。ここでは一応、ゲンナディウスがアフリカ方面軍の最高司令官を務めていたと考え、ゲルマヌスはカエサル就任以前にアフリカ道長官を務めていたと結論付けておこう。これは、ポストゥムスが、国政を左右するような地位にいなかったという先の仮定に合致している。

また、マウリキオスが戦勝によりカエサルに任命されたのに対して、ゲルマヌスに関しては任命の理由が全く述べられていない。彼には、マウリキオスのような実績に代わる何かが存在したと考えるのが妥当である。これまで何人かの研究者たちが、彼には特別な血統が存在したと考えて、次のような仮説を提示している。

例えば *PLRE* Ⅲは、カエサルのゲルマヌスがユスティニアヌスの息子(つまり、将軍ゲルマヌスの孫)ではないかと考えている(77)。その根拠はシュタイン(E.Stein)

トゥムスのことではないか、という一応の結論を導くことができる。

エウァグリオスよりやや後代のギリシア語史料に、628年までを扱う『復活祭年代記』（編纂はヘラクレイオス帝の治世）がある。そこには、マウリキオスのカエサル就任に関しては記事があるが、やはりカエサルのゲルマヌスは登場しない[63]。なお、やはりポストゥムスの名がないばかりか、将軍ゲルマヌスと二人の兄たちについても全く言及がない。『復活祭年代記』は、帝都における出来事、特に皇帝家に関する情報が詳しいのが特徴であるので、カエサルのゲルマヌスについて記さないというのは不自然である[64]。ただ、注意すべきことは、この史料が3世紀から連綿と書き続けられた記録に基づいているとはいえ、ヘラクレイオスの治世に最終的に編纂されたことである[65]。つまり、当時の記録そのままではなく、上述のエウァグリオス同様、現皇帝ヘラクレイオスに特別の配慮をした可能性が大きいのである。

「カエサルのゲルマヌス」を記すことが、なぜヘラクレイオスにとっても不利益となるか。それは、彼が、マウリキオスから帝位を簒奪したフォーカス（在位 602〜10）を打倒して皇帝となったからである[66]。つまり、ヘラクレイオスの帝位の正統性は、やはり「正統なる」皇帝であったマウリキオスを殺害した「簒奪者」フォーカスを倒して、帝国に秩序を回復したことに求められるのであり、そのマウリキオスの即位にいかなる疑問があってもならないのである。更には、ヘラクレイオスと同じ名を持つ父は、マウリキオスの将軍として対ペルシア戦線で活躍した人物であった[67]。

更に、上述のメナンドロスの続編を意識して書かれたテオフュラクトス・シモカットスの『歴史』では、カエサルという用語を使わずにマウリキオスが後継者に指名されていたことが述べられているが、もう一人指名された人物がいたことには言及がない[68]。やはり、彼の史料にもゲルマヌス・ポストゥムスは登場しない。ここでも、次の点には留意しなければならない。つまり、状況はエウァグリオスや『復活祭年代記』と同様であり、ヘラクレイオス帝の治世（執筆は620〜30年代と考えられている）に、しかもマウリキオス帝を賛美するために書かれた同書が、そのマウリキオスに不利になることを書くとは思われないのである[69]。しかも、カエサルのゲルマヌスが601年に登場する人物と同一であるとするなら、次節で見るように、彼は結果としてマウリキオスの失脚に一役買ったのであり、故意に史料上黙殺される可能性がある。

9世紀初めに著されたテオファネスの『年代記』を見よう。「（将軍マウリキオスの対ペルシア戦の勝利の記事に続いて）マウリキオスはコンスタンティノポリスへ行き、皇帝により大きな栄誉と共に迎えられ、ティベリウスはマウリキオスの勝利を勝ち誇り、彼を自分自身の娘であるコンスタンティナの婿とした。同様にストラテーゴスのゲルマヌスに自分の娘カリトを嫁がせ、両者をカエサルとした」[70]。ここまで検討し

な記録を残しているにも拘らず、後継者の正式な指名を意味するカエサル就任に関して記していないことは奇異に感じられる[55]。ただ、カエサル就任（582年８月５日）から皇帝即位（同年８月13日）までの期間が約一週間と短く、マウリキオスがティベリウスから後継者に指名されたことを記すだけで十分と考えた可能性はある。だが、それを念頭に置きながらも、カエサルに任命された人物がマウリキオス以外にも存在したことを記すことを彼が故意に避けた可能性は考えられないであろうか。

彼の叙述にはそれに関連して留意すべきことがある。それは、ユスティニアヌスの治世に関してもプロコピオスに全面的に依拠して相当量の紙面を割いているが、そこには将軍ゲルマヌスが登場しない、ということである[56]。彼の功績がベリサリウスやナルシスといった同時代の将軍たちと比較すれば見劣りがするということかもしれないが、既に見たような彼の存在の大きさを考慮するならば疑問は残る。更に、彼が典拠としたプロコピオスは、自分の主であるベリサリウスの失脚後に関して、このゲルマヌスを主人公として叙述しているのである[57]。しかも、エウァグリオスはゲルマヌスの名を挙げずに、二人の息子たちに関して記している[58]。彼らが他の史料に登場する際には、プロコピオスを代表として「ゲルマヌスの息子の」と記されるのが普通なのである[59]。

後段で検討するように、カエサルのゲルマヌスの実在を疑う余地は殆どない。エウァグリオスは、588年に帝都に自ら行ったことがあり、その前後も帝都との連絡が密なアンティオケイアに住んだのであるから、彼を知らなかったとは考えにくい[60]。更に特筆すべきは、彼がティベリウス・マウリキオス両皇帝から名誉位階を与えられほど厚遇されており、特に後者に対しては息子の誕生に際して頌詩を献上していることである[61]。従って、マウリキオスに対しては現皇帝である以上に特別の配慮をしたと考えられるのである。彼が故意にカエサルのゲルマヌスを無視したとするなら、将軍ゲルマヌスに関して触れないことも何か関係があるのではないだろうか。

そのような仮説に基づき、カエサルのゲルマヌスが将軍ゲルマヌスの息子であるとするならば、二人の兄たちに関してもエウァグリオスは沈黙するのではないか、という疑問が生じるだろう。だが、彼らが登場するのは、長兄ユスティヌスが、エウァグリオスの嫌悪するユスティヌス２世の蛮行の犠牲者としてであり、次兄ユスティニアヌスが、戦果を挙げられずにマウリキオスに交代させられた将軍としてなのである（後段）[62]。つまり、二人に関しても記述は限定されており、彼の執筆意図との関連で語られているに過ぎないのである。実際に前線で活躍した彼らに関しても全く沈黙すれば、同時代（６世紀後半）の生き証人として語られている『教会史』の心臓部分の価値を損なうことになろう。以上から、カエサルのゲルマヌスとはゲルマヌス・ポス

の時代には特筆すべきこととは考えなかっただろう[50]。アガシアスは、東ゴートやペルシア（特に後者）などと帝国との戦いを中心に叙述しており、しかも本人が執筆途中で死亡したためか、552年から559年までの記述で終わっており（未完）、この期間にゲルマヌスが軍歴を有することは年齢的に有り得ないのである[51]。従って、アガシアスの記述に彼が登場しなくとも全く不思議はないことになる。

また、そのアガシアスの後を受けて『歴史』を著したメナンドロスにもこのゲルマヌスの名前は見えない[52]。メナンドロスは、マウリキオス帝の治世（582～602）にこの著作を執筆したとされるが、残念ながら断片でしか今日では残っておらず、マウリキオスの即位の直前で終わっている[53]。従って、カエサルに就任したゲルマヌスが実在すれば、彼は知っていたことになるが、マウリキオスの即位に関する記述は現存しないので確認できない。断片で残るのみであるから確実ではないが、彼の主要関心事は帝国の外交交渉であるので、「ゲルマヌス」という人物が、少なくとも582年までに国政に参加するような地位にはなかったことを窺うことはできる。

ここまで諸史料を検討してきたのは、次の二つの重要な点を確認するためである。一つには、ゲルマヌス・ポストゥムスの誕生そして存在を記録した史料は、ヨルダネスの著作しか存在せず、その典拠となったカッシオドルスの著作も当時は存在した可能性はあるものの、それらはどちらもラテン語史料であること。二つには、同時代のギリシア語史料にはその情報はないこと。それゆえ、彼らより更に後世に生きた歴史著述家たちは、これらラテン語史料を参照しない限り、ゲルマヌス・ポストゥムスの存在を知ることは困難であったという事実である。もちろん、上記以外の現存しない史料の存在も推定され得るのであるが、それらを利用してどの程度まで正確に知ることが出来たかについては、少なくとも常に留意すべきなのである。

B．カエサルのゲルマヌス

カエサルに就任したゲルマヌス（以下、カエサルのゲルマヌス）［Germanus 5］について見てみよう。上述のように、このゲルマヌスがゲルマヌス・ポストゥムスと同名異人とするならば、カエサル就任まで一度も史料に登場していないことになる。そこで、このカエサル就任に注目して諸史料を検討してみよう。

これに関して同時代の証人と言えるエウァグリオスの『教会史』（アンティオケイア在住、執筆は590年代）は、5世紀前半から594年までを扱うが、ティベリウス2世によるマウリキオスの後継者指名は記しているものの、カエサル就任に関しては全く触れていない[54]。そのためか「カエサルのゲルマヌス」も登場しない。

彼は、現皇帝マウリキオスを称揚するのに熱心であり、その結婚式についても詳細

ルダネスやカッシオドルスとほぼ同時代に生き、やはり帝都で執筆活動をしたにも拘らず触れなかったのであろう。マセスエンサは、夫であるウィティギス王と共に帝都に540年に連行され（夫は542年頃に死亡）、上述の通りそこで将軍ゲルマヌスと再婚し550年終り乃至551年初めに息子を生んだとされる(41)。従って、当時やはり帝都にいたプロコピオスが知らなかった筈はないのである(42)。かと言って、ヨルダネスがわざわざゲルマヌス・ポストゥムスの誕生を捏造する必要も感じられない。

最も蓋然性の高いと考えられる解釈は次の通りである。彼はその誕生を知っていたが、ゲルマヌス・ポストゥムスをヨルダネスのようにゴート人との和解を図る重要な存在とは考えていなかったのではないか。実際、前章で既に触れたように、彼は、将軍ゲルマヌスがテオドリック王の血を引く妻を伴いイタリア遠征に赴くことで、「和解」ではなくゴート人の「征服」を容易にすると考えていた(43)。つまり、その息子ではなく、妻マセスエンサの存在を重要視していたのである。しかも、ゲルマヌスが遠征のために帝都を出発した時には、まだ息子は生まれていなかったのである。従って、息子が誕生した550年ないしは551年に、既にゲルマヌスの死によりこの計画が実行不能となっていた以上、特にその息子の存在に触れる必要性を感じなかったのである。更に、彼は、病死したゲルマヌスに代わりナルセースが指揮し、トティラ王（在位541～52）を敗死させた、552年の「ブスタ・ガッロールムの戦い」をゴート人との戦争の最終局面と見なし、その記述も550年代の前半で終わっており、このゲルマヌスのその後の存在価値も気に留めなかったのである(44)。これに加えて、プロコピオスは、ユスティニアヌスの治世に亡くなったと考えられているので、この息子のその後の人生に関しても知る由はなかったのである(45)。以上の理由より、彼の史料にポストゥムスが登場しないことは、別に不自然なことではないのである。

これに対して、自身ゴート人であるヨルダネスは、ウィティギス王が捕虜となった540年のラヴェンナでの戦いを戦争の終結と見なしており、イタリアにおけるローマ人とゴート人の「その後」の共存に関心が集中していた(46)。彼は、王族の血を引かないトティラ王の下でのゴート人の抗戦について全く触れておらず、ユスティニアヌス帝の権威の下で、ゲルマヌス・ポストゥムスを正統な王に頂く「東ゴート王国」の再生を思い描いていたのである(47)。ヨルダネスの没年は不明であるが、彼の記述は551年で終わっており、少なくともその時点では、翌年の「ブスタ・ガッロールムの戦い」による「王国」の消滅を知らずに夢を描いていたのである(48)。

プロコピオスの後を受ける形で『歴史』（ギリシア語）を著したアガシアスも、この人物に全く触れていない(49)。しかし、彼もまたティベリウスの治世（578～82）に亡くなったとされるので、ゲルマヌス・ポストゥムスの存在を知っていたとしても、こ

3．問題の検討

A．ゲルマヌス・ポストゥムス

実は、将軍ゲルマヌスと東ゴート王族マセスエンサとの間に生まれた息子（以下、ゲルマヌス・ポストゥムスと記す）[Germanus 3] について言及している史料は、現存するのはヨルダネスの著作のみである。プロコピオスは、両者の結婚についてのみ触れているに過ぎない[30]。そのヨルダネスは、「皇帝（ユスティニアヌス）は、彼（東ゴート王ウィティギス、在位 536〜40）の妻マセスエンサを自分の兄弟（fratri, fratrueli「従兄弟」の誤記）であるパトリキウスのゲルマヌスに授けた。パトリキウスのゲルマヌスの葬儀の後に彼らから同じ名を持つ息子ゲルマヌスが生まれた。彼の中でアニキウス一族がアマル家系と結び付き、秀でた支配者（ユスティニアヌス）は両方の民族（ローマ人とゴート人）に更なる希望を約束した」と記している[31]。

ここに見える「アマル家系」というのは、東ゴート王族であると同時に他のゲルマン諸王族にも連なる名家である[32]。また、「アニキウス一族」というのは、6 世紀初めまで元老院議員を輩出したローマ市の大変に裕福な名門家系である[33]。しかし、確かにこの一族のひとりであるフラウィウス・マクシムス・アニキウスが、テオドリック王の孫娘（名前は不詳。マセスエンサの姉妹）と結婚しているが、マセスエンサ自身には関係がなく、将軍ゲルマヌスもこの一族の出身ではないので、両家がこの結婚で結び付くというのはヨルダネスの誤解である[34]。なお、ゴート人に関する彼の記述は、カッシオドルスの『ゴート史』（現存せず）に全面的に依拠している[35]。

ここで簡単に東ゴート王位の継承について見ておこう。東ゴート王国ではテオダハド王（テオドリックの甥、在位 534〜36）の死後、アマル王族の血を引く正統な王を欠いており、その意味でゲルマヌス・ポストゥムスは、東ゴート王となる資格を有していたのである[36]。そのテオダハドの後を継いで東ゴート王となった上述のウィティギスは、王族の血を引かない有力な武将であり、マセスエンサとの婚姻により正統性を維持していたのであった[37]。更に、ヨルダネスが言わんとするところは、アマル家が王位を有していた時には、東ゴートと帝国は敵対関係になく、再びアマル家の人間、すなわちゲルマヌス・ポストゥムスが王座に就けば、両者の争いは収束するというものである。実際、特にテオドリック王の治下では、上述のアニキウス家を代表とするローマ貴族たちが王国の要職に登用された[38]。そもそも、ユスティニアヌス帝の「イタリア再征服」は、アマル王家の内紛に乗じたものであった[39]。

ヨルダネスは、帝国の書記官（notarius）を務め、帝都コンスタンティノポリスで著述活動を行った[40]。では、なぜこれほどの重要人物について、プロコピオスは、ヨ

カにおける反乱鎮圧）により皇帝の血縁者の中で最有力者と見なされていた[21]。また、やはりプロコピオスによれば、テオドリックの孫娘を妻に持つ彼は、東ゴート族に対して妻を伴って進軍すれば、彼らが敵対をやめ降伏するのではと考えていた[22]。実際には、ゴート勢力が最終的に鎮圧されたのは皇帝の晩年に近い562年であった[23]。

従って、彼はこの将軍ゲルマヌスを父に持ち、更にはテオドリック王とユスティニアヌス帝の両方の血を引いていることになる。実際、彼の誕生こそがゴートとローマの和解を実現する希望であると見なされたことはよく知られている[24]。ところが、*PLRE* に従えば、彼の名は601年まで登場しないのである。「Germanus11と同一人物であるとは見なし得るが、彼（Germanus 3）に関してはそれ以上何も知られてはいない」[25]。年齢差は大きいものの、彼の二人の兄弟（ユスティヌスとユスティニアヌス）が帝国の要職に就き、史料にしばしば登場するのと著しい対照をなしている。

次に、Germanus 5とされる人物について見てみよう。彼は、ティベリウス2世（またはティベリウス1世・コンスタンティヌス、在位578〜82）が病気により危篤に陥った際に、*PLRE* によれば忽然として史料に現れ、マウリキオス（後の皇帝）と共にカエサル［副帝］に任じられた（582年8月5日）[26]。この時代の「カエサル」とは、帝位継承の候補者を意味していた[27]。また、同時にティベリウスの娘カリトと結婚した。彼は、マウリキオスと共にティベリウス2世の後継者に指名されたわけであるが、その後、マウリキオスのみが帝位を獲得している（同年8月13日）[28]。そして、これもまた *PLRE* に従うならば、彼の名も二度と史料に登場しない。カエサルに任命されるほどの人物がそれまで一度として史料に登場することなく、更にカエサルという皇帝に次ぐ地位に就いた後もその名が消え去るとは、いかなる背景があるのだろうか。

最後に、Germanus11を取り上げよう。Germanus 3とは同名異人とするなら、彼もまたマウリキオスの治世も終りに近い601年に突如その名を史料に現すことになる。すなわち、このゲルマヌスの娘（名前不詳）が、601年11月にマウリキオス帝の長男テオドシオスと結婚するのである[29]。つまり、彼は未来の皇帝の義理の父ということになる。次章で詳しく検討するが、彼は元老院の実力者として登場する。その後、マウリキオスは602年に失脚し、ゲルマヌスはその際に反乱軍により皇帝になることを一時は要請されたのであった。では、元老院において絶大な権力を持ち、帝位継承の有資格者とも見なされたゲルマヌスとはいかなる人物なのであろうか。

以上の疑問点と関心を踏まえ、*PLRE* Ⅲ のこれらの項目の典拠となっている諸史料と共に次章で検討しよう。

意味を持っているので、この場をお借りしてこの誤解を正しておきたい。

ユスティヌス１世は、軍隊において出世を遂げる過程で、自身に子供がいなかったこともあり、郷里ダルダニア州（バルカン半島北部）から若い甥たちを帝都に呼び寄せた[06]。その中に、ペトルス・サッバティウス（後のユスティニアヌス帝）や当該のゲルマヌス（他に兄弟が二人）がいたわけである。ユスティニアヌスとゲルマヌスは、それぞれユスティヌス１世の二人の姉妹（共に名前不詳）の息子である。従って、上述の通り、二人はどちらもユスティヌス１世の「甥」であり「従兄弟同士」なのであるが、「伯父（叔父）と甥」として記されるのはなぜであろうか。

原因は、ユスティニアヌス時代の中心史料であるプロコピオスの有名な著作にあると言って良い。正確に言うなら、わが国でも頻繁に用いられるロエブ（Loeb）版（初版1914～40年）の訳語に第一の問題がある。ギリシア語の問題になるが、プロコピオスはしばしばゲルマヌスを「ユスティニアヌスの ἀνεψιός」と呼んでいる[05]。これを英訳者であるドューイング（H. B. Dewing）が、恐らくは多くの研究の典拠となっている上述の *RE* 7 I（初版1910年）などを参照して、「甥」と訳しているのである。この単語は、確かに中世ギリシア語においては「ἀδελφιδοῦς（甥）」と同義に用いられる[06]。だが、プロコピオスはこの二つの単語を区別して使っており、ユスティニアヌスをユスティヌスの「甥」と呼ぶ際には ἀδελφιδοῦς を用いているのである[07]。従って、プロコピオスの用法において、ἀνεψιός を「甥」と訳し直す必要はなく、「従兄弟」と訳すべきなのである。将軍ゲルマヌスは、ユスティニアヌスの従兄弟である。

なお、上述のロエブ版に限らないので更に注意が必要であるが、*RE* 7 I などの誤解を誘発したテキストの校訂上のミスも *PLRE* II で言及されているのでここで示しておきたい[08]。すなわち、Procopius, *History of the Wars* VII, 40.5 に見える「ゲルマヌスの伯父（θεῖος）であるユスティニアヌスが帝位にあった時に」とは、「ユスティヌス（１世）が」の誤りであることが改めて（初出ではない）記されている[09]。これは、ドナウ河を渡河したスラヴ系の部族アンタエ（アント）人の侵入をゲルマヌスが撃退した際のものであるが、ユスティニアヌス時代の出来事ではない。

本論に入ろう。彼には三人の息子がいたが、その一人が本稿で問題となる Germanus 3 である。父と同じ名を持つこの息子は、上の二人の兄弟とは母親を異にしており、有名な東ゴート王テオドリック（在位 493～526）の孫娘マセスエンサ（Mathesuentha またはマタスエンサ Matasuentha）より生まれた[10]。その時、父である将軍ゲルマヌスは、東ゴート遠征の途上バルカン半島北部のサルディカ市で既に病没していたが（550年秋）、それまでに輝かしい業績（上述のアンタエ人の撃退、536～39年のアフリ

て教えられることが多く、自身の旧稿の確認を行うと同時に、従来の学説や上述の *RE*そして *Kleine Pauly* と比較検討もしてみた。その結果、大抵の場合は納得できたものの、何点かに関しては疑問に思うところもあった。更には、もし *PLRE*の解釈が正しいとするならば、従来の歴史認識も少なからず再考を迫られるのではと感じた。

そこで本稿では、その全てを論じることは筆者の能力を越えることであり、また個々の項目を歴史的背景や脈絡抜きで取り上げるだけでは意味が無いので、特に筆者の研究領域に直接関わる人物についてその精度を問題としたい。

ところで、本書を見てみると今更ながら同名異人の多さに驚く。例えば、Theodorus の項目は208まであり、Ioannes に至っては299人もの同名異人が存在する（同一人物の可能性のある者も含まれている)[8]。しかも、この数は *PLRE* Ⅲが扱う時代に限定してのことなのである。従って、研究者はよほど用心してかからないと人物の同定を誤ってしまう。とはいえ、さして有名でもない人物となると、*RE*では参照できず、以前ならば多くの史料や先行研究を比較検討しなければならなかった。筆者が研究対象としてきた6世紀後半に関して言えば、これから触れるようにその史料は実に多種多様であり、それらを全て検討することは非常に煩雑な作業であった。

本稿で考察の対象とするのは、「ゲルマヌス」という人物であるが、Germanus の項を見るなら同名異人は16人に及ぶ。この内、今回問題となるのは、同書の分類で言うなら、Germanus 3と5そして11である[9]。

なお、人名に関しては、非ラテン語史料に登場する人物も含めて、ギリシア語歴史叙述家（プロコピオスなど）を例外として、同名異人を扱う本稿の性格から混乱を避けるためにラテン語表記に統一する。ただし、皇帝の名前はマウリキオス帝（在位582～602)からギリシア語表記とすることが慣例となっているのでそれに従う。

ユスティニアヌス帝（在位 527～65）の従兄弟であり、その「再征服戦争」を支えた有能な将軍でもあった人物もゲルマヌス（以下、将軍ゲルマヌスと記す）という名を持っていた[10]。ここで迂遠なようであるが、このゲルマヌスについて、*PLRE* Ⅱでも訂正されている従来の解釈の誤謬について触れておきたい。意外なことに最近でも実に多くの研究書が、将軍ゲルマヌスを「ユスティニアヌスの甥」としているのだが、これは「従兄弟」の誤りである[11]。上述のＯＤＢさえ、ゲルマヌスを「ユスティヌス1世（在位 518～27）あるいはおそらく(or more likely)ユスティニアヌス1世の甥」としているのである[12]。同書は *PLRE* Ⅱの刊行以後の出版にも拘らず、このようなミスを犯すとは意外な気さえする。これでは更に多くの誤解を生じるであろう。また、*RE*7 Ⅰにおいても、その後 *Der Kleine Pauly* 2 で訂正されているものの、「ユスティニアヌスの甥」とされている[13]。本稿では、この将軍ゲルマヌスの存在が重要な

在職表（Fasti）が掲載され、更にそれらに加えてササン朝ペルシアやイベリア王国の王統系図（Stemmata）が示されておりこれも非常に便利である。

このシリーズは、あらゆる文書・金石文・貨幣史料を精査して（非ギリシア・ラテン語を含む）、有名無名を問わず登場する全ての人物を拾い上げようという意図の下に編まれている。また、Ⅲで印章学（Monogram）が取り上げられていることは特に目を引く特徴である。途中、代表者であるジョーンズの死（1970年）により計画の頓挫が危惧されたものの、British Academyの統括の下、マーティンデイル（J. R. Martindale）を新たに総責任者として継続され、二十年以上の歳月を費して完成した[5]。

そのスタッフには、ジョーンズを始めとする各分野の著名な学者が多数名を連ねているばかりか、可能な限り最近のものまで含めて多くの先行研究が参照されており、正に完璧を志向するものである。しかし、むろん今後の研究の進展や新史料の発見などにより使用に耐えなくなった箇所は、「完成品」として傍観することなく、更なる精度向上を目指して積極的に改められていくことであろう。実際、Ⅲの「序文」によれば、ⅠとⅡの「補遺（Addenda）と訂正（Corrigenda）」が、Ⅲの刊行の際に「付録（Appendix）」として加えられる予定であったが、近年（1971～91年）の研究成果が膨大なものとなり、とても「付録」として収録することが出来ずに見送られたという。そこで、「補遺と訂正」はⅢの刊行後、四、五年をめどとして、Ⅲの分も含めて『補巻』として刊行される予定であるということなので、後期ローマ（初期ビザンツ）帝国史に関するプロソポグラフィ研究において、本シリーズは、*RE*に代わる新たなスタンダードとして、暫くはその地位は揺るがないことだろう[6]。

また、プロソポグラフィに限定したものではないが、*The Oxford Dictionary of Byzantium* 1～3［以下、*ODB*と略記する］が1991年に刊行された[7]。こちらは、ビザンツ全史をカヴァーするだけでなく、人名に加えて地名や専門用語に関する解説が記されており、表題通り辞典として広範に利用が可能である。

なお、ついでながら、キリスト教関係のプロソポグラフィについては、フランスにおいてマルー（H. I. Marrou）を総責任者として、本シリーズと対をなす *Prosopographie chrétienne* の刊行が待たれている。また、本シリーズの継続シリーズとして、*The Prosopography of the Byzantine Empire* が計画されている。

2．問題の所在

本稿では *PLRE* Ⅲを取り上げるが、ⅠやⅡと同様に、従来の学説が取り上げられるだけでなく、それらに代わる新説も史料的根拠と共に披露されている。筆者も初め

6世紀後半後期ローマ帝国に関する近年の Prosopography をめぐる一考察

―カエサルのゲルマヌスとは誰か―

倉橋良伸

1．Prosopography 研究

ローマ帝国史に限らず、西洋古代史に関するプロソポグラフィ（Prosopography）研究と言えば、周知の通り第一に、Pauly-Wissowa, *Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*（Stuttgart, 1893～1974）［以下、*RE*と略記する］である[1]。言うまでもなく、これは、プロソポグラフィ研究だけでなく地理や文化など古代におけるあらゆる領域を扱っており、将来も類書の刊行は事実上不可能と思われる。また、長年にわたり改訂・補筆され続け、それらを踏まえた簡便な *Der Kleine Pauly* の刊行もあり、依然として古代学に関する権威である[2]。

これに加えて、近年、後期ローマ（初期ビザンツ）帝国史（3～6世紀）に関するプロソポグラフィ研究には目覚ましい進歩が見られる。すなわち、ケンブリッジ大学を中心として編纂された *The Prosopograpy of the Later Roman Empire*［以下、*PLRE*と略記する］と呼ばれる全三部よりなる大著がそれである[3]。

この研究作業は、1971年より故ジョーンズ(A.H.M. Jones)を代表とするスタッフにより刊行が始められた。Ⅰ（1971年刊）は、ほぼ260年から395年を対象として扱い、Ⅱ（1980年刊）は、395年から527年を扱っている。そして、本稿で主に取り上げるⅢ（1992年刊）は二分冊よりなり、更に527年から641年をカヴァーしている。

総体として260年から641年頃までの期間を扱うというのは、ディオクレティアヌス（在位 284～305）・コンスタンティヌス（在位 306～37）両帝の改革をもって「後期ローマ帝国」の始まりと見、更にヘラクレイオス帝（在位 610～41）の治世を「ビザンツ帝国」への移行の画期と見る伝統的歴史観を踏襲している。本シリーズの基本コンセプトを形成したジョーンズの代表的著作『後期ローマ帝国（*The Later Roman Empire 284～602*）』は、この歴史観を反映する代表的なものである[4]。

また、当然ながら年代的に両方の巻にまたがる人物も存在するのであるが、どちらの巻を参照すべきかの指示が各巻に与えられているのも親切である。

Ⅲの巻末には、前二巻同様に帝国のみならずゲルマン系の諸王国における諸官職の

文　　献

1）阿部明浩（1988）　大学等におけるスポーツ傷害(2)、学校保健研究、30(8)：380～383.

2）石榑清司（1988）　小学校児童における傷害の発生の各種要因 ― 打撲、挫傷について ―、保健の科学、30(3)：193～199.

3）石榑清司・石榑登志子（1989）　正課体育における傷害の発生と各種要因、体育学研究、34(3)：215～226.

4）井上千枝子・音海紀一郎・石山恭枝・青山昌二（1993）　質問紙法調査による学生の体力意識の統計的分析、CIRCULAR　54：37～42.

5）本多秀吉・石川暉康（1990）　高等学校における傷害の発生とその防止に関する実態調査、神奈川県体育センター平成2年度体育センターレポート、18：27～36.

6）本多秀吉（1991）　中学校における運動時の傷害の発生とその防止に関する実態調査、神奈川県体育センター平成3年度体育センターレポート、19：19～28.

7）日本体育・学校健康センター東京都支部（1995）　学校安全、30：16～23.

資　　料

獨協中学校・高等学校（1996.3）保健室

資料4　受傷による医療機関受診者数

1994年度

	骨折	捻挫	脱臼	頭部打撲	眼球打撲	他の打撲	捻創切創	靱帯損傷	筋捻傷	歯折	計
中学計	17	9	0	5	6	3	5	0	0	2	47
高校計	8	16	1	2	4	1	1	2	1	0	36
合　計	25	25	1	7	10	4	6	2	1	2	83

1995年度

	骨折	捻挫	脱臼	頭部打撲	眼球打撲	他の打撲	裂傷切創	靱帯損傷	筋挫傷	挫傷	頭部内出血	刺傷	爪剥れ	歯折	その他	計
中学計	14	13	0	2	4	0	7	1	0	2	1	1	1	2	0	48
高校計	15	18	1	3	3	3	3	1	1	4	0	0	0	1	1	54
合　計	29	31	1	5	7	3	10	2	1	6	1	1	1	3	1	102

資料5　傷害の種類別件数など

1995年度

	骨折		捻挫		脱臼		頭部打撲		眼球打撲		他の打撲		裂傷切創		靱帯損傷		筋挫傷		挫傷		爪剥がれ		刺傷		歯折		その他	計
	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H		
校舎内 含体育館	3	11	2	10		1	2	1	2	1		1	6	1	1	1				3	1		1		1		1	50
校舎外	7	1	9	7				2	1	2		2	1	1				1	2						1	1		38
学校外	4	3	2	1					1					1						1								13
始業前	1						1																					2
授業中	1	7	2	11			1					1	3	2		1				1					1			31
休時間	3	3	5	2		1		2	1	1			1		1			1		2					1	1		25
放課後		1							2	1																		4
部活動	9	4	4	5				1		1		2	2						1	1								30
学校行事			2						1				1	1					1		1		1				1	9
中学計	14		13		0		2		4		0		7		1		0		2		1		1		2		0	47
高校計		15		18		1		3		3		3		3		1		1		4		0		0		1	1	54
合　計	29		31		1		5		7		3		10		2		1		6		1		1		3		1	101

Mは中学生，Hは高校生である。

資料３　内科的治療による種類別件数

（高校生のみ）

月	1 頭痛	2 発熱	3 貧血	4 不快	5 胃痛	6 腹痛・下痢	7 咽頭痛	8 咳	9 歯痛	10 眼疾患	11 鼻血	12 その他	計
４月Ｈ１	3	1		2	2	3	2			1		2	16
Ｈ２	4			1									5
Ｈ３	1											1	2
５月Ｈ１	8	1		4		5	1		2			2	23
Ｈ２	4		1	3	1	4	6	1			2	1	23
Ｈ３	4	1		2	1	2	2	4	1	3	1	1	22
６月Ｈ１	12	1		3	1		5		2			7	31
Ｈ２	6		1		1	2	2		1			1	14
Ｈ３	6				1	2	1	1	1				12
７月Ｈ１	6	2		1		6	1					3	19
Ｈ２					1	1				1		1	4
Ｈ３	3				1	3						1	8
一学期計	57	6	2	16	9	28	20	6	7	5	3	20	179
９月Ｈ１	10	1	1	2	5	15	4	1			2	9	50
Ｈ２	4		1			5	1					5	16
Ｈ３	2				2	4	1			2		6	17
10月Ｈ１	7	1		2	1	4	4	1			1	9	30
Ｈ２	7				3	2	2			2	1	4	21
Ｈ３	3				1	3	3			1		3	14
11月Ｈ１	8			8	2	6	4		2			8	38
Ｈ２	3			1	1	4	2		2			6	19
Ｈ３	2					1	1	1				8	13
12月Ｈ１	2				1	1	2					2	8
Ｈ２													0
Ｈ３	1			1	1	1						1	5
二学期計	49	2	2	14	17	46	24	3	4	5	4	61	231
１月Ｈ１	5	2		4	1	3	3	2	3			9	32
Ｈ２	2			1	1	2	1		1			4	12
Ｈ３						1							1
２月Ｈ１	8	3		8	3	5	3	3				12	45
Ｈ２	4	1			1	3	1					3	13
Ｈ３													0
３月Ｈ１								1					1
Ｈ２												1	1
Ｈ３													0
三学期計	19	6	0	13	6	14	8	6	4	0	0	29	105
一年総計	125	14	4	43	32	88	52	15	15	10	7	110	515

資料２　外科的治療による傷害の種類別件数

（高校生のみ）

月	1 すり傷	2 切傷	3 刺傷	4 打撲	5 捻挫	6 突指	7 靴ずれ	8 骨折	9 腰痛	10 その他	計
４月Ｈ１	7			1	3			1		3	15
Ｈ２	8	2		2	4	3				3	22
Ｈ３	8	3	1	1	3						16
５月Ｈ１	15			4	3	1	1			5	29
Ｈ２	11	1		5	3	3				5	28
Ｈ３	19	2		3	1	4			1	4	34
６月Ｈ１	19	3	1	6	10	10		3		5	57
Ｈ２	14	3		3	4	5				2	31
Ｈ３	12	2	1	3	4	7	1		1	2	33
７月Ｈ１	4	1		3	3	4				1	16
Ｈ２	5			4	1	2				4	16
Ｈ３	5			3	1				1	1	11
一学期計	127	17	3	38	40	39	2	4	3	35	308
９月Ｈ１	6			9	5	2	1		2	9	34
Ｈ２	3			6	1	1		2		5	18
Ｈ３	14	1		5	2	7	2	1			32
10月Ｈ１	5	2	1	6	4	3		1		8	30
Ｈ２	9			7	8	1	1				26
Ｈ３	6	1		4	4	2				4	21
11月Ｈ１	2	3	1	10	9	2				5	32
Ｈ２	3	3		8	5	6			1		26
Ｈ３	10	9		3	6	2	3			2	35
12月Ｈ１	1									1	2
Ｈ２											0
Ｈ３		1		1	1	1					4
二学期計	59	20	2	59	45	27	7	4	3	34	260
１月Ｈ１	5			7	3	5		1		1	22
Ｈ２	6			5	2					4	17
Ｈ３		2					2				4
２月Ｈ１	6	2	1	9	8	1	1	1		6	35
Ｈ２	4	1		4	2					2	13
Ｈ３											0
３月Ｈ１					1						1
Ｈ２				1							1
Ｈ３											0
三学期計	21	5	1	26	16	6	3	2	0	13	93
一年総計	207	42	6	123	101	72	12	10	6	82	661

Ｈ１は高校１年生，Ｈ２は高校２年生，Ｈ３は高校３年生である。

資料１．　保健室利用状況

1995年度

		4月	5月	6月	7月	(1学期計) '95	'94	9月	10月	11月	12月	(2学期計) '95	'94	1月	2月	3月	(3学期計) '95	'94	(1年間計) '95	'94
MⅠ	内	6	12	9	6	33	53	16	22	11	4	53	42	14	6	1	21	39	107	134
	外	12	16	32	10	70	86	23	26	19	3	71	113	13	13	3	29	33	170	232
MⅡ	内	8	31	13	8	60	22	11	33	24	9	77	51	18	18	0	36	28	173	101
	外	12	24	27	6	69	53	21	21	18	4	64	67	13	11	4	28	26	161	146
MⅢ	内	12	9	16	6	43	58	27	27	29	9	92	52	22	21	4	47	28	182	138
	外	14	13	19	16	62	34	30	34	28	6	98	73	21	17	2	40	22	200	129
中学計	内	26	52	38	20	136	133	54	82	64	22	222	145	54	45	5	104	95	462	373
	外	38	53	78	32	201	173	74	81	65	13	233	253	47	41	9	97	81	531	507
合　計		64	105	116	52	337	306	128	163	129	35	455	398	101	86	14	201	176	993	880

		4月	5月	6月	7月	(1学期計) '95	'94	9月	10月	11月	12月	(2学期計) '95	'94	1月	2月	3月	(3学期計) '95	'94	(1年間計) '95	'94
H１	内	16	23	31	19	89	47	50	30	38	8	126	58	32	45	1	78	65	293	170
	外	15	29	57	16	117	63	34	30	32	2	98	73	22	35	1	58	47	273	183
H２	内	5	23	14	4	46	29	15	21	19	0	55	49	12	13	1	26	28	127	106
	外	22	28	31	16	97	70	18	26	26	0	70	61	17	13	1	31	32	198	163
H３	内	2	22	12	8	44	31	17	14	13	5	49	49	1	0	0	1	1	94	81
	外	16	34	33	11	94	55	32	21	29	4	86	42	4	0	0	4	1	184	98
高校計	内	23	68	57	31	179	107	82	65	70	13	230	157	45	58	2	105	94	514	357
	外	53	91	121	43	308	188	84	77	87	6	254	175	43	48	2	93	80	655	444
合　計		76	159	178	84	487	295	166	142	157	19	484	332	88	106	4	198	174	1,169	801

上段は中学生（M）、下段は高校生（H）の保健室利用状況である。
内は内科的治療、外は外科的治療である。

が21件という結果を示している。

2）体力の自己評価について

体力の自己評価を求める質問形式は、ここ数年をみてもきわめて多様である[4]。今回の調査においては、下記の様式において実施した。

表4

体力の5段階自己評価によって、受傷群と傷害を受けなかったと回答した非受傷群と比較すると、受傷群の方が非受傷群に比べて、体力の高い側への回答を示していた。また、同時に日頃の疲労感についての調査もおこなったので報告をしておく。(「もつことが多い」から「ほとんどない」など4選択肢）との関連をみたところ、この質問では、受傷・非受傷群との間に回答傾向の相違はほとんどみられなかった。

3、まとめ

1）児童・生徒の学校生活における事故発生の要因を学校関係者が把握し、授業時における安全対策、クラブ活動における指導者の傷害とその防止に関する意識等を身につけ、安全管理、救急時の対応、心肺蘇生法の研修等が今後の課題として残される結果となった。

2）傷害の種類、傷害を受けた時間帯（A・B）について、傷害発生場所について、傷害を受けた時の処置、受傷部位について、体力の自己評価について、疲労感について、以上において、高校3年生を対象としてみてきたが、今後はこれらの結果をふまえながら、男女の調査、大きな集団を調査して比較分析を進めたい。

本稿に資料を提供していただきました本校養護教諭・長谷川淳子先生に感謝の意を表わします。

傷害を受けた時の処置のDについて、1は入院である。2は通院である。3は初診のみである。4は応急処置のみである。5はその他である。たとえば、捻挫についてみてみると、29件中、通院13件、初診のみ5件、応急処置のみ8件、その他3件である。全体をみると、入院2件2%、通院51件41%、初診のみ17件14%、応急処置のみ42件34%、その他13件10%である。

次に受傷部位について、捻挫の場合9割近くが下肢に集中している。

突き指の場合は手の受傷が多い。

打撲の場合は頭顔部と下肢に多くみられた。

擦過傷の場合は下肢に多くみられた。

骨折の場合は上肢に多いという傾向がうかがわれた。

本多、石川らの報告[5]による、日本体育・学校健康センター神奈川支部に提出された災害報告書資料による傷害別発生率では、捻挫が31.9%で最も高く、次いで骨折が29.3%、打撲が18.1%の順となっている。また、学年別発生件数および発生率としては、1年生は、1864件（37.3%）、2年生は、2071件（41.4%）、3年生は、1060件（21.2%）、4年生は、5件で（0.001%）であった。また、体育授業時と部活動時における発生件数は、表2の通り、男女の傷害発生の割合は[2]、体育授業時も部活動時もほぼ同様の傾向が認められたと報告している。本校の調査結果では、時間帯のBに示してある体育授業中35%、クラブ活動中44%で、クラブ活動中の受傷がどちらかといえば多い傾向にあるといえる。

阿部の報告[1]にみる傷害の種類別発生状況では、男女ともに捻挫が多く、42%である[表3]。その捻挫部位では、足首が91%を占めている[1]。

本校の調査結果と同様な傾向を示している。

また、本校の資料2による高校2年生の保健室利用状況の傷害の分類をみると、多いものから順に、すり傷が63件、打撲が45件、捻挫が30件、突き指

表2　男女別発生件数

	体育授業時	部活動時
男　子	1,554	1,978
女　子	677	691

表3　傷害の種類別発生状況

傷害の種類	割　合（%）		
	男	女	全体
捻挫	44.3	36.4	42.2
骨折	13.1	4.5	10.8
筋、けん断裂	8.2	4.5	7.3
肉ばなれ	6.5	4.5	6.0
打撲	6.5	0	4.8
脱臼	6.5	0	4.8
挫傷	3.3	4.5	3.6
突指	0	13.6	3.6
その他骨膜炎など	11.6	32.0	16.9
計	100	100	100

表1　傷害の種類別件数など

	件数	A 時間		B 時間帯					C 場所						D 処置				
		1	2	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5
捻挫	29	13	16	10	12	4		3	15	9		1		4		13	5	8	3
突き指	20	10	10	13	5		1	1	10	9				1			2	14	4
打撲	16	6	10	4	8			4	6	5			3	2		6	3	6	1
擦過傷	16	9	7	11	3			2	12	1				3			2	12	2
骨折	10	5	5		6	2		2	4		1		1	4		9	1		
腰痛	7	1	6	1	5			1	3	3				1		5	1		1
裂傷	5	3	2	2	2			1	4				1			4	1		
靱帯損傷	4	4			3			1	3				1		1	3			
関節痛	4	1	3		3			1	3					1		2			2
脱臼	3		3		3				1			2				3			
筋断裂	2		2		1			1	1					1		1		1	
切傷	2		2	1				1		1				1		1	1		
半月板損傷	2	2			1			1	1					1	1	1			
その他	5	1	4	2	3				4	1						3	1	1	
計	125	55	70	44	55	6	1	19	67	29	1	3	6	19	2	51	17	42	13
%		44	56	35	44	5	1	15	54	23	1	2	5	15	2	41	14	34	10

A－1午前　2午後　　B－1体育授業中　2クラブ活動中　3休み時間　4放課後　5その他　　C－1グラウンド　2体育館　3教室　4校舎内　5校舎外　6その他
D－1入院　2通院　3初診のみ　4応急処置のみ　5その他

活動中55件、休み時間6件、放課後1件、その他19件となっている。それを%に直すと、体育授業中35%、クラブ活動中44%、休み時間5%、放課後1%、その他15%となっている。クラブ活動中が44%で全体の4割強を占めている。

傷害発生場所のCについて、1はグラウンドにおける傷害である。2は体育館における傷害である。3は教室内における傷害である。4は校舎内における傷害である。5は校舎外における傷害である。6はその他における傷害である。全体をみると、グラウンド67件54%、体育館29件23%、教室1件1%、校舎内3件2%、校舎外6件5%、その他19件15%である。グラウンドが半数を上まわっている。

3　休み時間

4　放課後

5　その他

［10］　傷害を受けた時の処置

次の項目から選んで番号で記入して下さい。

1　入院

2　通院

3　初診のみ

4　応急処置のみ

5　その他

調査対象は、東京都内私立Ｄ高等学校（男子校）３年生262名である。

調査時期は、1993年６月である。

質問項目の「あなたは高校２年生の１年間に傷害を受けたことがありますか」、「ある」「ない」のどちらかに回答をしてもらう。この結果「ある」87名（33%）、「ない」175名（67%）の回答を得た。「ある」と回答した生徒には最多３件まで記入するように指示した。以下において、傷害を受けたことの「ある」に回答した87名について単純集計による分析を試みた。

２、結果および考察

１）傷害の種類別件数等について

表１に傷害の種類、傷害を受けた時間帯、傷害を受けた時、傷害を受けた場所、傷害を受けた時の処置についての回答結果を示した。

これをみると、傷害の件数は、捻挫29件、突き指20件、打撲16件、擦過傷16件、骨折10件、腰痛７件と件数の多いものから順にあげてある。なお、捻挫23%、突き指16%で全体の約４割を占めている。

傷害を受けた時間帯について、Ａ時間帯の１は午前、２は午後における受傷時間帯である。たとえば、１行にある捻挫の場合、午前13件、午後16件。突き指の場合、午前10件、午後10件ということがわかる。全体からみると、午後の方が傷害の発生率が高いことがわかる（44%：56%）。

次に時間帯のＢについて、１は体育授業中の傷害である。２はクラブ活動中の傷害である。３は休み時間中の傷害である。４は放課後の傷害である。５はその他の傷害である。たとえば、捻挫29件の場合をみると、体育授業中10件、クラブ活動中12件、休み時間４件、その他３件となっている。全体からみると、体育授業中44件、クラブ

高校生の傷害の発生と実態調査

音　海　紀一郎（保健体育科）
町　田　みつ子（元養護教諭）
音　海　哲　子（相模女子大学）

1、研究目的・方法

学校管理下における児童・生徒の傷害発生の実態把握と事故防止は、安全指導上の重要なことである。これまでに小学生、中学生、高校生を対象とした事故災害の発生状況について調査検討された論文が多く発表されている。[2)、3)、6)、7)]

本研究では、発育発達の旺盛な高校生について、学校生活の中で事故傷害の発生の有無、傷害の種類、傷害発生の時間帯、傷害発生場所等を調査し、保健体育指導上の基礎資料として、調査を通しておさえてみようとするものである。

質問項目および形式は以下によっている。

［4］　あなたは、この１年間に傷害を受けたことがありますか。

　1　ある　　2　ない

［ある方に］

［5］　傷害の種類

［6］　傷害の部位

［7］　傷害を受けた時間帯

［8］　傷害を受けた場所

　次の項目から選んで番号を記入して下さい。

　　1　グラウンド

　　2　体育館

　　3　教室

　　4　校舎内

　　5　校舎外

　　6　その他

［9］　傷害を受けた時

　次の項目から選んで番号で記入して下さい。

　　1　体育授業中

　　2　クラブ活動中

－執　筆　者－

木　村　重　利 …… 国語科教諭
倉　橋　良　伸 …… 社会科講師
河　野　直　樹 …… 英語科教諭
音　海　紀一郎 …… 体育科教諭
町　田　みつ子 …… 元養護教諭

紀　要　委　員

兼　田　信一郎　　木　村　重　利
田　中　千　絵　　藤　本　義　信

研究紀要　第14号
平成８年３月１日　印刷
平成８年３月20日　発行
発行者　東京都文京区関口３丁目８番１号
　　獨協中学・高等学校　紀要委員会
印刷所　東京都北区王子本町２丁目５番４号
　　株式会社　　王　文　社

Review of Dokkyo Secondary High School

No. 14 1996

Contents

Articles :

A Criticism of Poetic Rites
— Remnants of Ritual Songs and Ballades
..... Shigetoshi Kimura ··· 1

A Survey on Physical Accidents in
High School Students ..... Kiichiro Otomi ··· (1)
Mitsuko Machida
Tetsuko Otomi

A Prosopography of the Later Roman
Empire in the Late Sixth Century
— Who's the *Caesar* Germanus ? —
..... Yoshinobu Kurahashi ··· (11)

My Happy Days in Britain ..... Naoki Kono ··· (35)

Edited by

Dokkyo Secondary High School Review Committee
Address : Dokkyo Secondary High School
8-1, 3chôme, Sekiguchi, Bunkyo-ku, Tokyo 112